
Persona 3 F ~ After Days ~

水素

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P e r s o n a 3 F \ A f t e r D a y s \

【Nコード】

N 8 7 2 6 L

【作者名】

水素

【あらすじ】

15年前、日本中を巻き込んだ同時多発無気力症……その最中全人類の命をかけ『死』と向き合った若者達がいた……

それから10年後本州の北端に有る都市で怪奇事件が発生し巷を賑わせた。
その事件の裏には、ある組織と対人し平穏を取り戻した若者達がいる……

だが彼らは知らない。幾度と無く起こされた事件の当事者がまだいることを……

この小説は、アニメ「PERSONA - trinity soul」 - と、「PERSONA 3」両作の後日談を足し合わせた？ような物です。

誰でも楽しめると思うので、よかったら目を通してください。

Episode 0 Prologue

〔2012年 12月31日〕

世間一般の大通りは、新年を二人っきりで過ごすべく時間を浪費している（つぶしている）カップル達と、その余波に乗っかろうと、「大晦日フェア」やら、「新年まで、あと〇時間…」という商店側とでこった返っていた。

最も、何処も例外は無いのだが…

同日 北陸の新興都市・綾凧市

ここ綾凧市も世間と同じく、歓喜に溢れていた、ただ一部を除けば…

綾凧市・綾凧署

とある一室

一人の男が窓辺に立ち外を眺めている。

「なんだか、外が騒がしいな…」

Episode 1 Reverse

綾凧市・綾凧署

とある一室

一人の男が窓辺に立ち外を眺めている。

「なんだか、外が騒がしいな…」

そう呟いた後、先程まで、掛けていた椅子に再び座り大きくため息を漏らした。

「フーーーー」

数秒上を見つめた後ゆっくりと目を閉じていく…

『俺達は、なんで立てねえ…』

『ちよつと…まちなさいよ…ねえ』

『行かないで!!』

「…………ツ」

「ガタツ」

「…夢か」

軽く呼吸を整えた後先程まで座っていた机に目を向ける、机上の資料を手に取り軽く漏らす。

「リバーズ事件か…」（リバーズ事件

謎の連続猟奇事件。被害者は肉体と皮膚が表裏反転した死体となっ

E p i s o d e 2 A n e n c o u n t e r (前書き)

今回は、いろいろな会話が、メインで「」を多用してるので、ちょっと読みにくいかもしれませんが。

過ぎた頃ドアの方から多数の足音が、聞こえてくる。

『コンコン』

「どうぞ」

ノックに対して一声掛けてからドアの方を向く、すると先程の電話相手の二人＋一人の少女が入ってくる。

「お待たせして済まない参事官」

「いえ、あと…その子は、いつたい…？」

「ああ、まことに言いくいんだがこの子がその、預かって欲しい物だ」

「何故私に？迷子なら少年課に」

「普通ならそうするが、面倒な事にリバーズ事件に関係してるんだ」

「そんな…！事件は、終わったはず…」

「いや事件に直接関係しては無いんですが署長のリストに名前が

榊崎…！急に話しに割り込んでくるんじゃないかねえとまあこんな感じ

なんだが、引き受けてくれますか？参事官」

「そういう事情でしたら、引き受けましょう」

「そう言ってくれて助かる。おい、榊崎 あっはい、えっとこっ

ち追いで じゃ後は、頼みましたよ。 ほら行くぞ！ 僕まだ一言

しか話…」

刑事課の二人は、用件を済ますと騒がしくも、さっさと出ていってしまった。

（神郷が持っていた適性者のリストか…）

話しに出たペルソナ使いのリストの事を考えていると、視線を感じた。

「あつと、ほつといて悪かったな…君名前は？」

「… 西條 麗奈です」

先程の‘ほつといて’の単語にムツときたが名前を答える

「そうか、俺は真田 明彦、真田でけっこうだ」

「えつとじゃあ真田さん、これからよろしくお願いします」
「ああ、こちらこそ」

Episode 2 An encounter (後書き)

皆さんこんにちは

水素という物です。

次話では、アクシヨン？もといバトルを書いてみようと思っ
ていますので、生暖かい目で見守ってください。m()m

ではまた次回で。

Episode 3 Mask (前書き)

前話の区切り方がへんで文字数が、前話と比べるとかなり多いです
(^| ^ ;)

初心者故のミスなのであまり気にしないでください。

Episode 3 Mask

「えつとじゃあ真田さん、これからよろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ」

「そこにある、空いてる椅子は、使ってくれて構わない」

壁に建てかけてあるパイプイスを目で指しながら言う。

「えつ… あっはい」

突然無頓着だった彼が、声をかけてきたので驚いて声を荒げる

「さて、君の預かりを依頼されたのは俺だが正確にはここ、綾風署での預かりとなっている。

なのでここでの寝泊まりはもちろん、警察官の邪魔にならなければこの施設も自由に使ってくれて構わない。

説明は、以上だ何か質問は？」

「えつ… あっはい特には」

真田の早口と威圧感に押され反応が若干遅れる

「俺は、今晚宿直でここにいます 何かあったらすぐ飛んで来い」

この台詞に多少頬が赤くなる。

（や、やば顔が熱い）

そんなことは知らない真田は、お構いなしに話しを続ける。

「何か他に聞きたいことは、有るか？」
(来た！！！助け船)

以外な方からの助け船に驚きながらも乗っかろうと言葉を探す 無論真田は、助け船を出したとは、きずいていない

「え、えと その」

必死に言葉を出そうと奮闘したが出てきたのは、無情にも心とは裏腹な物だった。

「グーーーーー」

その擬音が部屋に広がると同時に、頬の赤みが顔全体に広がった。

「そつえば、俺も腹が減ったな…」

赤面して言葉が出ない麗奈を尻目に話しを進めていく。

「よし、行くか」

「えと何処にですか？」

「何処つて食堂に決まっているだろう」

「え、社員食堂つてもう閉まってるんじゃない…」

「いや、ここのは特別でな夜中までやってる」

歩行速度が、速い真田にかろうじて、付いていきながら言葉を二、三度交わしていると、食堂に着いた。

ただでさえ夜中の時間帯で暗いのにカウンター席の薄暗い照明しかついてないのでかなり薄気味悪い。

だがそんなことは、お構いなしにカウンターへ近づきさっさと座っ

てしまった真田、慌てて後を追いつ隣へ座る。
それを確認すると厨房に声をかける

「すみません！」

辺りは、鎮まり帰っている
多少いらつきながら先程とは、少し大きな声で再び呼びかける。

「すみません！！」

すると数秒たってから奥からパタパタと足音が聞こえてくる。

「はいはい、どちらさまで？…あら明彦君夜食かい？」

『どうも、俺はいつもので…っと注文決まったか？』

「えっとこの特製ラーメンで」

「はいよ“特製ラーメン”に“真田スペシャル”ねちょっと待つととくれよ」

厨房のおばちゃんは私を疑惑の眼差しで見ていたが隣にいる真田が割り箸に楽しそうに手をかけているのを見て安心して奥に引っ込んでいった。（今、変な目で見られてたようない…てかそれ以前に“真田スペシャル”って何！？）

隣にいる真田に直接聞こうと思ったが、楽しげに割り箸をいじっているのを見てためらう。

そうこうしている内に自分のラーメンが、運ばれてきたのでそれを口に頬張る。

ふと横を見るとそこには肉うどんの上に牛丼を乗つけたような物を貪る真田がいた。

「ん、どうした？」

視線にきずいたのか声をかけてきた

「……い、いえ」

だがいろいろな事で、声を失っている麗奈は、こつ答えるので精一杯だった。

　数十分後

先に間食した真田は、麗奈が食べ終わるの見計らって声をかける。

「先に、宿直室に行け、そこなら休めるはずだ」

「真田さんは、行かないんですか？」

「俺は、金を払ってから行く…それに、まだやる事が残っている」

そう言うレジの方へ向かって行く真田。

仕方ないので言われた通り宿直室に向かうことにする、だがここで一つ重要な事がわかる。

「宿直室って…何処？」

散々迷った後たどり着いたのは、最初に真田といた部屋だった。

ゆっくりともたれかけつつドアを開けると書類とディスプレイとにらめっこしている真田の姿だった。

「ん？…お前宿直室へ向かったんじゃないのか？」

「それが、道に迷って」

半分諦めながら言葉を探す。

「なら、そのソファーを使え」

「ありがとうございます、じゃあお言葉に甘えて」

そついうといきなりソファーに寝転ぶ。

しばらく、それを見ていた真田だがまたディスプレイに視線を戻す。

1、2時間過ぎた頃

休もうと、手を置いた時突然バックサイドの窓ガラスから轟音が響き渡る。

「なっ……」

突然の参事に飛びのきながらも体制を立て直し臨戦体制を取る。

「え、…何これ」

さっきまで寝息を立てていた彼女だがさすがに起きる。

「すぐに、ソファーの影に身を隠せ！」

真田の激が飛ぶ。

言われた通りに身を隠し辺りを見渡すと、窓辺に立つ仮面の男と対人している真田の姿があった。

『お前は、何物だ』

「……………」

『どうやってここ（2階）にきた』

「……………」

『お前の他にメンバーが、居るのか？』

周囲を警戒しながらも矢次に質問をする様は、さすが警察官という

ことだが相手は、無反応な故に仮面のせいで表情が読めない。

「お……」

『？』

「お…女は、何処だ」

『女…だと』

普段なら白をきるが心当たりが有るのではったりを噛ませない。

「ここに、女が、居ただろう…そいつを探してる」

『警察が、そう簡単に口を割ると思うか？』

「…それもそうだな、なら」

数秒後再び声を出す、内容は用意に予想できる。

「力付くで聞き出すまでだ!!」

すると仮面の男は、手に付けていた爪を振りかざした。

だがその爪が、食い込む前に真田の右ストレートが、カウンターの要領で男の仮面（顔面）に炸裂していた。

「グオ…」

予想外の攻撃によるめく

『そこだ!!』

その隙に男の懐に入り込み連撃を畳み込む。

「カハッ…」

拳の連撃に耐え切れず壁に倒れる。

『さて…先程の質問に答えて貰おうか』

拳を軽く振り払いながら、男に近づく。

「…クソッ」

がむしゃらに突っ込んでくるが、軽く躲し一発入れる。

『答える気が無いか…』

そういうと、転がっている男に歩を進める

「ちっ…仕方ない」

そう言つと窓辺に乗り飛び下りる。

『なっ…逃がしたか』

窓に駆け寄り下を見ると走り去る男が見える。

「カ、カッコイイ」

思わず本音が、漏れる。

『そうか？ まあいい、とりあえずここから出るぞ！』

「え、なんで…」

『いいから早くしろ！』

言われた通りに廊下に出て真田と共に走る。

「あの？なんで逃げるんですか？あんな強いのに…」

『あの男がいなくなる時に隣から多数の足音が、聞こえた　おそらく相手は、多数だ俺一人じゃあ部が悪い』

あの一瞬でそこまで分かるのはさすが警察関係者である。

『！！っ俺の後ろに隠れる！』

そう言うのと、前の通路脇から出た仮面男二人にリアットを食らわせ薙ぎ倒す。

その隙にさっさと逃げる。

『正面玄関から外に出て、車で逃げるぞ』

そう言い二人同時に外に出る、あの仮面は、見当たらない。

『チャンスだっ　一気に行くぞ』

3時方向に止めてある車にたどり着く。

「真田さん！！鍵っ」

『…ほらっ』

真田から鍵を受け取り助手席に滑り込む。

『よし！…』

「真田さん後ろ！！」

『なっ…クソッ』

その瞬間ドアポケットに忍ばせてある拳銃に手をかけ男の仮面に銃口をたたき付ける。

『…支給品もたまには役立つな』

それだけ言つと運転席に乗り込み車を出した。

E p i s o d e 3 M a s k d (後書き)

次話は、文字だけでなくページ等できるだけ気をつけるつもりです。

Episode 4 Goddess transmission (前書き)

バトルアクション第二段ですどうもアクションは、書くのが長引いてしまいます、次からはもっと短時間で書けるように頑張ります。

Episode 4 Goddess transmission

夜中の高速を一台の車が、飛ばしている。

「あの、真田さん…どこに向かっているんです？」

『俺のアパートだ、先程のアレで公共施設は、危険だとわかったからな。』

「はあ、なるほどでもそんなスピード出さなくても…」
運転席前の掲示を見ると130?を越えている。

『ここは、高速だ、問題無いそれに…それに?』早くあの場から遠ざかりたくてな』

「何か理由が、有るんですか？」

『いや特に無いんだが…嫌な予感がしてな』

それ以降喋らない真田。

(あまり追求しない方がいいかな)

そう思い麗奈自信も黙っている。

突然麗奈が何かに気づく

「何か音しません？」

『何!?、それは何処からだ!!』

「えっと…後ろの方からだと思います。」

『ちっ、もう来たか…』

何が来たのか聞こうとしたら後ろからの音が大きくなる。

〔バルルルル〕

『やはり追って来たか。』

「やはりって何がですか？」

『おそらくさっきの奴らだ、大方お前を奪いに来たんだろうな。』

「そんな、なんで私が…」

『俺もよくわからないが多分お前の“ペルソナ”に関連している』

「そのペルソナって何ですか」

『ペルソナって単語自体は、心理学用語で「もう一人の自分」って意味だ』

「もう一人の…自分？」

『ああ、だが俺らの知っている意味には、こうもあった「邪悪な物から己を守る精神の鎧」とな。』

「その…ペルソナって物の事は、わかったんですがなんで真田さんは、私がペルソナ使えるってわかったんです？」

『お前が、俺の所に来た時を覚えているか？』

「え、はい」

『その時の会話にリストがどうか覚えてるか？』

確かそんな会話をしていたような気がする。

『そのリストは、俺の知り合いが作った物でなペルソナを使える可能性の有る人物の名前が、書いて有る。』

「なんでそんな物が…」

と言いかけた時銃声が響く

バンツ、ガンツ

「きゃあー!!」

いきなりのもので悲鳴を上げる。

『安心しろ！この車は、特別製だ銃弾なんざへでもない！』 確かに真田の言うとおり弾が当たっている音は、聞こえるが止まる様子はない。

次第に銃声は、止んでいったがそれと入れ代わりに奇怪な触手が、伸びてきた。

『なんだこれは!?!』

その触手に驚き一瞬スピードが落ちその隙にバイクが横付けされる。

『くっ…仕方ない』

そう言うのとハンドルの反対側に手をかける。

「真田さん何を…」

『頭を抱えて伏せる!!』

そう怒鳴ると反対側に掛けた手を思いっきり戻す。

すると車体はスピンし横のバイクを蹴散らし急なスピンの避けきれない触手は、契れ飛ぶ。

車が止まるやいなや発煙筒から煙りがでて辺りを満たす。

仮面の男の背中から浮き出るような感じの目玉が、再び触手を伸ばそうとした時。

「ガァン！！」

奇妙な銃声と共に煙りの中から古代ギリシアのような格好をした巨人が現れる。

「カエサルッ『デッドエンド』」

その掛け声と共に、巨人が手に持っていた大刀を振りかざし目玉に向かって振り降ろした。

「バァァン！！」

轟音と共に、目玉のような本体は、砕け血肉が辺りに飛び散る。

「ふん、見かけ通り軟弱だったな。」

先程の攻撃で対一は、危険だとわかったのか大人数が集まってくる。

（召喚…イチモクレン…）

仮面という仮面全てからクモヒトデが召喚され辺りは、触手だらけになった。

「多勢に無勢が確かに不利だな、だが…相手に取って不足は無い！！」

そついうと無謀にも突っ込んでいく。

「うおおカエサルッ『マハジオダイン』！！」

古代ギリシアを作り上げた皇帝カエサルが、左手を空にかざすと無数の落雷が目の前に落ち、クモヒトデを次々に黒焦げにしていく

「まだだ、『ジオダイン』」

雷の難を逃れた敵にもう一発雷の一撃を浴びせる。
だが最初はイケイケ状態だったが如何せん、敵の数が多過ぎてすぐに押され気味になる。

「クツ」

さすがの真田にも焦りが見える。

（召喚…アンズー…）

それに追い打ちをかけるように新たなペルソナが召喚される。

「クソツカエサル『デッドエンド』」

気力を込め攻撃を仕掛けるがなんなく交わされてしまう。

もう一度仕掛けようと召喚器に力を込めるが足がふらついてしまう
「しまっ…久しぶりの召喚のビハインドか。」

直ぐさま体制を立て直したが、アンズーは、的確にその隙について来る。

（…真空破…）

その結果真田は、もろに攻撃を喰らってしまう。

「グオ…」

その時召喚器が手から弾かれる。

（しまった！！あれが無いと召喚が、しかも敵に奪われたらまずい。）

しかし、何物かの手が、真田の召喚器に伸びていく。

「…ここまでか」

多分彼は、死を覚悟したのだろっだがその召喚器を手にしたのは、
真田でも仮面の男のどちらでもなかった。

「なっ…麗奈！どうしてお前が。」

真田が声をかけるが、彼女には真田の声も目の前の光景も頭に入っていないかった。

ましてや彼女の目には、目の前の物とは別の光景が写っていた。

そこには、何も無い純白な世界が広がっていた…

（ここは何処？）

自分は、その中に浮いていた

（なぜ、私はここに居るの？）

ゆっくりと辺りを見回す、すると目の前には、周囲と同化するように全身純白の少年が、居た。

（あなたは、誰？）

【僕の……名は……里……】

目の前の少年は、問い掛けに答えてくれたようだがノイズが入って聞き取れ無い。

（なぜ、私の前に居るの。）

【君…必要……さ】

（どうして、私が必要なの？）

【仲間…助ける…めさ】

だんだんちゃんと聞き取れるようになってくる。

（どうして私に？）

【君が…番近く…居る…さ……れに】

（それに？）

【君も彼を助きたいんじゃないの？】

（彼？…彼とは誰？）

【それは、僕にはわからないだが、君の心がそう言ってる】

（確かに私は、彼を…真田さんを助きたい。

でもどうすればいいの？）

【君は、もう力を持つているはずだ…後は、扉を開けるだけだ】

それを聞いた後右手に違和感を感じる、見るとそこには、拳銃が握られている。

（え、これってピストル！？）

【それは鍵、君の心の扉を開くためのね】

（心の扉…）

【君の想いが、本当になるとき、君の心は力に変わる】

（私の…想い？）

【さて、僕ができるのはここまでだ…後は、君自信…決める…ない】

少年の声が、薄れて行く。

気が付けば、先程まで見ていた光景に戻っていた。

（視界の隅には真田が倒れている。）

「真田さん!!」

倒れてる真田に、駆け寄る。

『俺に、構わずさっさと逃げろ…』

「そんな、真田さんをおいて行けません。」

『何、心配するな俺もしばらくすれば動ける…』

だが明らかに真田が逃げるよりも敵の行動の方が、速いことは明確だ。

（私が…守らなきゃ）

【彼を助けたいんじゃないの?】

先程の少年の言葉が蘇る、すると右手に力がこもり握っている物を、米噛に持つてくる。

「ペ…ル…ソ…ナ…」

「ガアン!!」

麗奈の体から透明な破片が巻き上がりその破片の中から神々しい女性性が浮かび上がる。

《我は、汝……汝は、我。

我、汝の心の海より居出し物なり。

戦塵の女神…イシユタル》

「なっ…召喚…したのか」

「イシユタルツ『メギド』」

麗奈の召喚したオリエント神話の女神の手に光の球体が、集まりそれを放つ。

周りの魑魅魍魎が一瞬で塵になる。

（次ッ！！）

「イシユタルッ『ディアラマ』」

目の前の敵が、大方いなくなるのを確認すると、真田に回復魔法をかける。

だが敵も侮れない回復魔法をかける一瞬で、間合いを詰めてくる。

（まずい…やられる！！）

思わず、目を瞑ると横から拳が、飛んで来る。

目を開けると私に攻撃を仕掛けた男が、倒れている。

「ふん、俺を忘れて貰っちゃ困るな。」

「真田さん！」

「よしっ一気に、たたむぞ召喚器を貸せ！」

「あっはい！」

自分も召喚した後真田に召喚器を渡す。

「イシユタル『メギド』」

「カエサル『マハジオダイナ』」

双方の雷撃と魔力の球体が根絶し強力な爆発になり周囲の物を消し飛ばす。

「バァァン」

辺りにまばゆい閃光と爆発音が響き渡る。

その閃光が、晴れると同時に麗奈の体が、倒れる。

「！っ…」

地面に打ち付ける前に真田が受け止める。

「スー…スー…」

（…ほっ、寝てるだけか。）

「まあ、初めてにしてはよくやったな…」

真田が見る先には、壊れたバイクの残骸と円周上に広がる黒焦げた跡が有る。

【さすがに、頑張りすぎなきもするけど…】

E p i s o d e 4 G o d d e s t r a n s m i g r a t i o n (後書き)

これからは、5話投すること、活動報告を、書けるだけ書いて見ようと思います。

E p i s o d e 5 S . E . E . S . (前書き)

次話に多分続きます。

Episode 5 S・E・S・

「…うん……ん？」

目が覚めると、麗奈は見知らぬ部屋に居るのに気が付いた。

（ここ……どこ）

寝ぼけながら辺りを見渡すと、そこは整頓されたりビングでそこに置かれている二対のソファの一つに自分が居た。

（キレイな部屋）

ソファから起き上がり周囲を、物色する…すると一つの棚に目が行く。

（何これ、すごい）

見ている棚の中には、優勝トロフィーと写真、使い古しのグローブが飾られている。

（へー真田さん、ボクシングやってたんだ…）

軽く微笑みながら、優勝トロフィーを順に見ていくと上の方にある三枚の写真に目が行く。

（えっこれ真田さん！？わっかゝい）

一枚目の写真には学生服を着た真田と二人の生徒

二枚目の写真には六人の学生に、一人の男性と小学生が混ざっている、小学生の腕の中には、白い犬

計八人＋一匹が、写っている。

（あれ？最初の目付き悪い人がいない、それに…）

彼女の目は、一人の男子生徒に、向いている。

（この人どこかで、見たような…）

疑問に、思いながら次の写真に目を移す、そこには二枚目のメンバーが黒っぽい服を着て中央のお墓二つを挟むように立ち写真に写っている、ただ一人を除いて…

（あれ？…あの人がない。）

よく見ると全員悲しそうな顔をしている。

（まさか…この人）

次の言葉を思っ前に、後ろから声がかかる。

『おうつ起きたか。』

『うつわー！！』

突然、声を掛けられて驚いて、声を上げる。

「はあ、はあ…なんだ真田さんか…びっくりした」

『…驚きすぎだろ』

「ていうか、真田さんこんな豪華な部屋に、住んでるんですね。」

『…そうか？』

「そうですよ！！だってカーペットとかソファーとか超高そうじゃないですか！」

いきなり騒ぎ出す麗奈に顔をしかめる真田。

「それに、何ですかこのテレビ！桐条製の薄型なんて高すぎて買えませんよ、普通！！」

リビングデスクの上に置いてある、リモコンを掴み「KIRIJIY O Electronics」の文字を見つけ騒ぎ出す。

『……言いたいことは、それだけか？』

「は、…はい…おかげ様で…すつきりしました。」

『ここにある家具は、部屋に備え付けのもんだ』

「こんな豪華な備え付けって有るんですね。」

『それに、お前の言う通りこの家賃は、大企業の社長しか借りれないレベルだ。』

「真田さん公務員ですよね。」

なんで借りれるんですか…」

『友人のコネでな格安にしてもらってる』

「…桐条グループにコネが回るってどんな友達ですか…」

『まあ、会えばわかるさ…』

「会えばって…会えるんですか！？」

『ああ、そいつもペルソナ使いでな、お前を狙う組織について助言を貰うつもりだ。』

「あつ…そうなんですか。」

その言動から自分が、まだ狙われてることを知り少し暗くなる。

（このまま、凹んでちゃ…駄目だね。）

そう意識したあと無理にでも明るくする。

「で、そのすごい人とは、いつあえるんです？」

『今からだ。』

「…は？」

『本当なら、もうちょっと早く出たんだが、お前が家具がどうだ家賃がなんだと騒いでいるから…ざっと15分オーバーだな』

「ええ！？それじゃあ、相手待たしてるじゃないですか！」

『ああ、集合時間の3分前つく計算だったけど…おかげで10分以上遅刻だな。』

「ええ、そんなに！？」

真田さん早く行きましよう、早く」

急いで車に乗り込みマンションを出る。

本当なら15分以上遅刻だがさすがの運転テクで10分台に抑える。
（それでも遅刻）

集合場所 辰巳ポートアイランド ポロニアンモール カフェシヤ
ガール

「…明彦は、まだか」

「すぐに、来るんじゃないんですか？」

「でも、まだ来る気配もありませんね」

「風花の言うとおりまだ私達の他には、誰もいないよ。」

「珍しいですね、真田さんが遅れるなんて」

「お、やつとお出ましか。」

「ワンツ」

そついった会話がなされた後全員が、入口を見る。

「真田さーん、こっちつすよー」

『大声を出すな順平！！みりゃわかる。』

「あー…確かにあれなら解りますね」

二人が店内に入ると真ん中に陣取った大きいテーブルに、写真で見たメンバーが座っている。

『すまない、遅れた』

「遅いつすよーもうちょっと待ったらただの雑談会になってたつすよ。」

『残念だが順平、俺らが来てもそれは変わらんぞ。』

「ええ、そーなんすか！」

「まあまあ順平君その辺に…」

「ほら順平！彼女立たしちゃってるじゃん」

『とりあえず座るか』

「そうですね」

そのやり取りを横目で見ながら席につく。

「まずは、こちらから自己紹介と行こうか私は、桐条 美鶴 桐条グループの代表取締役だ」

「代表取締役って…社長ですか！？」

「次俺な、俺は 伊織 順平 デザイナー目指して勉強しつつアシスタントやってます」

「デザイナーかあ、カッコイイですね。」

「えと、次私？ 私は 岳羽 ゆかり 職業は、桐条グループで事務やってます。」

「アイギスって言います 私もゆかりと一緒に事務やってるの」

「へー…あれ？アイギスさんって…」

『気づいたか。』

「えっ何がですか？」

『なんだ、気づいてなかったのか…まあいい、アイギスは人間じゃないんだ。』

「えっ！」

「触って見る？」

そういつて手を差し延べる。

「あっほんとだ固い」

「なんでさつきあれ？って思ったんだ。」

順平が、横から聞いて来る。

「うーん、なんて言うか…違和感を感じたんです」

「彼女のペルソナの力か？」

『おそらくは、な』

後ろで、聞こえないように会話をする二人。

「じゃあ次は私だね、山岸 風花です教師やってるの。」

「へー先生ですか、頑張ってくださいね。」

「じゃあ僕かな、僕は、天田 乾 月光館学園高等部三年生 この子は、コロマル」

「ワンツ」

「高三かあ…私と一緒にだね。コロちゃんもよろしくね」

そういつて天田^{コロマル}に笑いかける。

それを見て、天田が頬を赤くしそれを順平が、おちよくる。

「あつれゝ顔が赤いぞゝ天田君」

「うるさいですよ、順平さん…順平さん前よりアホになりました？」

「なっ…なんだとゴラゝ」

「良いですね、賑やかでー」

『うるさいだけだな。』

「麗奈ちゃん、こっち来て一緒に話さない。」

「あっはーい！」

女子通し仲良くやっているのを見て安心する真田。

「真田さんも、アホだと思いますよね？」

「なっ…まだ言うか。」

『…お前達、まだやってたのか』

女子は女子で会話が、はずんでいる。

「真田さんの言ってた友達って美鶴さんのことだったんですね」

「ん？…ああマンションのことか、あいつとは長い付き合いだからな。」

「桐条グループに関与できる人って言うからどんな人かと思ったら、まさか社長とは…」

「私達のいる社員寮もすごい豪華だよな。」「あの室内に有るものをざっと計算してみたら軽く一千万越えたよ。」

「うつ…そんな中で過ごしてたんだ私達、お金足りるかな…」

「何、心配するなお前達の部屋からは、一円も取って無いさ…無論明彦や順平からもな。」

「そんなんじや会社赤字になりませんか？」

「こう言っては難だがお金は、腐るほどあるのが事実だ、それに…」

「それに？」

「君らからは、大事な物を沢山貰ったからな」

「先輩…」

「美鶴さん…」

「桐条先輩…」

「あつえと、麗奈ちゃん制服のままだけど変えの服あるの？」

「あー、そついえばすっかり忘れてた服」

「じゃあ今からみんなで買いに生きますか？」

「皆さんが服選んでくれるんですか？」

「まあ、そういうことになるな」

「うれしいです、そつだ真田さん達は…」

「いや、いいでしょ、あいつらに女性物わかんないって」

「それに、邪魔しないほうが…」

そつ言われ男子の方を見ると、真田と順平が、腕立て勝負をしてい

る。

「『うおおお』」

「さすがつすね…真田さん。」

『ふん、後輩には負けられんからな…』

「ふあああ」

天田とコロマルは、あくびをしている。

「」「」「」……「」「」「」

「確かに、ほつといたほうが良さそうですね。」

「じゃ、行こっか」

「はい。」

女性陣は、半分呆れた様子で出て行った。

Episode 6 The holiday of the moment

土、日曜は、基本寝てるので更新が遅いです。
(- -) z z z

Episode 6 The holiday of the moment

ポロニアンモール内
ショッピングモール

「ねえ、これとか似合うんじゃない？」

「あつ本当だ、すごいキレイ」

「どれどれ、見せてください」

「見ているだけじゃ、あれだから着てみたらどうだ。」

「そうですね、じゃあちよつと着て見ますね。」

「どう？麗奈ちゃん、サイズ合う？」

「うーん、ちよつと大きいかな？」

「…じゃあこれはどう？」

「…あつすごいピツタリです。」

「でもなんでわかったんですか？サイズ。」

「目視計算してみたらこのくらいだったから。」

「あそつかアイギスさんロボットでしたね、すっかり忘れてました。」

「昔は、敬語ばつかわかりやすかつたけどね。」

「最初は、普通に話せなかつたもんねアイギス。」

「これも、ゆかりと湊さんのおかげだけだね。」

“湊”の単語が出た瞬間全員の顔に影が射す。

「湊さんってあのキタローみたいな髪型をした人ですよね。」

「ああ、そうだが…湊を知ってるのか？」

「いえ、真田さんのところに写真があつたので。」

「そうか。」

ここで、疑問に思っていることを口に出す。

「あの…聞きにくいんですけど、湊さんってその…亡くなつたんですか？」

数秒経ってから、美鶴がゆつくりと口を開く。

「ああ……彼は死んだ、いや……自分の命と引き換えに世界を救ったんだ。」

君も知っているだろう、6年前……大々的なカルト騒ぎと同時多発無気力症……我々は、その根源たる存在と対人したんだ。」

麗奈は、簡単に説明を受けた。

「そうだったんですか……」

「だが私達は振り返らない、有里との約束だから……」

「ええ」

美鶴の言葉にゆかりが、算定する。

「ん……有里？」

ここであの時の記憶が蘇る。

【僕の……名は……里……】

「どうした？西条。」

「いえ、なんでもないです。」

（まさか……ね）

「さてと、そろそろ戻るか」

「そうですね。」

「そうだ、君に渡すものが有る」

美鶴は、懷から拳銃を取り出す。

「これって……召喚器ですよね？」

「ああ、君専用のな」

「これって良いんですか？」

「自ずと、必要になって来るだろう。それに……」

「それに？」

「君はもう仲間だ。」

驚いて周りを見ると、皆召喚器を持っている。

「そーゆーことっ」

「皆さん……」

「じゃあ、行くか。」
「はい！」

再び、カフェ シャガール

戻ってみると二人の腕立て伏せ勝負が、逆立ちに変わっていた。

「あんた達まだやってたの？」

「おっゆかりっちどこ行って…」

逆立ちしながら話しかける順平だが麗奈に目が行くとそのまま倒れる。

「どわっ!!」

『俺の勝ちだな順平!』

「ちよつと大丈夫？」

「おおへーき、へーき…いやーそれよりえらい変わったなっーか、可愛くなった。」

「そうですか？ってその台詞さつきは、可愛くなかったってことですか…？」

「いや、そういうわけじゃねーけど（汗）

ねっ、真田さんも変わったと思いますよね？」

『ん？どこか変わったか？』

「あーそいえば真田さんってそういう人でしたね…」

「そういう人って？」

「真田さんスポーツしかやって来なかった人だから、体格とかで判断するんだよね。」

「あーなるほど…そりゃあ変わりませんよ体格なんて、服です服！
！」

『ん、服？…そうだなよくなった。』

「遅っ!!」

真田のスローテンポに順平がツツコミ笑いが、起きる。

「アハハハッ」

「おい、お前ら何が可笑しい！」

「いや、だって…ぷふっ」

「もういいつ俺は、先に出る。」

「ちよっ、すねないでくださいよ。」

「すねとらんっ。」

その会話に、後ろから笑いが漏れるが二人が黙り、つられて止まる。

「あれ？人通りがねーな…」

「人通りも何も、気配すらないぞ」

「どうしたの？立ち止まって」

「いや、ゆかりっちそれが…」

「やけに静かですね、外」

「ほんとだ、誰もいないみたい」

「グルルル」

「…熱感知センサーには、私達以外の反応がありません。」

外は、静まり返り不気味な空気が包んでいる。

「『伏せる！！』」

その直後に空気の固まりが、飛んで来る。

「キヤア！」

「おわっ！」

「くっ！」

「ほう…さすが、素晴らしい身のこなしだ」

「誰だ！！」

「申し遅れましたね、我々は秘密結社コドクノマレビト以後おみしりおきを…」

「俺らに何のようだ！！」

「その少女を渡してもらいたい。」

『なぜ彼女を、狙う』

「簡単なことです、我々は力を集めている…故に彼女の力が、欲しいだけです。」

「お前達は、どういう存在だ！」

「そうですね…“ストレガ”の意思を継ぐものとも言うておきましようか…」

「ストレガだとっ…」

「さて、お喋りはここまでです…彼女を渡して貰おうか。」

『…嫌だと言ったら？』

「その時は、力付くでいただく…」

その言葉と共に仮面の男達が一斉に飛び出して来る。

『ふっ力付くか…望む所だ』

「手加減はしない！」

「へへっ腕になるぜっ、っーかペルソナになるぜ！」

「ちよっと、調子こいてへましないでよねっ」

「次弾装填完了…いつでも発射できます。」

「久々に、腕がなりますね。」

「ワンッワンッ」

「ていうか皆武器をどっから…」

「おちゃらけた順平ならともかく、真田さんの徴収なら、何か有ると思うでしょ、それで準備してたの。」

「ああなるほど、そういうことですか。」

「二人共ヒドッ」

『騒ぐなっ!!』

「サポート準備できましたっ、敵来ます。」

『よし、行くぞ！戦闘開始だ。』

Episode 6・5 Extra (前書き)

これは登場人物紹介です。

本編の続きではありません。

Episode 6・5 Extra

〈登場人物紹介〉

主人公

真田 明彦（サナダ アキヒコ）

年齢：28

ペルソナ：カエサル

アルカナ：皇帝

ヒロイン

西条 麗奈（サイジヨウ レナ）

年齢：18

ペルソナ：イシュタル

アルカナ：女皇帝

メインキャラクター

桐条 美鶴（キリジヨウ ミツル）

年齢：28

ペルソナ：アルテミシア

アルカナ：女帝

伊織 順平（イオリ ジュンペイ）

年齢：26

ペルソナ：トリスメギストス

アルカナ：魔術師

岳羽 ゆかり（タケバ ユカリ）

年齢26

ペルソナ：イシス

アルカナ：恋愛

山岸 風花（ヤマギシ フウカ）

年齢26

ペルソナ：ユノ

アルカナ：女皇帝

アイギス（アイギス）

年齢：無し

ペルソナ：アテナ

アルカナ：戦車

天田 乾（アマダ ケン）

年齢：18

ペルソナ：カーラ・ネミ

アルカナ：正義

コロマル
虎狼丸

年齢：不明

ペルソナ：ケルベロス

アルカナ：剛毅

今後出す予定の人達

有里 湊（アリサト ミナト）

年齢：17（26）

ペルソナ：オルフェウス（改）、

アルカナ：宇宙（世界）

望月 凌辱 （モチヅキ リョウジ）

年齢：26

ペルソナ：タナトス

アルカナ：死神

上のメンバー＋作者がおもな登場人物です、最後の二人はどこで出
すかわからないので、お楽しみにどうぞ。

Episode 7 Special feature display(前書)

敵勢力の「コドクノマレビト」は、ファミ通コミッククリアから出
てる“葛葉ライドウ対コドクノマレビト”から抜き出しました。

『よし、行くぞ！戦闘開始だ。』

『美鶴と伊織は、俺と前衛だ。』

「わかった！」

「了解っす！」

『天田とコロは、中盤で援護してくれ、岳羽とアイギスは、山岸と西条に付け。』

「「わかりました。」」

「ワウッ」

「了解であります。」

「じゃあ行動開始だっカエサル『デッドエンド』」

「行くぜ！！トリスメギストス『ブレイブザッパー』」

「アルテミシアッ『マハブフダイン』」

真田と順平が前線を切り開き、そこへ氷結魔法をぶつける。

「やる気ですね、先輩達…僕も負けませんけどね、カーラ・ネミッ

『マハンマオン』」

「ウォーンッ（『マハムドオン』）」

天田とコロマルの即死魔法が、敵の頭数を減らす。

「アイギスっサポートして、イシスッ『マハガルダイン』」

「了解であります。アテナ『アカシャアーツ』」

「皆すごいですね。」

「これが、私達のチーム。互いに信頼できてるからどんな相手とでも、戦える。」

「くっこいつ疾風属性効かない。」

「危ないっゆかりちゃんに誰かサポートを。」

風花のアナウンスの合間に敵が、ゆかりに遅いかかる。

「キャアッ！」

「カーラ・ネミツ『ジオダイン』」

「イシユタルツ『メギド』」

だが攻撃が、ゆかりに当たる前に、敵が吹っ飛ぶ。

「…あれ？」

思わず、目をつぶるが目の前の光景に驚く。

「全く…女性を先に狙うなんて、紳士じゃないですね。」

「護られてるだけじゃ退屈なんだからっ」

「天田君、麗奈ちゃん。」

「ゆかりさんは下がっててください。」

「ここは、僕らが引き受けますから。」

「そーいうことっ…んじゃさっさと片付けますか。」

「撃ちますッ！！」

「ワンッ（『アギダイン』）」

遠目で戦っていたアイギス達に戻って来る。

「この辺の敵は大方片付いたであります。」

「ワンッワンッ」

「アイギスさん…今カッコイイ台詞言って良いとこだったのに。」

「それは、失礼しました。」

「あれ？アイギスさん話しかた元に戻した？」

「ええ、先程の口調では皆さんの戦闘に不具合が生じると思いました。」

「あー、確かに今はそのままの方が良いね。」

「へーアイギスさん元々こういう喋り方なんだ、確かにロボットって感じ。」

「お話し中すみません。今、先輩達の方から強力な反応を感知しま

した、応援に行ってください。」

「私と、コロマルさんが行きます後の方は、待機してください。」
「気をつけてね、アイギス。」

〈前線〉

真田達の前には、炎をまとった巨人が仁王立ちしている。

「なんだあいつは。」

「あんなんさつきまでいました?」

「いや見て無い、だが…相手がなんであれ倒すまでだ!」

「遅くなりました! 敵は、魔術師弱点は氷結です。」

「遅くなりました、であります。」

「ワンッ」

「なるほど見かけ通りか、ならば…美鶴」

「ああ、わかつている」

「伊織とアイギスは、俺と一緒に体制を崩しに行くぞ。」

「おいっす。」

「了解であります。」

「コロマルは、私のサポートを頼む。」

「ワンッ」

「じゃあ行くぞ、作戦開始だ。」

「アルテミシア『コンセントレイト』」

美鶴が、集中し始める。

「コロマルっ頼んだぞ。」

「ワンッ」

一声かけると巨人の方に向き直る。

「行くぞ、カエサル『デッドエンド』」

「おっしやあつ、トリスメギストス『空間殺法』」

「行きます!! アテナ『ゴッドハンド』」

アイギスが頭部を、

順平が腹部を、

そして、真田が足元をそれぞれ崩しにかかり狙い通りふらつく。

「よっしゃあー!!」

「狙い通りであります。」

「美鶴!今だ。」

「わかつている、アルテミシア『ブフダイン』」

研ぎ澄まされた氷結魔法が、炎の巨人を巨大な氷塊に変え、ケルベロスが体当たりし粉々に砕く。

「敵戦力の崩壊を確認、戦闘の終了を宣言します。」

『久しぶりの戦闘で、心配してたが…余計だったな』

「俺はいつでも現役バリバリっすよ。」

「コロマルもよくやった、エクセレント!!」

「ワンツワンツ」

褒められて、パタパタと尻尾を振ってる。

「終わりましたか。」

「皆さんお疲れ様です。」

「おつかれさま」

仲間が集まり和気あいあいと話し会っ。

「…やはりインフェルノじゃ歯が立たんか、特別課外活動部要注意だな…」

世界の何処かで運命が、回り始めた…

Episode 8 Moonlight garden night deep

これから、月光館学園編スタート？です。

「さてと西条、君に伝えることが有る。」

「何ですか？」

「今回のことから敵が本格的に動き出し、一人でいるのは危険になつてくるだろう。」

「…はあ…」

「そこで、君を月光館学園に編入させることにした。」

「えと、月光館学園って天田君が通つてるところですよ。」

「ああ、それに我々の母校でも有る。」

「えっそーなんですか！でも勝手に編入とかできるんです？」

『あそこは桐条グループの傘下だからな、なんとでもなるさ』

「あつそーなんですか。」

「それに、天田や山岸もいる。」

「安心だろう。」

「あれ風花さん月光館の先生だったんですね。」

「どうだ？」

「はいわかりました入ります。」

「よろしくね天田君…あいつまでも名字じゃあれだから乾って呼ぶね。」

「乾！？」

「あれ名指しで呼ばれるの嫌？」

「いや、そういう訳じゃなくて…なんてゆつか新鮮だなあって」

「新鮮？」

「ほら、このメンバーって皆年上だから、名指しで呼ぶ人いなかったんだ。」

「あー確かに…」

「先程の戦闘でも乾は天田で、自分は西条だった。」

「わかるなそれ…じゃあ今度からは、名指しで呼び合おうよタメな

「んだし、私は麗奈で、構わないからさ。」

「じゃあ、僕も麗奈って呼ぶよ。」

「うん、よろしくね乾」

「手続きのあれで、通えるのは、正月明けからだなもつとも正月休みだが。」

「じゃあ三学期からだね。」

「あれ？でも私休み中何処にいればいいの？」

『ああ、それなんだが美鶴と話した結果、巖戸台分寮を開けることにした。』

「へーあそこ開けるんすか、なら今度遊びにいこつかな。」

「じゃあ今から皆で行きませんか？懐かしいのは、皆一緒だし。」

「皆さんも住んでたんですね。」

「あん時は、充実してたよな。」

「だね。」

「こつから歩いてくんですか？」

「そついわれれば…じゃあ真田さんの車…」

『馬鹿だろ…この人数が乗る訳無いだろ。』

「明彦、何人乗れるんだ？」

『俺を合わせて5人だ。』

「じゃあ男性組は明彦、女性組は私だ。」

「二手に分かれ巖戸台分寮へ向かう一行。」

数分後巖戸台分寮前

「真田さん、運転上手いつすね。」

『ん？そうか？』

「だってあのスピードであんな角まがれないっしょ普通。」

「まだ女性陣来てませんよ。」

『ちょっと早く来過ぎたか。』

「最初は、桐条先輩の方に乗りたかったんですけど、あんなレース並のやつ体験できるなら、こっちで正確だったす。」

『レースってそんなにスピード出してないぞ。』

「車出す前の『シートベルトしっかり閉めとけ』の理由が、よくわかりましたよ…」

天田は、コロマルを抱えていたためシートベルトを緩めていたので半分げっそりしている。

「車の中の真田さんの言動は、要注意だな。」

「ええ。」

話してる間に女性陣が到着する。

「あー懐かしい！…何で天田君凹んでるの？」

「いえ…コロマル抱えるからってシートベルト緩めたらこうなりました。」

「あーなるほど…」

「明彦の運転は、目を見張る物がある、まさしくプロ並だ。」

「確かにあれは、初心者にはきついね。」

『お喋りは止めて、そろそろ中に入らないか？』

「おわっ懐かしい！」

「このソファーに座ると、あの時に戻ったみたい。」

「いいなあこの昔懐かしい感じ…正月中ずつといよっかなー」

「悪いが伊織ここは学校関係者以外の入寮は、認められていない…たとえ休み中でもな。」

「そんな、こと言わずに…」

「駄目だ。」

「はあー、やっぱ駄目か…」

『さてっ俺は、そろそろでる。』

「あれ？もー出ちゃうんすか？」

『ああ、やり残した仕事があるからな。』

「正月に、ですか？」

『たとえ年末年始と言っても、実際には休めないのが現状だ。』
「警察って大変ですね…」
『さて、もう行かなきゃなまたな。』
「んじゃあ俺らもお開きにしますかつ。」
「そうだね。」
「じゃ、またね二人共。」
「はいっ、さようなら！」
「あれ？風花さんは、帰らないんです？」
「私は、教員寮の変わりにここを使うことにしたの。」
「じゃあこれからよろしくお願いしますね？」
「こちらこそよろしくね。」

1月5日 月光館学園高等部 3-F教室

「おはよう。」
「よう、天田！そっぴや聞いたか？」
「朝から元気だな…で、何を？」
「このクラス、転校生が来るってよ。」
転校生と言われ思いつくのは一人しかいないが、とりあえず話を合わせる。
「それほんとか？また前みたいにガセじゃないのか？」
「いや、それなんだが運動部のヤツが休み中に手続きしてるの見たらしいんだ。」
「らしいだろ、確実に見たって言い切るならともかくな。」
「何なら、何かかけるか？」
「俺、確実に勝てる勝負じゃないと乗っからねーから。」
「詰まんねーな、ならこっちは、どうだ？」
「今朝、鳥海が話してたんだけどよ、新任の女教師が来るってよ…しかも美人らしい。」

「ああ、それなら聞いてるぜ。」
「なんだ、知ってたか…でも楽しみだよな。」

月光館学園高等部内 職員室

「失礼します。」
「おっと、転校生ちゃんよね…私は、鳥海 美咲 よろしくね。」
「よろしく願いしまーす!!」
「おーとっ元氣ビンビンね！私そっいう子好きよ。」
「クラス分けも見た？」
「いえ、まだです。」
「あなたは、私の担当するF組よじゃ案内するからついて来て。」
「はいっ。」

再び、3 - F 教室

教室はやけに騒がしい。
「ほら、そこ静かにしなさい！」
「……………」
「じゃ、早速だけど転校生を紹介するから。」
「ほら入って来て…」
「また、教室がざわつく。」
「始めまして、西条 麗奈って言います。」
「いろいろわからない事が有るので優しく教えてくれると嬉しいな。」
「自己紹介の後、三度ざわつく。」
「可愛くね、あの子。」
「めっちゃ俺のタイプなんだけど。」
「彼氏とか、居んのかな。」
「ほら、静かにしなさい…えっと天田の隣が、空いてるわね。」

すべて承知してた天田だが、さすがにびっくりする。

「あの〜先生、ここは今日サボってるだけで…」

（よしっ、ナイスだ天田！）

回りの視線が痛い天田が空気を読むが、鳥海によってぶち壊される。

「そんなのいないのと一緒に、はいそこに決定ね。」

「はい。」

こちらに近づき隣に座る。

「よろしくねっ天田君。」

「う…うん。」

自分に向けられた笑みの裏に恐怖を、感じる天田であった…

Episode 9 The god of death and a man

最近、夕方投稿が増えてきました。

「よろしくねっ天田君。」

「う…うん。」

自分に向けられた笑みの裏に恐怖を、感じる天田であった…

同時刻 都内某所スタジオ

一人の青年が、目まぐるしく動いている。

「おい、アシッ鏡直してこい。」

「ウッス。」

「次の衣装持つて来て。」

「ウッス、今行きます。」

「これ、編集長ん所持つてつて。」

「ウイッス、了解つす。」

「おい、弁当全然足りねーぞ。」

「ウッス、今買ってきます。」

走り去った青年を見送り、スタジオにいる人物が口を開く。

「あの、アシスタント良いよな。」

「ああ、何でもやってくれるしな。」

「まあ、いちいち言わなきゃいけないのがあれだけだな。」

「そこは、新人だからしょうがないだろ。」

「ま、あいつにはそれを上回る体力と、精神力がある。」

「今まで何人辞めたか…」

「あなたたちの命令が、多過ぎなんですよ。」

「…」

「それにしても…あのカメラマン良いよな。」

「なんてゆうか、写真に命を感じますよね。」

「うーむ、ああいう奴がうちにも欲しいな…」

「交渉して見ます?」

「彼有名ですし、大手からも勧誘されてるんじゃない…」

「大手か…」

そこに、先程の青年が戻ってくる。

「ただいま戻りました」

「おう伊織、戻ったか。」

「いきなりだが、この写真どう思う。」

「どうって…なんつーか生き生きしてますね。」

「お前にもわかるか、その写真の良さが。」

「ええ…何と無くですけど。」

「なら、お前はこの業界に向いてるかもな。」

「ウッス、アザッス」

「で、本題だがうちとしては、その写真を撮った彼が欲しい。」

「はあ…」

「で、伊織お前勧誘して来てくれ。」

「へっ?」

「だから勧誘して来てくれ。」

「いや、その…素朴な疑問なんすけど、そういうのってもっと偉い人がやるんじゃないんすか?」

「確かに最終的な決定は編集長だが勧誘は下っ端の仕事だ、って事で行ってこい。」

そういう話をしているとその彼が、こっちに寄って来る。

「写真の出来は、どうですか?」

「素晴らしいよ。」

「ありがとうございます。」

「ところで提案なんだが。」

「はい…」

「君うちの所で、専属に…」

「有り難い申し出ですが…」

「あれ？この声どつかで…」

その一声に反応する。

「もしかして…順平君？」

「ああ、そうだけど…」

「やっぱり！僕だよ、凌辱だよ。」

「凌辱って…お前凌辱か？望月 凌辱。」

「二人は、知り合いか何か？」

「えと、昔馴染みってゆうか…」

「親友です。」

「ておい！つかお前あん時…」

「それなんだけど、僕もよくわからないんだよね…きずいたら公園に居てその辺ふらついてたら変なおじさんに“君、カメラで世界を見てみない？”って勧誘されて面白そうだから付いてったら、いつの間にか売れっ子カメラマンに成っちゃった。」

「成っちゃった じゃねーよ、あっそうだお前今フリーだろ？」

「えっうんそうだけど…」

「なら俺と一緒に働かねーか？」

「君と一緒に…いいのかい？」

「良いから言ってんだろ。」

「でも僕は、あの時皆を酷い目に…」

「んな昔の事誰もきにしねえよ。」

「順平君…」

「順平でいいぜ凌辱。」

二人で、戻る。

「話しは、ついたかい？」

「望月 凌辱です、先程の申し出有り難く受けさせてもらいます。」

「じゃあ、うちで働いてくれるんですか？」

「ええ、そうなります。」

「でかしたぞ伊織。」

「これでうちも安泰ですね！」

「よし、時間取れ！編集長に話してくる。」

「凌辱君は、休んでてっ。」

「あっいえお構いなく。」

「あの、俺は何を…」

「お前はいいから凌辱君逃がすな。」

「急に賑やかになったね。」

「このドタバタ感がいいんじゃないか。」

「そう言われて見れば…そうだね。」

「だろ？」

「これからは、順平と一緒にまた昔みたいに遊べるね。」

「それ以前に、暇があればだけど。」

「そっだ…順平今一人暮らし？」

「そーだけど、どした？」

「一緒に、住まわせて欲しいんだけど。」

「そんなんだけなら別に…」

「どした？」

「まさかお前…あっち？」

「あっち？」

「お前…男が好きとか言わないよな？」

「まっさか…そんなわけじゃない。」

「いやだっていきなりだったからよ…」

「高校の時、僕が女の子とばかり遊んでたの忘れたの？」

「そーいやそっだったな、でも何で俺と？マンションでも借りりや良いだろ。」

「僕、シャドウだから住民票とか無いんだよ。」

「あーそれか。」

「お願い順平！家賃も払うし、それにもう野宿は、嫌なんだ…」

「はあーしょうがねーか…良いぜ。」

「ヤッター！ありがと順平やっぱり持つ物は、お金と友達だね。」

「たく…調子良いんだからよ、あっそっだお前勝手に女連れ込むな」

よ。」

「それは大丈夫、何で僕がモテてたかわかったから。」

「へー…で何でだ？」

「女の子達は、僕の魅力じゃなくて僕の中のDEATHにひかれてただけだったんだ。」

「お前の中のDEATH？」

「そう、人間誰しも日常に飽きると死に触れてみたくなる、大方日常に飽きた女の子達が死そのものである僕の中のニクスに寄って来ただけだったんだ。」

「そうだったのか…」

「実際、ゆかりさんは僕に興味が無かったしね。」

「ゆかりっちは、有里一筋だったからな。」

「あつやっぱり？僕もあの二人怪しいと思ってたんだよ。」

「もっぱら噂だったからな、それに急に名前呼びになったり兆候があつたしな。」

「そういう事も、自分の理由も、わかったのは順平達がニクスになった僕と真つ正面からぶつかってくれたからさ。」

「凌辱…」

「んじゃ、これからよろしくね順平。」

「おう。」

「んじゃ、これから飲みに行こう！」

「おうって…これから！？」

「そう、これからこれから全は急げだよ。」

「でもまだ俺仕事…」

「今日は、上がって良いぞ伊織。」

「えっいいんすか？」

「おお、お前のおかげで凌辱君ゲット出来たもんだからな。」

「んじゃー行こう！」

「ちよつと待て凌辱、引つ張るんじゃねー…」

「おっ酒か、行ってこい。」

「たまには行つてらっしゃい。」

「接待も大事な仕事だぞ順平。」

「たまには生き抜きしてこい。」

「順平は、僕が責任持って預かりますので。」

「「「行つてらっしゃい。「「「

「俺の意見は無視!？」

「ほら、つべこべ言わずにさっさと行くよ!」

Episode 10 Overcome liquor! (前書き)

今回、コメディー描写というか…ぶっちゃけ半分以上おふざけです。

Episode 10 Overcome Liquor!

「ほら、つべこべ言わずにさっさと行くよ!」

順平! 凌辱! の居酒屋でGO!!

(テレットテレットテレットテレットテレットテレット
ン)

「この番組は、ご覧のスポンサーの提供でお送りします。」

ハナオルキ

コ○コーラ

全日本居酒屋協会

スタジオ 囲

株式会社ATOUS

一軒目 19:05

凌「すみません〜生二つ。」
順「つまみも頼めよ凌辱。」

二軒目 21:25

凌「まだまだ行けるよね順平？」

順「おうっ今日は、朝まで飲むぜ」

凌「さっすが順平よくわかってる」

三軒目 23:02

凌「すいませ〜ん、ビールもう一杯」

順「そろそろ止めといった方がいいんじゃない？」

凌「そう？」

四軒目 24:41

凌「すいません、ビール！」

順「日付変わっちまったな…」

五軒目 25:32

凌「生二つ」

順「おいおい、凌辱そろそろほんとに…」

六軒目 26:05

凌「たまには焼酎とか飲んでみる？」

順「おい凌辱ほんとに…」

七軒目 26:52

凌「すいません、ビール！」

順「おい凌辱…」

八軒目 27:00

凌「すいません、ビール！」

順「おい凌……」

九軒目 27:30

凌「すいません、ビール！」

順「お……」

十軒目 27:55

凌「すいません、ビール！」

順「……」

十一軒……

凌「すいません、ビ……」

順「いい加減にしろ……」

凌「えっ何が？」

順「何が？じゃね……」

凌「い、痛いよ順平。」

順「お前、どれだけ飲む気だ、しかもいつまで飲む気だ。（怒）」

凌「ちよっ待つて、何でそんな怒ってるの……」

順「あんなに、飲んだら死んじまうだろうが！」

凌「大丈夫だよ、僕毒物とか、効かないから。」

順「俺が、死んじまうだろうがよ！」

凌「あつゴメンゴメン……うっかりして順平のこと忘れてたよ……テへ」

「

順「テへ……じゃね……（怒）」

凌「ちよっ……止めて順平、ギブッギブアップ」

順「俺止めたよな？止めとけて忠告したよな？」

凌「言ってたような…言って無かったような…」

順「言ってたよな？（怒）」

凌「はいっ言ってました、そして僕が悪かった…だから離して。」

順「……………」

凌「ハア、ハア全く、元はと言えば順平が朝まで飲むぞーなんて言うから…」

順「そういう意味で言っただんじゃねー（怒）それに、言葉をそのまま受け取るって小学生か！」

凌「うん、僕小学生（笑）」

順「……ハアー（怒る）気力無くした。」

凌「じゃあ、もう一杯行く？」

順「まだ言うか…」

回った店の数…15軒

凌辱が飲んだお酒の数…47杯^{ジョッキ}

順平が飲んだお酒の数…4杯^{ジョッキ}

+ おつまみ62皿

合計 25万7千3百2円

「ありがとうございましたー」

（テレテッテッテレテッテッテッテッテッテッテッテッテッ）

「この番組は、ご覧のスポンサーの提供でお送りしました。」

株式会社サノ○ス

ア○キー・メディアワークス

エ○ターブレイン

S○O○Y

任○堂

株式会社A T O U S

（テレテッテッテレテッテッテッテッテッテレテレン。）

順平！凌辱！の居酒屋でGO！！

終わり。

順「って終わりかよ！」

Episode 10 Overcome liquor! (後書き)

今週末忙しいので、更新が遅くなる…あるいは後日に持ち越しになるかも知れません。

Episode 11 The Justice is hard... (前書き)

土、日曜は多分書いてる暇無いので、今日明日で書けたら書こうと思います。

Episode 11 The justice is hard...

話しは戻り月光館学園高等部

「本日も、無事に一日が終わったな...」

一息つくとそのまま机にうつむく。

「天田君...一緒に帰らない?」

天田の暗い気持ちを後ろから一声でぶっこわす麗奈。

「ゴメン、今一人にして欲しいんだけど。」

「い・っ・し・よ・に・か・え・ら・な・い・?」

回りのクラスメイトからすればうらやましい限りだが、天田にとっては威圧感以外の何でもない。

「はい...わかりました。」

今日もまた、威圧感に負けトボトボと教室を出る。

「あのさ...もう一人で帰れるのに何で僕と帰るのさ。」

「真田さんに、言われたでしょっ一人で出歩くなって。」

「ああ、そういえばそうだったね。」

「ていうか、何でそんなに暗いの?」

可愛い女の子と一緒に帰れるんだから少しは嬉しそうにしないでよ。
「」

「確かに君は可愛いけど、自分で言うのはどうかと...」

「バン!!」

「 @&*%#¢¥」

左足に痛みが走りが声に成らない悲鳴を上げる。

「その言葉台なしだよ。」

「足がっ...」

「全く、戦ってる時はカッコイイのに。」

「そりゃどうも。」

「そうだったもペルソナ召喚してれば？そしたら常時カツコイじゃん。」

「カツコつけるために疲れたくないな…」

「モテるために、努力しないでどうすんの？」

「…ペルソナは精神擦り減らすから長時間召喚してると命にかかわるよ。」

「あ…」

「それに、皆に見えるから大騒ぎになる。」

「そっか…そっち考えて無かった。」

「それもう終わりにして別の話ししない？」

「別の話して？」

「例えば、もうすぐセンターだけど麗奈は何処受けるの？」

「うーん、何処だろ？」

「…えっ」

「そういう乾は何処受けるの？」

「僕は、月光館かな。」

「えっ…てか月光館って大学もやってるの？」

「らしいよ？」

「私、高校が本部かと思ってたけどまさか大学とは…」

「真田さんやゆかりさんも通ってたって言ってたし、結構いいんじゃないかな。」

「真田さんも行ってた所か？私も頑張って行こうかな。」

「ていうか、前から思ってたんだけどさ。」

「何？」

「真田さんの事好きなの？」

「えっ！？」

「何でそんなきよどるの？もしかしてほんとに好き？」

「いや、いきなりだったから…うーんと好きって言っよりも憧れの方が近いかな？」

「憧れ？」

「そう、憧れ…よく言う白馬の王子様みたいな。」

「真田さんの王子様…なんて言うか似合わないし想像したくない。」

「うん…私も想像したくない。」

「自分で言っただんじや…確かに真田さんなら王子様みたいに颯爽と駆け付けてくれるだろうね。」

「そう！それが言いたかったの。」

「告白とかしないの？」

「ずっと好きだったんです、付き合ってください！…みたいな？」

「そんな、中学生じゃないんだから…」

「じゃあ、どんなのよ？」

「そうだな…私が高校卒業したら、結婚を前提に付き合ってください。…とかじゃない？」

「私の発想は、男子以下か…」

「つか、ほんとに告らないの？」

「なんて言うか、わかるんだよね…」

「わかる？」

「そう、何と無くだけわかる。」

相手の気持ちが誰に向いてるのか…向いてないのか…」

「……………」

「でも、今はただのガキンチョとしか思われ無くても最終的には私の方に振り向かせて見せるんだから！」

「強気で行けばなんとでも成るさ。」

「うん！」

番外編 天田キレる？

カリカリカリカリッ

部屋中に、筆記音が響く。

その部屋の壁には、センターまで後10日という、標語が貼ってある。

「フーツ…」

一息つき再びペンを握った時、頭に女性の声が響く。

「忙しい時にゴメンなさいっ」

「いえ、大丈夫ですよ。」

「寮の近くで前の反応を感知しておそらくコドクノマレビトとかわれます。」

今、麗奈ちゃんとコロちゃんが応戦してます、天田君も応援に…」

「この大事な時に来やがって…」

「えっ…あの天田君？」

「いえ、今行きます。」

「あつ天田君遅い！敵が多いんだから早く！」

「カーラ・ネミ…『メギドラオン』」

「えっ！」

辺りに居た敵を一撃で吹き飛ばす。

「えーと、強力な力を感知しました、アルカナは、女教皇です。」

「ワンツワンツ」

「デカッなにあれ！？」

「この大事な時期に来やがって…」

低い声にびっくりして見ると、天田が居た…

「えと…天田君？その…何かあったの。」

「…何で？」

「いや、その、何か今の天田君怖いなくと思つて…」

「僕は別にいつも通りだよ。」

「そ、そう…なら良いんだ。」

「うーんでも、あえて言うなら…あのはた迷惑な集団だな。」
「……………」

よけい怖い天田に声が出ない麗奈。

ズオオオオ

「…カール・ネミツ！『イノセントアタック』！！」

敵が隙を付いて襲ってくるが天田が一撃で消滅させる。

「強っ！」

「…たくっ無駄な時間過ごさせやがって。」

「えっと…敵反応消滅しました、お…お疲れ様です。」

「さーて…勉強の続きだ。」

「コロちゃん…忘れよっか。」

「キューン……」

E p i s o d e 11 The justice is hard…（後書き）

最後の方、天田が変？な風になりますがたまにはあるだろう…って感じで書いてみました。

いつも読んでいただきありがとうございます。

欲を言えばお気に入り登録やポイントも入れてくれば、幸いです。

Episode 12 Two emperors

（翌日）

ピピピピピピピッ

「…うー眠っ」

大きなあくびをしベッドからはい出る。

サツと着替えをし身支度を済ましロビーに下りると、既に天田が新聞を広げている。

「あっ…おはよう。」

「うん…おはよ。」

「あれ？いつもの元気が無いじゃん。」

「いや…き」

「き？」

「うっん、何でも無い。」

「そう…何かコロマルも寄って来なくて軽く淋しいんだよね。」

確かに、普段ならありえない事だが昨日の裏天田を見るとそれも納得できる。

「それより、もう出る時間だよ…学校行かない？」

「いいけど…何か違うくない？昨日と。」

「そ、そうかなあ…アハハハハ」

月光館学園高等部

「さてと…僕、職員室に用事が有るから後でね。」

「う、うん後でね……」

笑顔で見送ると、とたんに走り出す。

「まさか二重人格とは……」

ぶつぶつ呟きながら教室に向かっていると一人の男子生徒とすれ違う。

「えっ！」

「えーと…何？」

「あつゴメン何でも無いの。」

「そう。」

（今の感じどつかで…）

一方職員室前廊下

「…ちよいと時間くつたな。」

携帯を開き時間を確認すると教室に向かって歩き出す。

「たくっ江古田話し長いんだよ、これだからイヤミ田って呼ばれ…
うわ」

「おわっ！」

「イタタ…あつゴメンってミズキ！」

「たくっなんなんだ…天田か。」

「珍しい所で会うな。」

「お前もな、ああそうだお前また寮に入っただっけ。」

「ああ、ちよつとした都合だな。」

「噂じゃ、大人気の転校生と二人つきりとか。」

「ハハッそんなわけ無いだろ。」

「ま、それもそうだな…おっと俺担任に呼ばれてるんだった、じゃあな天田。」

「おう、またな。」

（あいつの雰囲気どこかで…）

そうこうしてる内に教室に着く、見ると麗奈は席に座り何か考えている。

「何考えてんの？」

「いや、ちよつとね…」

天田も席に座り真似して考える。

「…何考えてるの？」

「…たわいもない事。」

二人は、授業も聞かずただ一つの答えを探していた…そして三回目の授業チャイムが鳴ると突然答えが二人の脳裏に浮かぶ。

（あの時の男の子？）

（有里さん？）

「「いや、そりゃ無いな。」」

思わず、二人同時に呟いてしまい全員の視線が集まる。

「えっ何！？僕何か間違った？」

数学の先生は、きよどつてる。

「いえ、何でも無いです。」

キンコンカンコン

天田が、仕方なしに口を開くとチャイムが鳴る。

「これはもう、確かめるしかないね。」

そう言う出口へ向かう麗奈。

「ちよつと麗奈…私達との約束は…」

「ゴメンまた今度。」

そついうと近くに居た天田の襟を掴み引つ張っていく（拉致つていく）

「ちよつ…何で僕まで!？」

「つべこべ言わない!」

「たーすーけーてー…つつか助ける!」

面白がって助けられない友人達に軽くキレる天田であった。

「玄関ホール」

「で？ここで何すると？」

「待ち伏せ。」

「…誰を？」

「名前は、分かんないけど…」

「それで玄関で待ち伏せ？」

「うん。」

「いつ来るかも分かんない相手を？」

「…うん。」

「あのさ…待ち伏せって多少情報掴んでからやるもんじゃない？」

「……………」

「それに、やるならやるで待ち伏せの他に…」

「ああもう、うっさい！いろいろ口挟まないでくれる。」

それにあんだどうせ暇でしょ、暇つぶしできるんだから良いじゃない。
い。」

「暇つぶしって…受験生とは、思えないな…」

「しっ！来たよ。」

「ん？あれ…水無月じゃん。」

「えっ知り合い？」

見ると先程二人がすれ違った男子生徒だった。

「おっよう天田。噂の転校生とデートか？」

「なっ違っ…」

「あのなあ…これからデートって空気に見えるか？」

「…見えんな。」

「で？何か聞きたい事が有るんじゃないの？」

「あ、そうだった…でもここじゃ難だし喫茶でも行かない？」

「ああ良いよ、どうせ暇だったし。」

「そんなあつさり…」

ポロニアンモール カフェ シャガール

「で、聞きたいことって？」

「うーんと、じゃ単刀直入に聞くけどあなた私と会ったこと無い？」

「うーん…天田とは昔馴染みだから前から知ってるけど、君は知らないな」

「そう…。」

「何でそんな事聞くわけ？」

「あなたと今朝すれ違った時なんだか前にどこかで会ったような感じがしたのそれで。」

「ふーん…あれ？」

「どうしたの？」

「いや、何か変じゃない？」

「そういえば、人の気配が少ないような…」

「…!!」

「まさかっ…!!」

「…どうやらそのまさかみたいだ。」

二人が気づくと辺りは、仮面に囲まれていた。

「もうっこつムシャクシャしてる時に…!!」

「ここで愚痴っても仕方ないだろ…カラ・ネミ『マッドアサルト』」

「こつ何日も来られると体が持たないっての、イシユタルツ『メギド』」

二人で応戦しているが一人を庇ってる状態なので明らかに不利だった。

「何でこつ…いつも何かしら不利なの!!」

「麗奈！後ろっ。」

「乾！前見て前。」

二人に敵が近づく。

（くっ万事休すか。）

天田が半ば諦めかけた時。

「『マハラギダイン』」

「えっ。」

「何でお前が…」

「フー…今日は珍しく定時に終わったな。」

自身の腕時計を見て呟く。

「ちょうど近くに來たし…黒沢さんの所に顔出すか。」
車を走らせる真田

ポロニアンモール

「今日は、やけに人通りが無いな…。」

何かに気づいた真田は、異様な空気を放っている一角に目を向ける。
（さっき黒沢さんに連絡した時俺と一緒に居た奴が入ってたと言
っていたな…）

「まさか！」

気づいた時にはその一角に向かって走り出していた。

「カエサル『マハジオダイン』 間に合ってくれよ…」

こちらに気づいた敵を蹴散らしながら急ぐ真田。

「くそっ！後少し、カエサルッ『デッドエンド』」

敵の隙間から見え隠れする人影を追い一心不乱に突っ込む。

「西条！天田！…」

異様な空気の大本にたどり着いた真田が見たのは、座り込んでいる二人の姿とそれと対人するかのように立っている怪物とその間に庇うように立つ一人の少年だった。

（何が、起きている？）

言葉を探ろうと黙っている真田を尻目に少年は手に持っている銃を自らのこめかみに当てる。

「お前、何を！」

「安心しな…手加減してやる。」

真田の声を掻き消すように低い声で呟き引き金を引く。

「プロメティウス…」

少年の背から浮き出て来たのは、炎をまとった四ツ腕の巨人だった。

「『ラグナロク』…」

「！」「」

回りにマグマの噴火が起こり、敵を消し炭にする。

『ラグナロクだと…』

「ミズキ、お前いつたい…」

一呼吸置いて話し始める。

「俺は、水無月 瞬 コドクノマレビトの一員だった。」

「今…なんて。」

『どういう事だ…』

「さっきの行動を見てわかってもらえたかもしれないが…」
一度三人を見据えてから言葉を続ける。

「俺は、奴らを裏切つて来た。」

「えっじゃあさっきのあれは…」

「おそらく俺が、お前らの仲間になるのを止めに来たんだろ、俺一人で、片付けるつもりだったが…天田達には迷惑をかけたな。」

「お前がいづらを裏切って来たのはわかった…だが俺らの所に来た目的は何だ。」

「俺を、仲間に入れて欲しい。」

『「！」「」』

「俺は、奴らに恨みがありそれを果たしたい…だが俺一人じゃあ限度がある、あんたらみたいに一緒に戦ってくれる仲間が欲しい。」

頼む俺を仲間に入れてくれ！」

「瞬…」

『なるほど、お前の力量を考えるとこちらにもメリットがあるな。』

「じゃあっ！」

『だがこちらとしてもすぐに認める訳には行かない。』

それは、わかってくれ。」

「ああそれは承知だ俺は日頃月光館に通ってるからそこで連絡をくれ。」

『わかった』

「…水無月っ！」

『天田？』

「えと、そのまた学校でな。」

「…おう、またな。」

そういうとゆつくりと出口へ向かっていく

Episode 12・5 Extra ? (前書き)

この話しは、前と同じく登場人物紹介です。

とりあえず注意書。

これは、本編の続きではありません。

Episode 12・5 Extra ?

〈登場人物紹介〉

新キャラ

水無月 瞬 (ミナツキ シュン)

年齢：18 (天田達と同年齢)

ペルソナ：プロメテウス

アルカナ：皇帝

その内出すつもりの人達

神郷 慎 (カンザト シン)

年齢：21

ペルソナ：アベル

アルカナ：皇帝

カンザト シュン
神郷 洵

年齢：18 (天田達と同年齢)

ペルソナ：セト

アルカナ：審判

サカキバ
榊葉 拓朗

年齢：21

ペルソナ：スパルタクス

アルカナ：戦車

茅野 めぐみ（カヤノ メグミ）

年齢：21

ペルソナ：ディアナ

アルカナ：女帝

えーと、水無月は作者が原作で付けてるプレイヤー名ですので、他のキャラよりもひいき目に成るかも知れません。これからそういう場面を発見したら優しい目線でスルーしてください。

Episode 13 A strategy meeting (前書き)

9割くらい会話です。

一般人の前でペルソナ関係の話しをするわけにいかん」

「いえ、一般人では無くてですね…」

「一般人じゃないってことは…新しいペルソナ使い？」

「いやそれも違う…案外違うないかも。」

「何！？本当か伊織！！」

「先輩達まず俺の話を…」

『さっきのここに呼ぶってやつか？いいぞ呼んで来いどうせ今話しは止まってる。』

「はあ…じゃあ呼びます。」

おい、来ていいぞ。」

『やつとかー待ちくたびれたよー』

「今、来ます。」

その順平の言葉に全員、目を階段へ向け降りてきた人物に、声を荒げる。

「……凌辱君！！……」

「やあつ…久しぶりだね。」

『お前…ほんとに凌辱なのか。』

「信じられん…あの時ニユクスと共に消えた物とばかり…」

「えっと…誰ですか？」

「彼は、望月 凌辱私達の仲間だった男だ」

「へー仲間…だった？」

「ああ、彼は一度死んだ。」

「と言うと…幽霊か何か？」

幽霊という単語にゆかりが、反応する。

「僕は元々人間じゃないから幽霊って表現はしないかな。」

「じゃあ、単に生き返った…てことだね。」

「うん、そうなるね。」

「何故君は、生き返ったんだ。」

「それは僕もよくわからないんだ。」

凌辱は、全員に説明する。

「えっと…公園でさ迷ってる変なおじさんに付いてったら売れっ子カメラマンになった？」

「うーん…ちよつと違うけどそんな感じだね。」

『…だいぶ違うだろ。』

「ゆかり大人になって馬鹿になった？」

「んなつ…違うわただよく聞こえなかっただけよ。」

「おや？ここにいる可愛いレディは？」

『こいつは、西条 麗奈 っていつて…』

「今度、僕と一緒に素敵なレストランへ…」

『おい、人の話を最後まで…』

「レストランですって真田さん今度行きませんか？」

『あ、ああ…暇な時にな。』

「やったー約束ですよ。」

「…ガン無視」

「そう落ち込むなって凌辱。」

「うう…ゆかりさんですら話しくらい聞いてくれたのに。」

「そうだ望月、君にも聞きたいことが有る。」

「…なんです？」

「ここに新しい人物を入れようと思ってるんだが、君の意見が聞きたい。」

「うーん面識も無い相手をどうするって言われても…」

「それは、私達も同じだ。」

「皆会って無いなら一度会って見ればいいんじゃない…」

「」「」「………」「」「」

「あれ？どうしました？」

『くっ…その手があったか。』

「皆が思い着かないことを言うとは…Excellent」

「よし、天田明日ここに連れて来い。」

「明日ですか!？」

「できるだけ早い方が良く。それに…」

「…それに？」

「確かめる必要が有る。」

「何をです？」

「奴が、本当に味方になったかどうか…それと奴の底力をな。」

「真田さん…何するつもりですか。」

Episode 13 A strategy meeting (後書き)

次は、ちゃんとした長めの話しを書こうと思います。

Episode 14 A thunder emperor vs. the

前の投稿は、誤字脱字があつたので修正しました。

翌日、放課後。

「…善意じゃなくて友達呼ぶのって罪悪感有るな。」

昨日のことを思い出したため息が出る。

扉を開けようとする昨日の事が思い出される。

『確かめる必要が有る。』

「何をです？」

『奴が、本当に味方になったかどうか…それと奴の底力をな。』

（真田さんいったい何を…）

軽く頭を降り再び扉に手をかけようとした時扉が開く。

「ミズキっ」

「よう！」

「あつと…話しが有るか？」

「有るか？聞いてどうするんだ。」

「あついや。」

「ま、いいやここじゃ難だし屋上行こうぜ。」

く屋上へ

「答えは、どうなった？」

「いや、その…」

「その感じだと駄目っぽいな。」

「そんなんじゃ無くて…」

「じゃあ何だよ！」

「バンツー！」

「「！？」」

扉を開けて一人の女子生徒が入ってくる

「れ、麗奈！？何でここに…」

「あんたが、うじうじしてるからに決まってるでしょ！それに学校じゃあ名指して呼ぶなって前にも言ったでしょ。」

「はい、すみません」

「夫婦漫才？」

「そこ、何か言った？」

「いいえ。」

「私は用件言いに来ただけ、今晚私達の寮に来てもらうから。」

「何のために？」

「悪いけど、今理由話せ無いの。」

「…わかったよ天田と一緒にいくから安心して。」

「了解んじゃそういう事で…」

麗奈は、去って行った。

「…大丈夫？」

「…大丈夫じゃない。」

巖戸台分寮

『おう、来たな。』

「真田さん！？」

「あなた確か前にも。」

『悪いが今から移動してもらう。天田達も一緒にな。』

「待ってください。」

「ミズキ？」

「天田達は関係無い、連れていくのは俺だけにしてください。」

『理由は？』

「戦いに巻き込みたくないんだ。」

「真田さん戦いつて何です！」

『戦いと言つてもちよつとした入団テストだ。』

「ならやらないわけに行きませんね。」

「ミズっ！」

「大丈夫だよ。」

一声かけると真田の方へ歩く。

『さて、三人共車に乗れ。』

「ここは？」

真田に連れて来られた場所は古めかしい闘技場のような場所だった。

『ここは知り合いに頼んで借りた場所だな。ペルソナの召喚もできる。』

「あれ？前にも来たこと有るような……」

『きずいたか。』

「？」

『ここはアイギスのデータを軸に創られた擬似コロッセオだ。』

「コロッセオってあの時の！」

『そうだ、アイギス達と戦った時のあれを忠実に再現している。』

「じゃあ負けたらまたどちらか火柱に……」

「火柱！？」「」

「火柱ってどういう事だ……」

「真田さん！乾！」

「……………」

『……………』

「そんな……」

『何、安心しろリスクを負うのは俺も一緒だ。』

「なるほどリスクは元より承知ですか。」

『さてお喋りは止めてそろそろ始めるか。』

そついうとスーツの上着を脱ぎ投げる。

「行きますよ。」

水無月も真似て制服の上着を投げる。

（真田のは麗奈が、水無月のは天田が受け取る。）

『本気で来い！』

「言われ無くてもそのつもりです。」

数秒睨みあった後互いの召喚器を引き抜く。

「カエサルッ」

「プロメテウスッ」

「二人共すごい気迫だ…」

「だってリスクが…」

「いや、違う。」

「？」

「リスクなんか関係無いただ単に戦いを楽しんでいる。」

「『ジオダイン』」

「ふん当たりませんよ。」

「『ゴッドハンドッ』」

「甘い！」

互いの攻撃をよけ動き回っている両者の動きが止まる。

「ウォーミングアップは、このくらいでいいでしょう。」

「ああ、十分だ。」

「じゃあ本気でいきますよ。」

そういうと水無月の目付きが変わる。

「ふん、来い！返り討ちにしてやる。」

真田も負けじと挑発する。

「プロメティウス…『レフトハンド』」

水無月から出たプロメティウスが左下の腕に炎を溜め地面に叩きつけ炎の衝撃波を全体に飛ばす。

「全体攻撃か…ならカエサルッ『デッドエンド』」

カエサルの大剣で地面を削り土石流を作り相殺する。

「やりますねえ、『ライトハンド』」

次は右下の拳に炎を集め平手打ちの要領で火球を飛ばす。

（さっきより早いな…）

紙一重でかわす真田

「まだまだ行きますよ。『ライトハンド』」

「カエサルッ『マハジオダイン』」

「そんなんじゃ防げませんよ。」

「確かに…だが一秒時間が稼げれば十分だ！『ジオダイン』」

「しまっ…ぐおっ！」

真田の放った雷が直撃する。

「なるほど、目暗増しですかやりますねえ。」

「それも有るが時間稼ぎだ雷は避けれんからな。」

「なるほどね…だけどこの距離ならあなたも避けられませんよ。」

「レフトハンド』」

「不用意に近づきすぎたか…『ジオダイン』」

目の前の炎に雷を落とすが炎は衰え無い。

（くっジオダインじゃ足りんか…）

「モロに食らったあなたに勝ち目は…！！」

土煙のを見て勝ちを宣言しようとする、その土煙から真田のカエサルが飛び出て来る。

「『デッドエンド』…」

「何！くっ…案外タフですね。」

「まだまだ負けてられんさ。」

「次こそ決めますよ…」

「決められる物ならな…」

「二人共すごい……。」

「けどまだ両方本気出して無いんじゃない…」

「えっあれだけやって!？」

「真田さんの本気は知ってるからわかるし瞬も本気出すって言ってたけどまだ出して無いな。」

「水無月君のは何でわかるの?」

「あいつは昔から本気出すときは目付きだけじゃ無くて空気も変わるんだ。」

「空気ね…」

「そう、わかりやすいんだここに居ても感じるほど…」
「……………」

「4連…」

「来るか!」

「『ライトハンド』ッ」

「何だと!？」

四本の腕全部に溜めた炎を一気に打ち出す。

「…これは最後まで使いたくなかったが致し方ない!」

（何かするきか…!）

「うおおカエサルッ『メギドラオン』」

カエサルが右手に持つ球体を上げると中に三つの光の球が現れ回転しながら火球に突っ込んで行く。

「メギドラオンって!」

「そんなおどろかなくても…」

「いやだって。」

「SEESのメンバーは、全員使えるよ。」

「そういえば乾も使ってたね。」

「あれ？僕使った事あったっけ？」

「いやほら寮の近くに敵が来た時…」

そこまで言ってその時天田がキレてたのを思い出す。

（あつ…まずい。）

「あゝあん時かーそういえば使ったね。」

「乾記憶有るの？」

「えっ有るに決まってるじゃん何で？」

「いや、あんなキレたのに次の日普通だからってつきり二重人格かと

…」

「そんな訳無いでしょ…」

「あー要らん気遣いしたー」

「たまにはいいんじゃない？」

「……何かむかつく」

「バアアアンー！」

「…相殺したか。」

「安心するのはまだ早いですよ…『ゴッドハンド』」

「そんな物きか…」

見ると通常のように上から落ちて来る物ではなく、プロメテウス
の左上の腕が光っている。

「…そんなんありか。」

「有りです…行け。」

「…直接攻撃だと！全く常識が通じん奴だな。『マハジオダイン』」
「また目暗増しですか無駄ですよ。」

拳は一直線に真田に向かってくる。

「くそっ『デッドエンド』」

「そんなんじゃ防げ無いでしょ。」

「別に防ぐわけじゃない。」

そっとうとカエサルは真田の方に向く。

「何を…」

そしてそのまま真田の足元へデッドエンドを食らわせる。

「ぐおっ…」

後ろへ吹き飛ぶ真田に水無月のゴッドハンドの風圧が重なり大きく飛ばされる。

「ぐあっ…成功だ。」

「全く…常識外れはあなたの方だ普通自分に攻撃しませんよ。」

「ああ…だがともにゴッドハンドを食らうよりましだ。」

「お互いダメージが有りますしそろそろ最後にしません？」

「…良いだろう。」

互いに呼吸を整えると瞬時に召喚器を抜く。

「プロメテウス…『ラグナロク』」

「カエサルッ『真理の雷』」

「ドオオオオン」

「キャアッ！」

「おわっ！」

「終わっ…たの！」

「いや、これからだ！」

「うおおおおおー！！」

「はあああああー！！」

二人の掛け声と共に双方のペルソナにエネルギーが集まっていく。

「うおおおおおカエサルウウ『カイザーフィスト』オオ」

「はああああプロメテウスッ『フレアライザー』」

雷の力を右手に溜めたカエサルと最後の腕に炎を纏うプロメテウスが互いの拳をぶつけ合う。

「うおおおおああ……」

「はああああああ……」

その場は、強力な閃光に包まれた。

「……どうなったの？」

「わからない。」

閃光が晴れると二人が立っている。

「……引き分け？」

「真田さん……俺の勝ちです。」

「くそ……もう少しだったのにな……」

「バタッ」

「真田さん……!!」

「ちよっ麗奈!」

二人が駆け付ける

「すごいな真田さんに勝つなんて。」

「……………」

「水無月？」

「……危なかった。」

「えっ？」

そして水無月も倒れた。

「あれ？ちよつと！」

「どうなんだ…これ。」

「えっと救急車！」

「待って！桐条先輩に連絡した方が早い。」

「ここじゃ圏外だ、電話して来るからちよつと待ってて。」

「うん、わかった。」

天田は走り去って行った。

E p i s o d e 1 5 E n l i s t m e n t (前書き)

今回、会話が主+長めという風で結構読みにくいと思います。

Episode 15 Enlistment

「……………うう」

水無月は、見知らぬ場所に居るのに気が付く。

(…白い…天上?)

周囲を見渡すと見たことが有るような気がする。

「……………病院? ってことは…辰巳記念病院か。」

「ガラッ」

音がした方を見ると一人の男性が立っている。

『よう、気が付いたか。』

「真田さん! 起きてたんですか。」

『ああ、俺はお前ほどのダメージはなかったみたいだな。』

「ははは…フレアライザーは、遠距離技ですからね近距離だと威力が半減するんです。」

『なるほどな、どうりで俺の方が軽い訳だ…ん? 待てよ半減してあの威力なのか!』

「あの威力って…結果的に真田さんの方が上じゃないですか。」

『まあそうだが…けど遠距離ならば!』

「あの状況じゃ近距離戦しか無理ですよ…ってことで真田さんの勝ちです。」

『納得がいかな…』

「はいはい二人共そこまでにして。」

「まだ戦いの話してるんですか。」

『西条、天田。』

「真田さん最初の目的忘れてません?」

『目的?…ああ果たしたぞ。ただ俺的に納得いかながな。』

「いや、そうじゃ無くてですね…駄目っばいねこりゃ。」

「桐条先輩の予想大当り。」

『予想？勝負の結果か？悪いがうやむやになっててな…』

「ああーもう、さっきのもそれも全然違うわよ！」

『……………』

「……………」

「そんな怒らなくて…も。」

場を落ち着かせようと天田が口を挟むが西条に睨まれる。

「えっと水無月君。」

「は……………はい。」

「今日、私達の寮に来てもらうから。」

桐条先輩から話しが有るの。」

「あのー一つ聞いても良い？」

「……………何？」

「それって拒否権……………」

「無いわよ。」

「……………はあ。」

「てゆうかあんた、仲間に成りたいんだったら拒否権とか言ってる場合？」

「それとこれとは話しが別だろっ！桐条グループですら恐れ多いのに、その社長と話し何か出来んわ！！。」

「……………」

『……………ごもつともだな。』

「ですね。」

賛定する二人に睨みを効かす。

「そこ……………何か言った？」

『……………天田、俺達何か言ってたか？』

「いえ、何にも。」

適当に合わす二人をジト目で見ながら空気を凍りつかせる一言を発する。

「あっ言い忘れてたけど、もし来なかったらその時は……………」

「そ、その時は……………」

「“処刑する”って。」

「『処……処刑』」

「で、でも…俺なんかまだ具合悪いな」

「大丈夫、さつき先生に聞いたら今すぐにでも退院できるって。」
引きつった二人を見て断るが軽く打ちのめされる。

「じゃそついう事で…よろしくね」

彼女が出て行った後真田に処刑の意味を聞くと三人共暗くなり看護師さんに心配されながら重い足取りで出て行った。

（巖戸台分寮）

「……………」

『……………』

「……………」

まだ処刑をひきづり暗いまま寮の前に立ち尽くす。

「えっと…やっぱり行かなきゃ駄目ですか？」

『ああ、お前が来ないと俺達が処刑される……』

「…行きますか。」

目配せして扉を開ける。

「おつよう！来たか新人。」

「順平さんか…脅かさないでください。」

「お、おう……………どうしたお前ら何か暗いぞ。」

「それが…処刑の一言で。」

「おい……………処刑ってマジか……………」

おどけた順平も処刑の言葉に暗く凍てつく。

「……………マジです。」

「……………そうか。」

『…だが安心するのはまだ早いぞ。』

真田の視線には麗奈がいる。

「あつ三人共来たんだ。」

覚悟を決めた三人が麗奈の方を警戒しながら見つめる。

「…何で睨む？ま、いいや“氷の女王”がお待ちだよ。」
そういつて階段を指差す。

『フー…よし行くぞ。』

「…わかりました。」

「覚悟は出来てます。」

「三人共頑張れよ！」

「よくわからないけど頑張つて。」

意気込む三人にエールを送る順平と凌辱。

『おう。』

「ありがとうございます。」

「行ってきます。」

そのエールに答えゆつくりとけど確実に一歩づつ上がっていった。

〈 4 F 〉

『…着いたぞ。』

「ここ…なのか。」

「ああ、この先にいる。」

『よし！開けるぞ。』

「うつす。」

「了解です。」

『コンコン…美鶴っ俺だ。』

「明彦か…入って来い。」

「ガチャ。」

扉を開け見渡すと四人の女性が座っている。

「えらい遅かったな。」

『い、いろいろとあつてな…』

「…まあ良いまずわ自己紹介と行こう。」

私は 桐条 美鶴だつ以後よろしくな。」

「はあ…どうも。」

「私 岳羽 ゆかり よろしくねっ。」

「あついえ、こちらこそ。」

「アイギスです。」

よろしくね。」

「外国の方ですか？」

「いや、そういう訳じゃないんだが…まあおいおいな。」

「はあ。」

「山岸 風花 です。」

「前にも会いましたね。」

「さて、君の方もしてくれないか。」

「ああ、はい 水無月 瞬 です。」

「さて早速だが、君の意思を尊重し仲間にすることに決めた。」

「俺精一杯やりますんで、これからよろしく願います。」

「…頼もしいじゃないか。」

「いえ、そんな。」

「謙遜しなくてもいい、話しに寄れば明彦を退けたらしいじゃないか。」

「それ本当ですか!？」

『ああ、運が悪ければ重傷だな。』

「そんな大袈裟な…」

「全身火傷だろ…十分重傷じゃないか。」

「そんな強いのか？」

「いや、そうでも…」

「前まで仲間だった物に躊躇無くラグナロク打ち込むくらいですか
ら…」

「なるほど、かつての仲間でも敵にまわれれば容赦無しか。」

「それは天田達をかばっ…」

「もうその辺にしませんか？」

「そうだな。」

「じゃあ下降りよつか。」

（1F）

「彼を正式に入隊させる事にした。」

「どうも、水無月 瞬です。」

「おう、よろしくな。」

「よろしくねっ」

「あつ、そういやお前真田さんとやり合ってたって？」

「まあ…一様。」

「真田さん負けたってほんとか？」

『ああ、奇しくもな…』

「いや、あれは負けたって言うより共倒れでしょ。」

「うん、二人共倒れたしね。」

「そういやお前ら見たんだっけ。」

「ええ。」

「まあ。」

「良いな、俺も見えたかったな真田さんの倒れる所。」

『……喧嘩売ってるのか。』

「それなんだが…」

「リンッゴーン」

「御令嬢、お届け物です。」

「そうか、ご苦労。」

「でわ、私はこれで。」

「ああ。」

使用人は出て行った。

「…なんすかそれ。」

「ん？これか？これは、さっき話しに出た明彦達のビデオだ。」

「えっマジっすか！見たいっす見たいっす。」

「本来これは、明彦と彼の力について検証するために送らせたんだが…」

皆の期待の視線が集まる。（主に順平）

「…よし皆で見ようか。」

「よっしゃー！ありがとうございます。」

「見たい人は作戦室に集まってくれ。」

「うしっ！行こうぜ凌辱。」

「ちよつと待ってよ順平！」

準備のために席を立った美鶴と風花に続き順平と凌辱も立ち上がる。

「私達も行こうよ。」

「そだね。」

順平達につられゆかりとアイギスも立つ。

「あれ？麗奈ちゃん達行かないの？」

「私は、生で見たら善いや。」

『俺ら当事者は、残るさ。』

「僕も見たんで善いです。」

「じゃあいこうか。」

「うん。」

4人で見送ったあと真田が水無月に話しかける。

『どうだ？此処は。』

「なんてゆうか女性が多くて華やかですね。」

「賑やかでいいでしょ。」

「まあね、それにこのデザイン。何処を撮っても画になる……」

麗奈の問いに答えながら、携帯をカメラにして周囲を写す。

『このデザインは、桐条グループが力を入れたらしいからな相当な物だぞ。』

「へー桐条……さすがというか何というか。」

「そういやさ、行く時処刑がどうか言ってなかった？」

「それっぽいのはなかったけど……」

『ああ、もし処刑されれば今頃凍り付かされ全員で解凍の真っ最中だな。』

「「「……………」」」

「……えと、とりあえずこれからよろしくねっ瞬。」

「……ああ。」

また新たな日常が走り始めた。

Episode 16 Certain 1st (前書き)

何か今回やつつけ仕事と言うか、最後の方投げやりっぽくなってますけど気にしないでください。

Episode 16 Certain 1st

とある一室

殺風景な室内には備え付けの机とベッド、無造作に置かれた鞆が静寂に包まれた空間に溶け込む。

その静寂を演出しているのは、何も家具だけでは無い…ここの住人でさえ空間の一部に過ぎない。

一人の少年がベッドの上でうなされている。

「…うつ…うつ」

少年の唸り声は相当な物で、普通なら誰か駆け寄り「大丈夫？」と声をかけるだろうが、少年の声も一般的な考えもすべて静寂に包まれていく…

（此処は…何処だ？）

（俺は確か寝て…夢か？それとも…）

「…現…実」

（現実？此処は寮じゃないようだが…）

「お前……に……とつて……の……現実」

（俺にとつての現実？どういう事だ。）

「その…うち……わ……かる……さ」

（おい！…投げやりかよ。）

周囲を見渡すが自分以外何も居ない。

（…俺一人でどうしると？）

「…ヒック。」

（泣き声…か？）

「どうして皆…僕をいじめるの？」

（おいおい、どうした坊っちゃん…）

その子供に声をかけるが顔を見て顔が引きつる。

（嘘だろ…何で。）

「おじちゃんも皆も…嫌いだ。」

（何…で…俺がいる？）

「…僕をいじめる人なんていなくなっちゃえ。」

（やめろ…）

「全く、あの疫病神を預かる事になるとは…」

（やめろお…）

「来るな！この化け物！」

（…やめろおお…）

「もう…嫌だよ。」

《狂乱せよ…》

「えっ…」

《自らの心に従え。》

「僕の…心…」

（駄目だ…）

《…狂気に従え。》

「皆嫌いだ…」

（やめろ…それ以上は。）

「あんな家族ならいない…あんな友達もいない…」

《…己に…従え…》

「全部…切り捨てて…」

《…我の名を呼べ…》

（言っちゃ…駄目だ！）

「ペ…ル…ソ…ナ…ンキ」

《…狂気に、従え…》

「くっ……はあはあ、夢。」

気づけば、先程の静寂の中静かに時を知らせる。

「2時…嫌な時に起きたな。」

カチカチと音を立てる時計を手に取り呟く。

「まあ…影時間に起きなかったただけ増しか…」

「コンッコンッ。」

突然のノックに壁に立てかけている刀に手を賭ける。

「…誰だ？」

「あと、僕だけど…」

「…天田？どうした？」

ノックの正体を知り合いと解ったため刀を壁に戻す。

「いや、すんげーうなされてたからさ。」

（さっきの夢か…）

「えっマジ俺うなされてた？」

「ああ結構な…」

（隣まで聞こえたのか…）

「そうか、だが俺はもう大丈夫だ心配してくれてありがとよ。」

「そっか…またなミズキ。」

「おう。」

二人の会話が終わりました寮内に静寂が訪れる。

（朝）

「…二度寝は、朝がきついな。」

軽く愚痴りながら支度を済まし廊下に出ると天田と鉢合わせる。

「よっ！」

「おう。」

「いやー昨日は、焦ったよ。」

「…そんな酷かったのか？」

「うんまあ。」

「どんな感じ？」

「…やめろ…とか。」

（あの夢のまんまじゃねーか…）

「何の話しー？」

階段付近で麗奈も加わる。

（…めんどくさい奴が来たな。）

「…今、何か悪態ついたでしょ。」

「さあ、きのせいだろ。」

「ふーん…で何話してた？」

「俺が怖い夢見てうなされてたっつー話し。」

「怖い夢でうなされるって…あんた以外に子供？」

「ま、そういう事にしといてくれや。」

すたすたとロビーに去って行く。

「…軽く流された！」

ロビーには、水無月がソファを陣取り新聞を広げている。

「あれ？私達だけ？」

昨日の人達がいなくガラツとしてるロビーを見て疑問を投げ掛ける。
「ゆかりさんとアイギスさんは、桐条先輩と一緒に仕事へ、風花さんは学校。」

「真田さんは？」

「ロードワークだとよ、さっき行っただけだからしばらく帰って来ねーよ。」

「そんな…」

うなだれてソファーに座りこむ。

「残りの二人は、寝てるだろうね。」

「つてことは、やっぱり私達だけか…」

「順平さんでも起こしてこれば？」

「そこまですたくない…」

隣を見ると二枚目の新聞を読んでいる水無月がいる。

「何枚読む気よ…」

「ん、全部。」

水無月の視線を見るとまとめられた新聞コーナーがある。

「…よく読む気になるよね。」

「新聞は大事な情報元だ、お前みたいにスポーツやテレビ欄しか見ない奴にはわからんだろうがな。」

「なっ！…」

「それにしてもさすが桐条だな日本どころか世界中の新聞がある。」
その言葉を確かめに新聞コーナーに行くとその中に英字新聞を見つける。

「…マジッ。」

「さーで、そろそろ時間だ行こうぜ天田。」

「あ、ああ」

「ちよつと、置いてかないでよ！」

（月光館学園）

キンコーンカーンコーン。

「午前も無事終わったー」

「さてと、さっさと昼食べて午後の予習でもするか…」

「…もう授業の話し。」

昼時で賑やかな教室で、二人の会話が弾んでる。

「そついやさ瞬つて何組？」

「瞬…ああミズキか、B組だよ。」

「…今の間何？」

「ミズキのこと名指して呼ぶ奴初めて見たから。」

「ふーん、まあ良いや今から呼びに行くから。」

「そつ、頑張つて。」

「あんたも行くに決まってるでしょ！それに…ご飯食べながら勉強するな！！」

「うわっ…何すんの！」

天田の右手にパン左手に参考書のスタイルにツッコミを入れる。

二人が出てつて静まる教室。

「ねえ、やつぱりあの二人仲良すぎない？」

「やつぱ付き合つてんのか？」

「くっそー俺の麗奈ちゃんを。」

「しかも優等生の天田…」

「やはり勉強できる奴の方がモテるのか…」

「俺も勉強しよっかな。」

一方B組

「で、こつからどうすんの？」

「どうつてパパーツと行つてパパーツと連れて来る。」

「誰が？」

「もちろんあんた。」

「無理矢理連れて来てそりゃ無いんじゃないの？」

「無理矢理って昔馴染みでしょ。」

「連れて来るって言い張ったのは君だろ？」

「そりゃそうだけど……」

「てか、一人で行けるのに何で僕連れて来た？」

「何でって……」

「今更ながら一人で行くの怖いとか言ったら本気で怒るからね。」

「天田君……いつもと違って黒い……」

「ああ、黒いよでもその辺どうでもいいからさ、速く連れてきなよ。」

「

……わかったわよ。」

意を決したのか取ってにてをかける。

「ガラガラッ」

「失礼しまーす。」

B組の男子達は、いきなりの来客にざわめく。

最初軽く周囲を見ていたが有る一点に向かい歩き出す。

「水無月君、えと私達とお昼一緒に食べない？」

「……何で？」

「何でってほら……いろいろ有るでしょ。」

「それ自体は、良いけど動くのめんどくさいんだよね。」

（こいつ……）

けだるそうな目で麗奈を見ていたが外に天田が困り果てた顔でこちらに何かを訴えてるのを見て動き出す。

「しゃーねえ、行くか。」

そう言いまたすたと出て行く。

お昼時で騒がしくも楽しげな廊下を三人の人影が揺れる。

「で？という流れでこうなった訳？」

「さあー、僕に聞かれてもねえ。」

「なんだ、お前も知らねーのか。」

「そんな知りたいならその常識知らずのお姫様にでも聞いたら？」
「…誰が常識知らずよ。」

「天田君、今聞きました？自分に都合の悪い所だけ訂正したよ。」
「随分都合が良い耳を持っているんだねえ。」

「ああ、もううるさい！」

「逆ギレしてきたぜよ。」

「ほんと野蛮なお姫様なこと。」

黒天田とノリが良い水無月二人の攻撃に耐え教室に着く。

三人で席に着き急いで食べる。

「そっぴやさ朝怖い夢見てうなされたって言ってたけど、内容は？」

「…俺が知人を殺す夢。」

「えっ……」

「……嘘だろ？」

「嘘だよ、当たり前にな。」

奇しくも楽しい時間が過ぎているのを感じる自分がいた。

E p i s o d e 1 6 C e r t a i n 1 s t (後書き)

今週の土日から来週の木曜辺りまで定期テストで投稿できませんのでご了承を。

Episode 17 A heart to waver (前書き)

どうも水素です。

やっと暗黒のテストDaysを抜けましたいやー長かった…

という訳で、ですね本日から執筆再開するのでよろしくお願いします。
す。m ((m

Episode 17 A heart to waver

三人は、ゆつたりと時間が流れる商店街を歩いてる。

「……………」

「……………」

「えーと…」

心なしかきまづい空気が三人を包んでいる。

「あっほら、ワック見えてきたぜ…」

「あ…ああ」

「……………」

水無月は、先程までのしまったという顔を戻し話に乗っかるが、西条はまだ申し訳なさそうな顔をしている。

「と、とりあえず座ろうぜ天田。」

「えっ…あ、うん席取って来る！」

「……………」

きまづい空気のまま席に座る。

「さーて、何食べる？…」

「……………」

「……………」

きまづい空気に包まれているせいかワックポテトは普段よりも湿っぽく感じる。

瞬（やっぱ俺の話し引きずってんのか？）

麗（悪い事しちゃったかな…）

瞬（知人を殺した…なんてストレート過ぎたかな、でもちゃんとこまかしたしな…）

麗（瞬は、嘘だよって言ってたけど私わかるんだよね…何と無くだけど嘘じゃないって。）

瞬（…もしかして嘘じゃないってのバレタかな？ハア…自分の演技力の無さにため息が出るぜ。）

麗（私って最悪だな…人の嫌な所無理に聞いた上に心配させるなんて…）

「ハア……」

思考が二人同時に止まると、二人同時にため息が出る。

「えっ。」

「あっ。」

「……」

「その……ゴメン」なさい」

「……」

「何で君が謝るの？」

「何か悪い事しちゃったかなって思ったから…瞬は？」

「俺！？俺は何と無く謝った方が良くないかって。」

二人が、視線を合わせると周りの騒がしさは消え静まる。

（不思議な感じ…このまま彼の瞳に吸い込まれそう。）

そう思うと瞬の顔が近付いて来る感覚がする。

（えっ…）

そこで横からやじが飛び周りの静けさが戻る。

「へえー二人がそんな関係だったとは。」

「バツ！！」

直ぐさま声の方を向くとニヤニヤした天田がいた。

「なっ！！…いや、ちがつ！！」

「ハイハイ…そんな豪快にキョドら無くても大丈夫だから。」

「っー！／＼だから違うつてばああ！！」

「大声を上げると逆に怪しく見えるからやめたほうがいいよ？それに迷惑だし…」

そう言われ周りを見ると客の視線が自分に集まっていた。

「……／＼／」

顔を赤らめ座るとまたも天田がからかつて来る。

「で？いつから好きなの？」

「だから違っ！！」

「…ああゴメンさすがに本人の前じゃ言えないか。」

「…ああ言えばこう言うつてか。」

「てか変な事言つて無いで反論してよ。」

「天田、余り女子をいじめちゃ駄目だぜ。」

「なっ！！」

「別にいじめてる訳じゃないただ話を聞いているだけさ。」

「それを世間一般的にいじめてるつて言うんじゃない？」

「かばうつて事はやっぱ好きなの？」

「お前には悪いが俺に安い挑発はきかんぞ。」

「何だ、つまんないの。」

「つまなくて悪かったな。」

「ま、良いやそろそろ時間だし出ようか？」

「えっ…もうこんな時間！？」

携帯を開くともう7時を過ぎている。

「んじゃ、出ますか。」

「だね。」

三人は、店を後にした。

その三人が出た後一人の少年が、ワックから出てくる。

「フフフ…西条 麗奈、予想以上の美しさだ。」

不気味な笑みを浮かべながら薄暗い路地を歩いていく。

「…彼女が欲しい！僕だけの物にしたい。」

不気味な少年は足早に進んでいくが足が止まる。

「だが邪魔がいる水無月 瞬、彼女に近付く虫けらめ…僕が退治してやる…そうだ、ついでに天田とか言うハエも一緒に潰してくれる。」

「

ただでさえ気味悪い路地を少年がさらに不気味さを作り出している。そこへ一人の男が近付いていく。

「コツコツコツ」

『あなたの願いはそれですか…』

「なっ…お前は。」

『フフ…奪いたいのでしょう、愛でたいのでしょう。』

「知らん…お前何か知らん！」

『さあ…ためらう必要は、ありませんよ。』

「く、来るな！」

『私があなたに与えた力で…』

『何もかも強奪してしまいなさい…』

Episode 17 A heart to waver (後書き)

この辺から前にも書きましたが“ファミ通クリアコミックス”から出ている「デビルサマナー 葛葉ライドウ対コドクノマレビト」の設定やら台詞やらを抜き出したりします。

Episode 18 The suffering of the emper

長くなりそうなので会話パートと戦闘パートに分ける事にしました。

（翌日）

ロビーに珍しく全員が集合する。

「氷死体？」

『ああ、ポートアイランドの裏路地で路上オールしていた若者の一人が氷柱になって見つかった。』

「氷死体って…」

「ゆかり、顔青いよ大丈夫？」

「だ、大丈夫に決まってるでしょ…」

「怖がつちゃってまー」

「なっ！こ 怖がつて無いっつのー！」

「へーゆかりさんこういうの苦手だ〜」

「うぐっ…」

「ま、まあ順平君も凌辱君もその辺に…」

「ハハハ、ところで質問なんすけど人間が簡単に氷塊になるんすか？」

「「「ならない」な」でしょう」

順平の問いに三人が一斉に答える。

「そ、そうなんすか…」

「でも人間の構成物の半分は水っていうじゃないですか…」

「確かに体内の水分だけを氷結させるのは理論上可能だが人一人を氷柱にするのは無理だ。」

「でも理論上可能何ですよね？」

「あくまで体内全部が水分としたらだ。」

「でもできるんですよ？」

「……難しいな。」

「人体には水分だけじゃなくカリウムやナトリウムなどの鉄分、脂肪などの有機物が有るからそれらを氷結させるには絶対零度下の冷気が必要なの。」

「絶対零度なんて自然界じゃあ南極の万年雪の下くらいしか起きないぜ。」

「前テレビで液体窒素で氷点下がどうか言っていましたけどそれじゃ無理なんですか？」

「液体窒素なんて使ったら鑑識にバレてニュースになってるさ。」

『だがニュースは原因不明の氷死体としか言っていない、という事は…答えは一つだな。』

「ああ。」

「ええ。」

「そうですね。」

『この事件の犯人は…』

「犯人誰つか！？わかったんすか！！」

「伊織、今それを明彦が言う所だ。」

「順平さん急に話しに入って来ないで欲しいです。」

「だってよー…さっきまで難しくてついていけないよ。」

「だからって急に割り込むのはどうかと思うけど…」

「じゃあゆかりっち分かったのかよ？」

「そりゃ全部は分からないけど…だからって急に騒ぐなって話じゃない！」

「二人共喧嘩しないで！」

順平とゆかりが喧嘩し始め風花が止めようとするが止まらない。

「伊織、岳羽少し黙ってくれないか…」

鶴の一声ならぬ美鶴の一声で「ピタッ」と止まる。

「瞬君…」

「さーて俺らも行くかーあんまり先輩方を待たしちゃ逝けねーしな。」

「そうだな。」

「ちよつと！何でいつも私を置いてくのよ！！」

「お前が動くの遅いんだろ。」

「女の子は、あんたらと違っていろいろ準備があんのよ！」

「戦場に行くのに何の準備があんだよ…死装束か？」

「何で死装束なのよ！」

「じゃあ、アレか？ジャンヌ・ダルクみたいに甲冑でも付けるのか？」

「それも違うわよ！」

『どうした？行かないのか？』

「明彦か…いや何かな微笑ましくなつてな。」

『あいつらか…確か 岳羽や有里もあんな感じだったな。』

「そういえば、そうだったな…懐かしい。」

『あいつらもまた俺達みたいに仲間を作って行くんだろうな…』

「…そうだな。」

賑やかに出ていく三人を見つめる二人、どこか寂しげにだが嬉しそうにも見える。

「真田さーん桐条せんぱーい何やってんすかー」

「早くしないとおいてっちゃいますよー」

「おわっ人の台詞取んじゃねーよ。」

「良いじゃないですかたまには。」

『さてあいつらが騒ぐ前に行くか。』

「ああ、そうだな。」

二人は歩き出した。

Episode 18 The suffering of the emper

そのうち戦闘パートも投稿します。

Episode 19 The suffering of the emper

戦闘パートも、3つに分けました。

「ポートアイランド駅裏路地」

『反応があつたのはここか…』

「あれ？何もいないじゃ無いっすか…」

「そんなはずわ…山岸！」

「少し待ってください…反応は確かにそこから感じます。」

『全員辺りを警戒しろ！…近くに居るぞ。』

その言葉に背中合わせに円陣を組む。

暗闇から一人の男が歩いてくる。

「おや、これはこれはどなたかと思えば貴方達ですか…」

『お前…なるほどな、今回も原因はおまえらか。』

「左様、さすが特別課外活動部…とでも言っておきましょうか。」

『褒め言葉として受け取っておこう…だがお喋りは此処までだ！！』

真田が走り出し攻撃するが…直前に止められる。

『ちっ！！』

バックステップで距離を取る。

「貴方の相手は私ではありませんよ。
クラウド…」

掛け声と共に男が現れる。

「後は任せましたよ…」

「…御意のままに」

そう言うと暗闇に消える。

『待て！！』

真田が追おうとするが男が立ちはだかる。

「悪いがお前の相手は俺だ。」

『そこをどけえ！！』

「……………」

「退く気は無いか。」

『美鶴？』

「なら…力づくで通させてもらう！」

全員が臨戦体勢になる。

「その意気込みは買っが、俺にはかり構ってて良いのか？」

『…どういう意味だ。』

「すぐに分かるさ…」

『なら何か起こる前にお前を倒すまでだ！！』

真田が動くと同時に他のメンバーも攻撃しようとした瞬間…

「バァーーン！！」

爆発音が響く。

「おわっ！…何だよこの音」

「ちょっと何！？…どつか爆発したの？」

「何が起きてる…山岸！状況を！！」

「ポートアイランド駅前広場に魔力を感知…この感じ事件の犯人です。」

「事件ってあの氷死体の！？」

「氷塊の次は、爆弾かよ！」

「いえ、それはちょっと違うみたいです。」

「…どういう事だ？」

「駅前に居るのは犯人だけですがその周辺に微量の魔力反応があります。」

「微量の魔力反応？」

「ハイ、広範囲に反応がありますからおそらくコドクノマレビトの残党かと。」

「やっかいだな…よしチームを三つに分けるぞ、犯人側は高校生三人だ。」

「…了解」

「了解です。」

「わかりました。」

「あの男は私と明彦、それに伊織、岳羽君達もだ。」

「つつす！」

「了解です。」

「残りは、残党に当たれ。…行くぞ！」

（天田・水無月・西条）

「…確かこの辺りのはずだな？」

「ああ、そのはず何だけど……」

「人どころか生き物がいるかも怪しいわね……」

「よし、三人別行動だ。俺はこのまま直進、天田は左、西条が右だ。」

「分かった。」

「任して!」

「じゃ行くぞ!」

「おう!!」

…… 5分後

「いたか?」

「いや、いない。」

「こつちも駄目。」

「どうする? もう一度行くか?」

「いや……一度風花さんに連絡とろ……」

「うわああああ!!」

「今の!……どつちから聞こえた?」

「えっと、あつちだと思う。」

麗奈が指差した方には、一本の細い道がある。

「ちっ……見落とした!」

「良いから行くよ!」

「お おう。」

三人は、声のした方向に走り出した。
数分走った所で前方に人影を見つける。

「あれ？…二人？さっきの悲鳴、確か一人だけだったよね？」

「…これだから現場慣れしてない奴は。」

「…どういう事？」

「悲鳴が聞こえたのが一人って事は、片方は犯人って事だろうがよ

！！」

「！！！」

「そんな辺り前な事もきずけないのか！！」

「……………」

麗奈は怒鳴られ下を向いてる。

「…まあ良い着いたぞ。」

三人の目の前には取り壊し予定のビルが建っている。

「えっと、ここ。」

「おそろくな。」

「じゃあ、あのドアの向こうに…」

天田の言った通り一本の通路の先にドアがある。

「…さーてどうする？」

「どうするも何も…行くしか無いでしょ！」

「殺人犯をこのまま野放しにはできない！」

「…行くぞ。」

三人はドアの前に立つ。

「じゃ開けるよ。」

「「待て。」」

さも辺り前のようにドアノブに手を掛けようとする麗奈を二人が止める。

「な…何よ？」

「普通に開けるとか…馬鹿としか言いようがねーな。」

「行動に移す前に少しは考えようよ。」

「なによ二人して…人の事バカバカいうんじゃないわよ。」

「…実際馬鹿だろ。」

「馬鹿じゃ無いわよ！あんたらが頭良すぎなんですよ…！」

「ハイハイ…分かった分かった俺達が悪うございました。」

「二人共お喋り止めて…行くよ。」

天田に無言で頷く二人。

「いい？321で行くよ、3…2…1…！」

天田のカウントと共に、水無月の足が動いた。

「うらああああ…！」

刹那、目の前にあったドアが弧を描いて飛んで行った。

「ガッシャアア…」

「…えっ」

「なっ…」

「ふう…」

驚く二人を尻目に一息つく水無月。

「何やってんのー!!」

「…何も。」

「…何も。じゃ無いわよ! 何で蹴破る必要があんのよ!」

「ハア…あのな、突入する前あんだけ騒ぎや待ち伏せされんに決まってるだろ。」

「あっ…」

「だからそいつら蹴散らす感じでやっただが…」
「？」

目の前に居るのは、ひしゃげたドアと共に倒れてる恐そうな男達…
じゃなく一人の少年だった。

「まさか単独犯とはな…」

「えっ…あの制服。」

「月光館…だな。」

言葉どおり月光館学園の制服を着た少年が、氷塊の前に立っている。

（氷塊…ちっ遅かったか。）

「…お前が犯人か。」

「犯人? 何の事だか…」

「とばけるな! その氷塊…お前がやっただろ?」

「えっ…」

「そんな…」

西条は、口を抑え泣きそうになり天田は唇を噛み締めている。

「さっさと白状したらどうだ?」

「白状も何も…」

「俺は睨み合いが嫌いだね…何するか分からんぞ…」
「僕はただの彫刻家の卵…それだけだ。」

少年は彫刻刀を取り出すと水無月に向かって投げ付ける。それを腰にかけてある刀で薙ぎ払う。

「やっと化けの皮が剥がれたか。」

「それは、お互い様でしょう…その殺気私と同類ですよ。」
「悪いがお前みたいな三下と一緒にすんな虫々が走る…」

双刀を逆手に持ち放たれた彫刻刀を弾きながら突っ込む。

「ちっ！…」

少年も応戦するため単刀を持つがリーチが違いすぎて話しにならない。

「オラオラどうした？さっきまでの威勢が無いぜ！」
「くっ…くそ！」

単刀を突き出すが軽く交わされ横っ腹に蹴りを喰らい後ろに飛ばされる。

「ぐっ…」

「何だ経験者相手は、初めてか？」
「ならば、『フリード』」

少年の背後に氷でできたゴーレムが現れる。

「行け！『マハブダイン』」

「なっ…マハダイン系…！」

「少しは楽しめそうだ…プロメティウス『マハラギダイン』」

ゴーレムの放った広範囲魔法も難無く相殺する。

「まだだ！ゴーレム『絶対零度』」

「この技…事件の…！」

「人を氷塊にするあれか…だが俺にはきかんぞ。」

「あんたに聞かなくても、あっちの二人はどうか？」

「しまっ…天田…！」

「それにあっちに注意が行ってるあんたも同じだ。」

「…狙いはこっちか。」

「そうさ…『極寒凍結』」

（ちっ…プロメティウス…）

二人に冷気が迫っている。

「瞬…！」

「早く逃げて！」

「逃げるって何処へ…？」

「何処でも良いから…早くしろ…！」

「…分かった！」

麗奈が駆け出したが冷気がすぐそこに近付いている。

「…仕方ない。」

「ドンッ」

「えっ…」

間に合わないと悟ったのか天田が西条を突き飛ばした。

「ぐっ…乾!!」

「くっ…カーラ・ネ…」

天田は冷気に包まれた。

「瞬!!乾!!…そんな」

凍った天田の側で俯く麗奈。

「二人共…私のせいで…」

彼女の目から雫がこぼれる。

「やっと邪魔が消えたか。」

「あんた今…何て言った？」

「何だ聞こえなかったのか？ならもう一度言ってやろう邪魔な」
「」
「消えたとな。」

「…さない。」

（…さない。）

「さあ西条、私の者にならんか？毎晩愛でてやるぞ。」

「…許さない。」

（…許さない。）

「…何だ？」

「許さない!!」

（許さない!!）

麗奈の体が金色に包まれていく。

「何だ…何が起きてる!」

「私の仲間を…」

（俺の仲間を…）

「私の大切な人達を…」

（俺の大事な仲間を…）

「絶対に!許さない!!」

（絶対に!許さない!!）

麗奈の体が完全に金色に包まれた。

く風花・コロマルく

「桐条先輩つその敵に、氷結は聞きませんアイギス達の応援に行ってください。」

分かった…岳羽も連れて行く、後は任せたぞ明彦。

《こっちはいいから早く行け!》

分かった…山岸アイギス達の元へ向かう案内を頼む

「了解です。」

く中略く

その場から500m先に広場がありますからそこで合流してください

い。」

了解だ。

「ワンワン！」

「コロちゃん？どうしたの？」

「ワンワン！」

「そっちに何か有るの？」

コロマルは北の方を向いて吠えている。

「そっちって確か麗奈ちゃん達……」

（まさか……麗奈ちゃん達に何か！？）

「ユノ！」

ペルソナを召喚してコロマルが吠えていた方を探る。

「お願い！間に合って……居た。麗奈ちゃん後の二人は……」

山岸が見たのは、氷と化した後だった。

「そんな……いやまだ間に合う！コロちゃん……！」

「ワンツ！」

「二人を助け……」

……さない。

「えっ……麗奈ちゃん！」

……許さない。

「今、コロちゃん向かわせるからそれまで……」
許さない！！

麗奈の体が光に包まれた。

私の仲間を…

「えっ？これって…」

私の大切な人達を…

「あの時のアイギスと同じ…」

絶対に許さない！！

「…有里…君？」

〈天田・水無月・西条〉

今、裏路地には氷付けにされた天田、水無月…その二人を氷にした犯人…そして金色に光る少女がいる

「何が…どうなってる？」

「許さない。」

（許さない。）

「あんただけは…」

（お前だけは…）

「くっ…来るな。」

「絶対に…」

（絶対に…）

「来るなあああ！」

「許さない！！」

（許さない！！）

「フールドッ！あいつを近づけさせるな！-」

「汝の名は…」

（汝の名は…）

「オルフェウス。」

（オルフェウス。）

麗奈から出て来たオルフェウスは通常と違い赤くそして神々しい。

「『嘆きの旋律』。」

（『嘆きの旋律』。）

オルフェウスはゴーレムと対人し琴を鳴らした。

「ポロン…」

「ぐあああああ！」

男は頭を抱え込み倒れ、ゴーレムは碎け天田達の氷も溶けた。

「己の罪を思い知れ…」

（己の罪を思い知れ…）

Episode 20 The suffering of the emper

最近、全くと言って良いほど時間が無く軽く放置せざるをえなかったんですが、今日から再開します。

〔天田・水無月・西条〕

裏路地のビルの中に犯人を含めた4人が倒れている。

（… 此処は何処だ？）

又もや不思議な空間に居る。

（確か俺は戦っていて凍らされて…）

「戦なら終わったさ。」

（なっ… 誰だ？）

「ふんっ昔の相棒を忘れるとは… “今” に被れておるの。」

（その声… 炎鬼か！）

「左様……」

覚えておいでか。」

（ちょっと忘れてたけどな…）

「… まあよい、
しかしおぬし…」

不様じゃの。」

(うるせーよ。)

「我と組んでいた時は、こんなならなかったのにお。」

(…何が言いたい。)

「また我と共に戦わんか？」

(どういう事だ？)

「我をまたおぬしのペルソナとして共に戦ってやろうと言っておるのじゃ」

(…プロメティウスは、どうなる？)

「あの魔神か？どうにもならんわ…ただ、今回みたいに危ない時には我の名を呼べ、それだけだ…」

意識がゆっくりと落ちていく。

「ワンワン！ワンワン！」

目が覚めると先程のコンクリートが目に入る。

「…」

さっきのビルか。」

「ワン！」

目の前には白い犬が居る。

「お前確か…コロマルだっけ？」

「キューン」

「…そんな声出すな、俺は大丈夫だ」

「ワン！」

ゆっくりと起き上がる。

「さて、ほかの皆は何処だ？」

「ワンワン！」

「おっそつちか。」

コロマルの所に行くと言奈が倒れてる。

「……………」

「クウン？」

「いや、

分かってんだよコロマル、分かってんだけど……

男子が女子の体をしかも動けない体を触るってのは…ねえ？」

「その言葉はさすがですが、今動けるのは瞬君だけですから

…不可抗力かと」

「不可抗力って言われても…

罪悪感しか得られない気がする。」

「とりあえず、エスケープロードが使えませんか外に連れ出してください」

「…了解です」

決心すると麗奈を背中に背負う。

「あの〜風花さん？」

「ただ今、背中の感覚が敏感になってる感じがするんですが…気のせいでしょうか？」

「気のせいです、さあ、後300mくらいですから頑張ってください」

「はい…」

こうして数秒の間に何かを得た水無月だった。

「よーいしょっと！」

「お疲れ様です、じゃ今から使うから離れてね」

「了解です」

麗奈は白い光に包まれたかと思うと消えていた。

「へーこれが…」

初めて見たな。」

「無事移動完了です、次は天田君を起こしてください」

「あっ…天田忘れてた。行くぞコロマル！」

「ワン！」

一人と一匹は走り出した。

「おい…天田？」

「ワンワン！」

「返事くらいしろって…冷た！」

天田の体は、氷のように冷え切っている。

「まずいです！早く温めないと」

「まずいって言われても…」

「ワンワン。」

「おっコロマルなんか有るのか？」

「ワン！」

「じゃ任せたぜ」

「アーン…」

コロマルの体が青白い光に包まれていく。

「コロちゃん、ペルソナは駄目…」

「いや良い！やれコロマル」

風花が慌てて止めようとするが、水無月がコロマルを促す。

「BURN！」

倒れてる天田の数センチ前に火の玉が着弾する。

「熱っちいー！」

「ほら、大丈夫だ。」

「何が大丈夫だ何が！」

天田は今にも瞬に殴り掛かる勢いで怒鳴っている。

「そんだけ怒鳴れりや大丈夫だ」

「お前！…普通大火傷の重傷だぞ！！」

「大丈夫だって、普通火傷通り越して即死だから（笑）」

「……………」

天田はワナワナ震えてる。

「あり？どーした天田、優等生が台なしだぞー」

「ふ……」

「…ふ？」

「ふざけんなー！！！！！！！！！！」

「おわっ！天田がキレた！！」

コロマル逃げっぞ」

「逃がすか！！」

不規則な鬼ごっこが始まった。

「待てや、ゴラァ！！」

「フハハハ誰が待つか。」

「ワンワン」

コロマルは楽しそうに二人を追いかけて行く。

「アハハハハ…捕まえてご覧」

「…キモいわ！」

「何だお気に召さなかったか…」

「当たり前だ!!」

「なら、これならどーだ。」

召喚器を引き抜く。

「さあ、ショータイムの始まりだ…『プロメテウス』」

瞬の周りに蒸気が舞う。

「熱っ…こんな目暗増し効く……か」

天田の目の前には麗奈が立ってる。

「なっ…どーなってるんだ？」

「『さあ?どーなってるでしょう!』」

「お前…ミズキだよな？」

「『その通り、俺は水無月 瞬 だぜ』」

「何でそんな格好…」

まさかお前女装が趣……」

「『ちげーよ!』」

「じゃあ何でそんな格好で？」

「『あえて言うならサービスだ』」

「サービス？」

「『そ。男相手に追いかけてこつてのもつまんねーだろ？だからせめて格好だけでも。』」

「何だそれ。」

「ちなみに声は、地声だ。」

「その姿で、男の声出すなー！！」

「その姿で？」

「あつ……………」

しばらく沈黙が流れる。

「『アハハハっ本人にはらされなくなかったら捕まえてご覧』」

「なっ待てコラ！」

「『ホラ乾！早く来無いと逃げちゃうぞー』」

「絶対捕まえる。」

「『そんな怖い顔してるとモテないぞ』」

「ああ、もうやりにくい!!」

「『ヤルって…乾私の事そんな目で見てたの……最低。』」

「…ああ言えばこう言う!」

「『もう乾何て知らない!!』」

「なっちよつと待てよ!」

「『…もう話し掛け無いで』」

「そんな」

「『プツ……ククツ』」

「?」

「『アハハハっ』」

「なっ…何笑ってんだよ!」

「『いやー悪い悪い、めちゃくちゃ面白かったからさ』」

「……プチッ」

「『どーした天田?顔が引き攣ってるぞー』」

「…そーいやミスキお前だったなーすっかり騙されたぜ」

「『あれ？天田くーんもしかして怒った？』」

「いいや…怒っちゃねーな」

「『そ、そう…』」

「でも…この感情は怒るよりもキレるって感覚だ！」

「うわー！」

鬼ごっこ再開

「待たんかコラア！」

「誰が待つかー」

「お前に選ばせてやる。」

「何をだ！」

「今すぐ止まって殴られるか…ペルソナで死ぬか……」

「どっちも嫌じゃー」

「ぶっ殺す…『カーラ・ネミ』」

周囲を走り回り逃げる瞬の後に雷が走る。

「風花」

「天田君、水無月君、無事なら先輩達のサポートにつ……」

あれ？二人共？おかしいな、さっきまでここに反応があったのに……」

「キューン」

「コロちゃん？」

どうしたの？そんな声出して」

コロマルは、絶えず一方を見てる。

「？……あっちに何か有るの？」

コロマルの見てる方向に意識を集中させるとギャー、ワーツという声と共に二人の姿が、見える。

「居た！！コロちゃんありがとねっ。」

「鬼ごっこ二人組」

「たーすーけーてー」

逃げ回る瞬、その後方から橙の巨人共に天田が追っ。

「Help me」

「……『イノセントアタック』」

「どわっ……」

危ねーなクソやろう！殺す気かつー！」

「今更、気付いたのか」

「（まずい、あいつ目がマジだ。このままじゃそのうち捕まっちゃう。）」

「（正直、疲れてきた。でも、今更怒り冷めた何て言えないよな）」

「（この状況どうしよう…）」

二人が内心困つてると頭に声が響く。

「二人共！何やってるんですー！！」

「がっ！頭が…」

「何するんですか風花さん。」

「何するんですかじゃ無い！この大事な時に何遊んでるんかー！！」

「えーとですね…いろいろと訳が。」

「言い訳何かしてる暇が有るならさっさと援軍に行つて来て下さい

「!」

「「ハイ!」」

二人は、アタフタと走って行った。

Episode 20 The suffering of the emper

今日中にもう一話くらい投稿します。

Episode 21 The suffering of the emper

何か最後らへんグダグダと言うか若干へんな感じに思いますけどスルーしてください。

（真田・桐条・岳羽・伊織）

真田と男が、向かい合ったまま動かない。

『お前の目的は何だ？』

「さつきも言っただろう…足止めだ。」

『…悪いが、お前みたいな暇人に付き合う程暇じゃないんでな、さっさとどいて貰おうか！！』

真田は、男に向かって走り出す。

「っ明彦！？考え無しに突っ込むな！！」

「あの一先輩。」

「岳羽？何だ！」

「真田先輩に釣られて馬鹿が一人突っ走りました。」

「……………」

（真田・伊織）

『にらめっこは、性に合わん！』

「へへっ、先手必勝ってね。」

真田と合流した順平が共に攻撃する。

「『うおおおおあ』」

「ふんっ若いな…ぬああああ！」

両手で牽制される。

「おわっ！」

『ちっ…やはり一筋縄ではいかんか。』

拳を構え直し再び向かい合う。

『順平！隙をみてまた仕掛けるぞ…！』

辺りは静まり返っている。

『おい！返事くらいしろ…！』

真田が振り返るが順平は居ない。

『…順平？』

（岳羽・桐条）

「たくつあの馬鹿何処行つた「うあああ」あれ？この声……」

「岳羽！危ない！！」

「えっ……」

桐条が岳羽を引き込むと同時に、声の主が突っ込んで来る。

「一体何がどうなって……って順平！？あんた何で此処に？」

「痛つてて……ん？ゆかりっち？何で……」

「こつちが、聞きたいわよ！」

「うーんと……確かあのいかついオッサンに……真田さんは！？」

「明彦ならそう遠く無い所に居るそうだ。」

「つーかあんた！意気揚々と突っ走ってった割にすぐやられるって
どういう事よ！！」

「しょうがねーだろ！

相手めちやくちや強いんだからよ。」

「どーだが、相手が強いんじゃない？無くてあんたが、弱すぎるだけじゃ
無いの？」

「んだとー！！」

「何よ!!」

「お前達!喧嘩している場合か!!時と場所を考えろ!」

（真田）

真田が先程から攻撃を仕掛けるが全部いなされる。

『クソツ…埒があかん』

「お前の力は、そんな物か？」

『…まだまだ!!』

召喚器に手を掛ける真田

「出番だっ…『カエサルッ』」

真田から出て来たカエサルを見て男が、呟く。

「…なるほど、あの方が、お前と闘わせるの理由が分かった」

「…どういう事だ!!」

「どうもこうも、見ればお前も分かる…召喚『ポンペイウス』」

「（ポンペイウスとカエサル……この二つの名で考えられる事は、

「っただけだ」

「ポンペイウス……なるほど、ローマ内戦の再現をしようと言うのか？」

「正確には再現では無いな……あの方は俺が勝つのを望んでいる。」

「お前らの思い通りに行くのは癪だが……良いぞ、サイを投げてやる！！」

「行くぞカエサルっ『デッドエンド』」

「ポンペイウス…『ゴッドハンド』」

カエサルの剣とポンペイウスの拳がぶつかり合い周囲に衝撃音が響く。

「悪いが、お前のデータは把握している…『ブフダイン』」

真田に氷塊が放たれると横っ飛びで回避する。

「相性最悪だな……『ジオダインッ』」

「そんなちんけな雷じゃ、たいしてダメージにならんぞ…『マハブフダイン』」

「まずいな…『ジオダイン』」

「ほう、防御を捨てたかその心意気お見事…『マハブフダイン』」

（手傷くらいしか負わせられなかったか…）

「後は、任せたぞ伊織・岳羽…美鶴」

周囲を冷気が包み込んだ。

（岳羽・伊織・桐条）

「（明彦？）」

「どーしたんすか？」

「早く行かないと、真田先輩だけじゃ心配です。」

「ああ、すぐ行く。」

（今、一瞬…）

美鶴が歩き出した時周囲に轟音が響く。

「おい…今のつて。」

（まさか…）

二人が美鶴は、走り出していた。

「ちよっ……先輩!？」

（妙な胸騒ぎがする…頼む無事で居てくれ）

三人が目にしたのは氷に飲まれる真田の姿だった。

「明彦？…返事をしろ明彦！」

「……そんな。」

「真田さん！真田さん！何で…畜生！！」

「明彦おおー！！！！！！」

Episode 22 The suffering of the emper

好きな技が、原作に無いのは、軽くショックですよね。

（何だ…ここは）

真つ暗な空間で真田は横たわっている。

（とりあえず、此処から…体が動かん）

なんとか動かそうとするがびくもしない。

（手足は駄目か…指、駄目…おっと首もか…体ごと凍り付いた感じだな）

なんとか体をよじろうと思うが、もがく事もできない。

（こう言う状況になると気弱になるな、心まで凍らされたか…）

（確か子供の頃シンジに殴られた時もこんな感じだったな…

シンジ…お前もこんな感じだったのか？）

何も無い虚空に思いを飛ばす。

（なあシンジ、お前はこういう思いで“死”を受け入れたんだ？教えてくれよシンジ…なあ、シンジっ……）

真田の頬を一筋の水滴が伝う。

（俺は、このまま…死ぬのが怖い、自分の時間が終わるのが怖い、あいつらと離れるのが……）

（“怖いんだ”）

く 岳羽・伊織・桐条く

美鶴が、真田の体を譲っている。

「明彦！…明彦！！」

呼びかけても反応が無い。

「お前…ゼツテーゆるさねえ！！」

「順平なんかと意見が合う事なんて無いと思ってた。でも今回ばかりは…」

「「一発噛ましてやらないと気が済まない（ねえ）！！」」

「行くぞ！ゆかりっち！！」

「言われ無くても分かってる！！」

「うおおお！！」

「はあああ！！」

順平が出した火急にゆかりの暴風が混ざり膨張して行く。

「ミックスレイド」

「何だと!？」

「俺達の怒りを!」

「仲間を傷つけられた痛みを!」

「「思い知れ!!」」

「「トリスアギオン」」

「真田」

（いろいろな事が、怖い、俺が居なくなるのも、あいつらと分かれるのも、俺のすべてが“死”の一文で片付けられるのが怖い…）

真田の頬を伝った涙が、ペンダントに触れる。

「怖くたって良い。」

（…誰だ？）

「怖くたって良いだろ？」

（この声…まさか）

「それが…死を恐れるのが、人間何だからよ。」

（シンジっ！シンジなのか！）

「……………」

（答えてくれよシンジ…俺は、これからどうすりゃいいんだ…！）

「……………」

（あの時、力だけじゃどうしようも無いって分かったのに…また同じ過ちを繰り返してる。）

「……………」

（こんな俺はどうすれば良いんだ！）

「ガッ…！」

真田は、何かに殴られた。

「さっきから、聞いてりゃグチグチ弱音ばっか吐きやがって…こんなんならまだ昔のお前の方がまだマシだぜ！」

（グッ……………イテエ）

「お前には……………まだ守る物が有るだろ」

（お前に殴られるなんて、いつ以来だろうな……

だが、おかげで目が覚めた！！）

「礼なら俺じゃなくリーダーに言っただな……」

（？ どういう事だ）

「どうってお前……まあいい、さっさと行け。」

（おい！ どういう事だ！？ ちゃんと説明しろ！！）

「いいから行け。桐条によろしくな……」

（おい！……）

「ああ、それと光りに従え。」

（……光り？）

（岳羽・伊織・桐条）

「トリスアギオン」

男が巨大な炎に飲み込まれる。

「どうだ、あんちくしょう！」

「オレッチのフルパワーを喰らっ……」

男が片膝を付いている。

「さすがに焦ったが…まだ耐えられる、威力不足だな。」

「…んなの有りかよ」

「うつそ……」

「種切れか？ならこっちの番だな。『マハブフダイン』」

地面が凍り付いていく。

「下が駄目なら上に逃げるまで！『イシスツ』」

「おお…逃げるが勝ちつか？『トリスメギストス』」

「逃がさん…『ゴッドハンド』」

上空に逃げる二人に追い打ちを掛ける。

「ハッハァー順平様にそんな物効くか」

軽々とかわす順平。

「…確かに素早いな、だが。」

ゆかりの方を見て言う。

「そっちの女は、どうかな？」

「！危ねーゆかりっちー！」

「もう遅い『ゴッドハンド』」

順平が気付いた時にはゆかりに金色の腕が迫っている。

「えっ……………」

「ゆかりっちー！」

めをつぶり顔をかばうが衝撃が来ない。

「…あれ？」

めを開けると目の前に凍りの壁が有りゴッドハンドを妨げている。

「おい、これって…」

「…敵ながらお見事。」

「岳羽…大丈夫か？」

「「桐条先輩！！」」

だが突然崩れ落ちる。

「！先輩！？」

「済まない…衝撃すべてを受け流せなかったようだ。」

「ゆかりっち！回復！！」

「分かってる！！」

「怖かったんだ……真次郎、湊、…明彦、その上君まで失ったら私は…」

「分かった、分かったから…喋らないでください！」

「先輩っ！桐条先輩！！」

「済まない明彦、お前を救えなかった……そしてお父様、今そちらに参ります。」

『いや、お前は欲やつてくれた。』

（真田）

真田は何も無い空間を漂っている。

（…この暗闇の何処に光りが有るんだ？）

歩みを止め辺りを探そうとする。だが足が、体が、頭に動け！進め！と促す。

（だが何と無く感じる…）

どのくらい進んでいたのだろうか？気付いた時、真田は有る一点に進んでいた。

そしてその先に……

（もしかして…あの一番星みたいな奴か？）

真田の目線の先に、それこそ星の様な光りがぼつんと暗闇に存在している。

（まだあんなに有るのか…）

真田はげっそりした顔で星の様な光りを見てる。

だが“死”という物への恐怖が、それに何より皆にまた会いたいという思いが、真田の体を光りへと近づける。

（まだ行ける…）

悲鳴を上げる体に鞭打ち再び歩き出す…

もう何時間歩いたんだろう、体どころか心までも崩れ落ちそうだ。

（もう少し何だ……もう少しで）

その場に倒れこんだ。

（最後の最後で力尽きるか…

駄目だな俺は。

シンジの時も、有里の時も、踏ん張らなきゃいけない時に踏ん張れない……)

(俺は、どうしたいんだ……)

「お前は、よくやったよ……褒めたたえても良いくらいな、此処まで来たんだ、もう休んでも良いだろ？」

そうだな……正直もう疲れた。身も心もボロボロだ……

『馬鹿野郎！さっきシンジが託した思いを、気持ちを、無駄にする気か……！』

でも……このまま投げ出して良いのか？

「人生諦めも必要だ、そしてお前は、よくやった方さシンジや美紀だって快く迎えてくれるさ。」

そうか……そうだな。

『おい、諦めるのか！天田に……いや天田だけじゃ無い、仲間に“諦めるな”と言い続けたお前が諦めてどうするんだ！』

……何とでも言え。

『お前は、言ったな！警察に入ったのは自分よりも立場が低い人達を守るためだと。たとえ、この腕が届く範囲しか救えずとも、必ずその人達を守り抜くと！』

……

『守り抜けよ！大切な仲間達を！！』

…………ギリッ

『踏ん張れよ！頑張れよ！ここで踏ん張らなきゃ…誰があいつらを、美鶴を助けてやるんだよ！！』

うおおお！（

雄叫びと共に真田の手が光りに触れる。

協力的な閃光が辺りを包む。

（暖かい…）

真田の体は、光りに包まれている。

（熱くも無く、寒くも無い…心地好い）

目をつぶり光りの中に浮かぶ。

（だが、この何処か懐かしい感じは…）

何処からか声が聞こえてくる。

岳羽…大丈夫か？

桐条先輩！！

だが突然崩れ落ちる。

！先輩！？

済まない…衝撃すべてを受け流せなかったようだ。

ゆかりっち！回復！！

分かってる！！

怖かったんだ…新次郎、湊、…明彦、その上君まで失ったら私は…

分かった、分かったから…喋らないでください！

先輩っ！桐条先輩！！

済まない明彦、お前を救えなかった…そしてお父様、今そちらに参ります。

（美鶴？美鶴！）

（俺は、見るだけで何もできないのか……）

真田の心情に反応して光りが近づく。

（これ…ペンダントか？）

そこにはいつも付けているはずのペンダントが光りを放ちながら青白く光っている。

（これを取れば良いのか？）

真田が取ろうとするとペンダントの方が近付き首にかかる。

（いつも付けてるのになんだか懐かしいな…）

く過去く

3月2日 三送会

「真田さん、卒業おめでとつございます。」

『何だ、お前まで…さっきまで岳羽や伊織に散々言われたんだが』

「まあまあ、めでたいんだから良いじゃないですか。」

『こついつのは苦手なんだがな…』

「そんな真田さんにプレゼントです。」

『……何で俺に？』

「卒業祝いです。」

『俺は、まだ卒業して無いんだがな…』

「最初は、明日渡すつもりだったんですが、真田さんの事だから当

日じゃ多分無理って結論に行き、今日渡す事にしました。」

『軽く不快感を得たが…まあいい、有り難く受け取ってやる。』

「珍しいですね、素直に受け取るなんて」

『こんな時くらい後輩の顔を立てんな』

「さすが真田さん、良く分かっていらっしゃる。」

『まあいい、早速開けるぞ？』

「どうぞ、どうぞ。」

包み紙を破り箱を開けると怪しい光りを放つペンダントが綺麗に収まっている。

『これは、何処かで見たな…』

「絶冷石のペンダントです。」

『確か、氷結が効かなくなるって言って俺に持たせてた青い石か。』

「ええ、その通りです。」

『だが何で今更？戦いはもう…』

「多分、これから真田さんを守ってくれますよ。」

『氷結、無効、これから………そうか！美鶴からの攻撃をこれで…』

「あの…真田さん？」

『助かる！！』

「えっ？」

『今までの輩は、卒業することに対してしか言っただけだ、俺の身を案じたのはお前だけだ。』

「アレ？何か誤解…」

『有難うな有里！俺の未来にちょっとした希望が見えた！！！！』

「完全に誤解してるけど…ちゃんと渡せたしいつか。」

（現在）

（そうか、俺の命を守ってくれていたのか…）

ペンダントを握る。

（力を貸せ有里。俺にはまだ…やる事が有る！！）

光りと共に虚空へ落ちていく…

（岳羽・伊織・桐条）

「桐条先輩っ！」

「しっかりしてください!!」

「良いんだ…私には贖罪の意義がある、世間、家族、そして仲間さえも巻き込んだ…」

「誰も巻き込まれたなんて思って無いです!」

「そうか…伊織は」

「あいつならまだ諦めずに戦ってます、だから、先輩も諦めて弱音なんて吐かないでください。」

ヨロヨロと立ち上がる美鶴。

「…済まない、君達には守られてばかりだ…今度は、私が」

『いや、お前は良くやった。』

「えっ…この声まさか？」

「明彦……………」

『今度は、俺の番だな。』

Episode 22 The suffering of the emper

トリスアギオン出したし…メギドラダインでも書こうかな？

Episode 23 The suffering of the emp

久々に1ページ投稿だ。

あと最初と最後の真田の『』に。が入ってますが気分で入れただけなので、スルーしてください。

『今度は、俺の番だな。』

「えーと……真田さんですよね？」

『何だ岳羽？幽霊にでも見えるか？』

「あついえ……」

会話の途中で、美鶴が立ち上がる。

『美鶴：悪い心配』

「パンツー！」

渴いた音が、辺りに響く。

「この馬鹿！……どれだけ心配したと思ってる」

『……スマン』

「昔っからそうだっ！人に心配ばかり押し付けて、どんどん先に行ってしまう……あのまま、お前が起きなかったらと思うと……」

『……………』

「どれだけ寝坊すれば気が済む……」

『悪い……遅くなった』

「遅すぎだ……馬鹿者」

「グオッ……」

「順平！」

順平が飛んで来る（本日二度目）

「ちょっと！オレツチ頑張ったのにサラっとし過ぎない？解説」

「つーかあんた何でそんなタイミング悪いのよ！空気読みなさいよ
空気！」

「ふっふーん、オレツチKYですから」

「へー……あんた自覚してるんだ」

「あー……いくら自虐ネタでも凹むぜゆかりっち……」

『騒いでる所悪いが順平、選手交代だ』

「えっ真田さん？てことは……蘇っ『死んで無いぞ俺は……！』そ、そうすか」

『まあ、確かに……死にかけたがな』

「先輩…」

『寝てる間にシンジを見てな…“しっかりしろ”って殴られたよ』

「真田さん…」

『おい、デカ男！待たせたな、第二ラウンドを始めようじゃないか』

真田が、歩こうとすると腕を捕まれる。

『……美鶴？』

「私も…まだ戦える！」

『無茶を言つな！それに、病み上がり何だから』

「それは…お前もだろう、それに…今、お前を一人にしちゃ駄目な気がするんだ」

『美鶴…』

「あと、これは私以外にも言える事だが…もっと仲間を頼れ」

『…そうだったな』

男に、向き直る真田。

『悪いが、変則タッグマッチだ、そしてこれが俺の…いや、俺達二人の力だ…！』

真田の出したカエサルにアルミテシアが重なる。

「ミックスレイド」

「魅惑の電撃!!」

周囲に赤みを帯びた雷が飛散する。

「やったのか？」

「いや…逃げられたみたいだな」

「そうか…うっ！」

『おい!…たく無理するからだ。岳羽っ肩貸してくれ!』

「あっはい!」

『ん?何寝てる順平、帰るぞ。』

「…何か最近ゆかりっただけじゃ無く、先輩も俺の扱い酷くないっすか？」

『何だ、今更気づいたのか?』

「ひどいっ!!」

三人+約一名は、騒がしく歩き出した。

「約一名って何だ!!もつとちゃんとしろ作者!!つか、オレッチ

を約すな！
」

Episode 23 The suffering of the emp

えーと、都合上アイギスと凌辱の残党討伐編は、カットしました。

あと次回から新章に入ります。

第一章 後書き！

の予定でしたが普通に振り返った所で、文が長くなるだけなので、第二章のちよつとした説明をちよつと。

ずばりサブタイは、私立月光館学園編

ん？変わって無いって…そりゃあ字だけじゃそうです。

次からの月光館学園は、本部の大学なのです！

天田、水無月、西条の三人もとうとう卒業です。

ちなみにやつとトリニティソウルのキャラが書けます、長かった…
何度感想で「トリニティソウル出さないんですか？」と書かれたか…
…（実際そんな書かれて無い

さて、ここで人物構成や設定をちよつと。

まず三人の入試から始まり、入試 卒業式 入学式の順で書こうと思います。

次に、人物構成ですが、まず三人＋で神郷 洵（カンザト ジュン）が出て来ます。

次に月光館学園にいるメンバーですが入学式のサークル勧誘で、四

人の前に神郷 慎（カンザト シン）が、ここでの会話で名前だけですが茅野 めぐみ（カヤノ メグミ）が出て来ます。

で、この四人の入るサークルの部長は…見てのお楽しみで。

こんな感じですかね、それではまた次回会いましょ。

第二章 月光館学園編 Episode 0 桐条先輩の特別授業（前書き）

第二章からサブタイを日本語にしました。

和訳免許なもんで…

第二章 月光館学園編 Episode 0 桐条先輩の特別授業

（翌日） 1月 11日

「お前達ちよつと集まれ」

マツタリした朝の時間が、急に凍てつきラウンジが緊張感で包まれ、誰も口を開こうとしないが…何処にでも例外はあるものだ。

「なんすかゝそんな怖い顔して、せつかくの美人オーラが台なしですぜ」

呼ばれた三人の一人 水無月 瞬 火炎系のペルソナのおかげか凍てつく波動も彼の前では湿気に変わる。

「いや…真面目に聞こうよ」

次に口を開いたのは 天田 乾 氷結は苦手じゃないが、耐性が無ければ意味はなさそうだ。

「私は、どつちかと言うと今の空気が良いかな」

最後は、西条 麗奈 三人の内最後の一人だ、特に弱点は無いがダメージがある所を見ると…よほど強い冷気らしい。

で…何故、今更キャラ紹介をしているのかと言うと、この章での主な登場人物は、この三人のように学生なのである。

第二章 プロローグ

「三人共、明後日センター試験だが…勉強は順調か？」

「ハイッ！」

「アレ？明後日だっけ？」

「さ、さあ…」

上から天田、水無月、西条の順である。

『おいおい…後ろの二人そんなに大丈夫か？』

「なーに、心配いりませんって。ちよろつとクリアしますよ」

『今の状況で、軽口を叩けるのは、順平の様な馬鹿が自信のある奴のどちらかだが…お前は、大丈夫そうだな』

「ええ、モチツス自信しか湧きませんから」

『ふん、頼もしいな、ところで西条お前は…』

真田と共に天田と水無月が、麗奈を見るとそこには、人気漫画「明後日のジョージ」の主人公 ジョージ・M・ライカン のキメゼリフ「燃え尽きたぜ…ジョージ」のように真っ白になった麗奈がいた。

ちなみに「明後日のジョージ」は、親の都合で日本に来た青年ジョージが好きなボクシングをやるうとジムに行ったが、そこはムエタ이의ジムで仕方なく、ムエタイに打ち込む話だ。

『お、おい！？どうした！！』

「もう、何もかも燃え尽きました…」

『どういう事だ？ちゃんと説明しろ』

「実は……」

麗奈は、皆に昨日の戦いで気を失った後この頃の記憶が所々抜け落ちてるのを話した。

「…記憶が無いとなると大事だな」

『どっか頭打ったりしなかったか？』

「うーん…」

「あの…さすがに気絶した後に打ったなら覚えて無いんじゃない」

「確かに…天田、水無月、近くで見ていて何か…二人は何処に行った？」

辺りにいない水無月の声が階段から聞こえる。

「あいーす…呼びました？」

『たく、何処行ってたんだお前ら？参考書？』

「先輩達さー記憶どころ言う前に、もっと大事な事気付きましたよ
うよ…」

「その大事な事とは何だ？」

「俺達には、後二日しか無いって事ですよ」

『お前：自分達だけでも勉強したいってか？』

真田を含め全員が、二人を軽蔑の目で見る。

『仲間が大変な時に何考えてやがる』

真田は、今にもキレそうだ。

「ちょっ…やばいよミスキ」

「なーに大丈夫だって俺に任せなさい！」

心配する天田に全員に聞こえるように言うとラウンジの中央に歩いて行く。

「良いです？もう一度言いますよ、俺達には後二日しか無いんです」

『まだ言うか！！』

真田が水無月の胸倉を掴むが、気にせず続ける。

「だが、それは俺達だけじゃ無い」

『……どういう意味だ？』

胸倉を掴んだまま聞く真田。

「…まだ気ずかないんすか？まっ真田さんですからね」

『っ……！！』

真田に、殴られるが怯まず話し続ける。

「良いですか？俺達に二日しか無いって事は、そこにいる麗奈にも二日しか無い。」

つまり、その記憶があやふやな麗奈を、センター受けさせて合格させるまでに学力を戻す時間が後二日しか無いって事なんですよ。」

「……『あっ……』……」

「で、真田さん。あなたが今やることは俺を殴る事じゃなくて、さっさとあいつに勉強を教えることじゃないんですか？」

「えっじゃあ…その参考書は二人だけで勉強するためじゃなくて、私のために持って来たの？」

「そうだよ、じゃなきゃ天田が賛成するかよ…」

しばしの沈黙

「……『ええー！！』……」

「えっじゃあさっきまでの青春ドラマチックなアレは？」

「えっ？知らないっすよ。真田さんのはやとちりでしょ。」

「えー…じゃあさっきまでの妙な息のあいかは、何なのさ？」

「さあ？つか良いんすか？どんどん時間が…」

その一言で、慌ただしくなる。

「山岸！ゆかり！今すぐ準備だ！！」

「はっハイ！」

「りよ、了解です！」

「麗奈ちゃん、僕が二人つきりで勉強を…」

「あなたは、ダメです」

「何言ってんだ凌辱…それにアイちゃんまで」

「だってー…」

「昔みたいに凌辱君が絡んだら反対しなきゃダメかと…」

『…二人共、高校の勉強知らないだろ』

「真田さん。何か俺に言う事があるんじゃないですか？」

『その…悪かったって』

「一時的とはいえ、全員から軽蔑されたうえに殴られたんですからね。」

『だから…悪かったと言っているだろ！』

「…じゃあ許す代わりに俺の言う事何でも一つ聞いてください」

『何で俺が…「あー」中切れてんな…しばらく飯が食えないや〜」
「わかったよ…』

「言いましたね。約束ですよ」

「クアアア…」

「ちよっ…コロちゃんどいて！」

「キャンー!!」

「あっゴメンコロマル、足踏んじやった」

コロマルは天田の方へ逃げて行つた。

「山岸！君は、数学と理科系、岳羽は社会科。残りは、私が教える三時間事のシフト制だ」

「えっ休憩無しですか!？」

「今更何を言ってる…寝てる時間も惜しいと思え!」

「は、ハイ！」

こうして慌ただしくも楽しい日常が過ぎ去って行く。

1月 13日 ～センター試験～

朝早く、廊下に珍しく話し声が聞こえる。

「かああゝ…ねみーなおい」

「始発逃すと手遅れだからね、仕方ないよ」

いつもと違い制服姿の二人が、歩きながら話す姿は、対照的だ。

「5時、6時ならわかるが何故4時起き？」

「向こうに着くのに6時初じゃないと…」

「でも、神奈川だろ？特急使えば後一時間くらい寝てられんのに…」

「特急使つと向こうに着くのギリギリになるんだよね。それだけは、回避したい…」

会話を止めた天田の目の前に、4人の女性がダイニングテーブルに座っている。

「はよーす！朝から大変っすね」

「ご苦労様です」

水無月が、場を温め天田が労う。

「おはよう…二人共」

「もうそんな時間？…まだ4時じゃん」

「えーと…とりあえず大丈夫ですか？」

「普段なら大丈夫って言うんだけど…」

「さすがに二日間ぶつ通しはね…」

「まあ、なんつーか…ご愁傷様です」

四人でたわいもない話をしていると、こちらにきずいた美鶴が話しかけて来る。

「お前達、朝早くどうした？」

「いえ、始発で行こうかと思ひまして」

「悪いが二人共、出るのもう少し待ってくれないか…」

「何かあつたんすか？」

「それがな…まだ最後の詰めが残っているんだ」

テーブルの端に、放心状態でシャーペンを走らせている麗奈がいる。

「あー…じゃあ、俺ら特急で行きますよ。」

そつすりゃあと一時間くらい余裕出来ますから」

「すまないがそれで頼む」

「いえ、仲間のためですから。」

「さーて、少し寝っかな」

「お前最初から……」

「ん？何か言ったかなー天田君」

「……いや」

「ゆかりさん達も休んだら……」

先輩二人に声を掛けようと振り返ると机に体を預けていた。

「寝てるね完全に」

「それならそれで良いさ……さて俺も寝よつと！」

そう言い、ソファーに体を預けた後ゆっくりと意識を手放した。

く月光館学園前く

「キッ！！」

正門前に金持ちが乗る様なリムジンが止まる。

周りの学生は、立ち止まり眺め、警備の先生は緊張して固まっている。

その原因は車から降りてきた一人の人物だ。

「お騒がせしてすみません」

「あつ…い、いえ」

（おい…アレって）

（桐条 美鶴 ！？）

（えーと…誰？）

（お前馬鹿か！桐条グループの社長だろ！！）

（スゲー！生で見たの初めてだ）

学生達が、噂して騒いでる。

「えーと…今日は、お子さんの受験か何かですか？」

（お子さん…って）

（社長相手に敬語使えよ）

（あの人クビだな）

「いえ、後輩のです」

（（（……………後輩？）））

外野の意見が、一つにまとまった時車のドアが開く。

「結局車か…………」

「んー…外の空気うまい」

「…お前今まで寝てただろ」

「うわーすごい人」

「てゆーか、私達まで降りる意味有るの風花？」

上から天田、麗奈、瞬、風花、ゆかりだ。

「お前達、挨拶くらいしないか」

「どうも、騒がし…」

「待った先輩！挨拶は後回しで！！」

「おい！待てよ挨拶ぐらい…」

自分呼び止めた天田に携帯を突き出す。

「な、何？」

「天田…今の時間見てみる」

「8：55…だけど」

「試験開始は何時だ？」

「確か9…」

それだけ言うと二人は、走り出した。
(麗奈をひきづって)

〈第012番教室〉

「危なかった…」

「瞬…ありがとう」

「……おう」

「つか、よく麗奈抱えながら走れたな」

「…やわな鍛え方してねえからな」

『そろそろか…これより国語科の試験を開始する』

試験官の開始の合図が響く。

〈中略〉

『……………終了だ！そこっ鉛筆置け！』

そのまま解答用紙を裏にして速やかに退室しなさい。
『

「あー！やっと昼休みだよ」

「確かに長ーよな」

「2科目だよ、2科目。国語と英語で何で昼までかかんの！」

「まあ、まだ数学が残ってんだけどな」

「……ハア」

「………」

騒がしくも楽しそうな二人を眺める天田。

「…隣、良い？」

「うん？ああ、良いですよ」

一人の中性的な少年が天田の隣に座る。

「ええと、僕天田 乾って言うんだ。君は？」

「神郷 洵 よろしくね」

「ああ、うん。こちらこそよろしく」

「それにしても後ろの二人すごいね…」

「えっ！ああ…さっきからこの調子なんだ」

「今もだけど朝も」

「朝？ああ。でも、朝のは僕も関わってたからあんまり話したくな
…って洵教室一緒だったんだ」

「…一緒も何も隣の席じゃん」

「……………ええっ！」

「…いくら何でも隣にいる人の顔くらいは覚えた方が良くと思うよ」

「朝のごたごたで周り見てる暇無かった」

「確かにアレはすごかった…」
御想像にお任せします。

「朝はホント参った」

「あっそうだ、もうすぐ昼休み終わるから休憩室戻らない？」

「ゴメン後ろの二人何とかしなきゃいけないから先に行つてて」

「…わかった。んじゃ先行つてるね」

これが天田と彼の最初の出会いだった。

二月

それは、冬の終わりを知らせ、春への準備をさせる月。そして…

結果発表の月だ。

今、巖戸台分寮では三人を待つ大人達で異様な空気が寮内を埋め尽くしている。

順平（以下順） 「何か妙な気分だよな」

風花（以下風） 「フフっ そうだね」

凌辱（以下凌） 「子供を待つ親ってこんな感じなのかな…」

美鶴（以下美） 「そうだな」

風 「ですね…」

凌 「ところで、後ろから変な音が聞こえるんだけど…何かな？」

その言葉どつり凌辱の後ろらへんからガサガサと音が聞こえる。

風 「えっ私？」

順「いや、位置的に風花じゃないっしょ」

美「これは…外からだな」

順「外って事は、裏口辺りで何かやってんすか？」

風「でも？何のために…」

順「そりゃ…さ、探し物とかだろ」

美「だが目的がわからない、何を探している？」

凌「そりゃー、ゆかりさんとかの私物とか」

順「まさかー！そんなストーカーじみた事する奴…」

順、風、美「……ストーカー！？」「」

凌「僕、冗談で言っただけだ」

順「ちよっ…凌辱！見てこいよ」

凌「…何で僕が「言いだしっぺだろ！」わかったよ」

凌辱は、スタスタ歩いてく。

凌（んじゃ開けるよ）

順おっ

風（頑張って凌辱君）

美（後方支援は、任せろ）

順平と風花は、ティーカップを、美鶴は召喚器を持ちながら凌辱を見詰める。

凌「どなたですかー!!」

凌辱がドアを開けた…

「ん？何しているんだ凌辱」

順「…真田さんかよ!!」

凌「ていうか、真田さんは、何をしているんです？」

真田（以下真）「ああ、明日出すゴミの準備をな」

凌「そうですか…アレ？どうしたの順平？」

順「いや…緊張感と共に何か抜けてった」

風「でもよかった…本当にストーカーじゃなくて」

真「ストーカー…？何処だ、何処にいる!」

順「いや、あの違ってですね…」

真「何故俺に早く言わん!山岸、誰が被害を受けている!」

風「えと、その…」

真「まさか、お前か！」

美「落ち着け、明彦！」

真「落ち着いてられるか！」

美「…誰も被害に遭ったとは言って無いだろ」

真「……何？」

説明中…

真「なるほど、俺とお前ら双方の勘違いが原因と言う事が…」

風「そうなりますね…」

真「だが何かあった後じゃ遅いからな…遠慮無く俺に言えよ」

真田は、「確かこういう時の書類が…」と呟きながら、部屋へ戻って行った。

順「…何か真田さんが取り乱すのって珍しいっすね」

風「あっそう言われて見れば確かに…」

美「あいつは昔からああだ、自分の事は平気だが、仲間や友達のことになるとむきになる」

順「何か真田さんらしいな…」

凌「だね…」

順「だね…ってお前戦ってた頃の真田さん知らないだろ」

凌「あっうん。知らない」

順「お前な…」

風「フフツ」

外から犬の鳴き声が聞こえる。

風「あつゆかりちゃん達帰って来たんじゃない？」

その言葉と同時に玄関の扉が開く。

岳羽（以下岳）「ただいま〜さぶっ！」

アイギス（以下ア）「ゆかり大丈夫？」

順「よっお帰り二人共」

風「コロちゃんもお帰り」

「ワンワン」

岳「中、暖かい！」

ア「本当だ、外と温度大分違う」

風「そんな違うの？」

岳「もう寒い何の」

美「二月といえどまだ冬だからな」

順「ゆかりっち、寒いなら暖ためてやろうか？」

岳「はいはい、何バカ言ってるの…てかバカじゃないの？」

順「つか、二回も言うな！！」

凌「なら、僕が…」

ア「バカじゃないの？」

順「あらやだ。何このデジャヴュ…」

全員「アハハハハ！」

岳「今の台詞懐かしい〜いつだったけ？」

順「えと確か…あれだ！文化祭の片付けん時」

ア「そうだったね」

順「あん時は、面白かったな〜有里と友近が、コントやって…その

後宮本も混ざって「こんなかで女装が似合うのは俺だ!」って話
んなつて…」

ア「で私が、混ざったんだっけ」

順「そうそう、であいつに「こんなかで誰が可愛い?」って聞いた
ら、「俺だろ」って乗って来てさ」

ア「で、友近君が順平に振ったんだよね」

順「そこでアイちゃんがやらかして俺の首が…」

ア「アレは、順平がいけないよ」

順「うっ…まあそこでゆかりっちと友近のダブルパンチをくらった」

凌「何か楽しそうだな」

順「ああ、楽しかったぜ!友近がいて宮本がいて…あいつがいてさ」

岳「何気に充実してたよね…」

ア「うん…ゆかりは、リーダー一筋だもんね!」

岳「なっ急に何言い出すのよ!」

凌「彼に会いたい…会いたい!会いたいの!!理屈なんて無いの…
だっけ?」

岳「なっ…つか何で凌辱君知ってんのよ!」

凌「あの封印の部屋まで聞こえてきたよ」

岳「えっ…てことは湊君にも」

凌「うん！バッチリ！！（笑）」

岳「…死にたい」

ア「ゆかり！告白おめでとうー！！」

風「あの時のアレって告白だったんだ」

凌「こういうのドラマに有りそうだよね！…10年たったらまた会いに来る…みたいな」

順「つかあいつならどんな事してでも戻って来そうだな」

風「そうだね」

ア「戻って来たらちゃんとプロポーズしなきゃ駄目だよゆかり！」

岳「まだ、戻って来るって決まったわけじゃ…」

この時私達は、これが本当に成る事を知らなかった。 岳羽

瞬「ただいま戻りましたー！」

天田（以下天）「同じく戻りましたー」

麗奈（以下麗）「ただいま」

順「おっす！三人共、惜しかったなーもうちょい早くこればゆかり
っちの告白が見れたぜ」

瞬「えっゆかりさん誰に…つか告る人いたんすか？」

岳「どーいう意味かな…瞬君？」

瞬「怒るって事は、居るんだ…なーるほーどねー」

天「ゆかりさん彼氏居たんだ。てっきりリーダー一筋かと」

順「そのリーダーだよ天田君」

天「えっ…いつの間に？」

順「実は、エレボスの前ん…」

岳「あーもう！その話し良いから！終わり。ところで、天田君達結
果は？」

順「…逃げたな」

凌「…逃げたね」

瞬「完全に逃げましたね…」

岳「そこの三馬鹿うるさい！

じゃ、天田君から！」

後ろでブーイングが聞こえるが無視して話をする。

天「えっ僕からですか!？」

順「答え無くて良いぞ天田ー」

瞬「告白の真意は!」

岳「後ろうるさい!」

天「えと、口で言うアレ何でこれで…」

岳羽に証書を渡し順平達の方へ行く天田。

順「最後の抵抗だけがまあ良い」

瞬「いやいや、天田にしてはよくやりましたよ順平さん」

岳「…合格…やったじゃん天田君!…聞いて無いし…」

天「聞いてます。

ありがとうございます」

岳「あつゴメン…えと次水無月!」

瞬「答える前に告白の真相を!」

順「良いぞーその調子だ」

岳「何馬鹿言ってるの…おっ合格!おめでとう…ってコイツは、本当に聞いて無いや」

瞬「ええ、聞いてません」

岳「聞こえてるんなら、ちゃんと聞け!!」

瞬「あつちよっ…首が、首が締まる」

岳「あっ…ゴメン大丈夫？」

風「ゆかりちゃん、今のはちよっと…」

順「ゆかりっち、冗談抜きでそれは直そうぜ…」

岳「うっ…わかったわよ。次麗奈」

麗「残念ながら不合格でした」

瞬「まあ、二日で合格できる方がスゲーよな」

天「確かに…」

岳「まあ、状況が状況だったし仕方ないね次頑張ろ！」

麗「うっ…時間があれば」

瞬「とりあえず合否は置いて…誰が、先輩方に報告するの？」

全員「……………」

順「この流れだと…ゆかりっちじゃね？」

岳「何で私…」

凌「僕もゆかりさんだと思っな」

岳「凌辱君まで止め…」

瞬「俺も二人に同意…」

岳「風花…」

風「えと…その、ゴメンゆかりちゃん」

岳「天田君、麗奈ちゃん！」

天「……………」

麗「……………」

岳「目を逸らすなー！」

美「何を騒いでる？」

岳「あっ……………」

順「ここで遭遇かよ！」

瞬「隊長！どうしますか？」

凌「ここは、逃げましょう。全体に退避命令を」

美「ところで三人共結果は、どうだった？」

瞬（こちらマーキングされました！）

順（焦るな！まだチャンスはある）

凌（下手に動くと死ぬなこりゃ…全体待機命令を崩すな！）

岳「えと、私と風花が預かってます…」

風「ハイ…」

真「それで、どうだった？」

岳「えと…まず男子の二人から」

美「Excellent！！二人共よくやった！」

真「ほう、さすがだな」

天「ありがとうございます！」

瞬「だから言ったでしょ真田さん。軽々く突破しますって」

真「俺は、あんな軽い気持ちで受かるか心配だったが…余計だったな」

瞬（第一撃、回避しました！）

凌（だが本番は次だよ。油断は禁物だ）

瞬、順（了解）

岳「で、これが女子の結果です」

先に真田が受け取る。

真「……心なしか一文字多いのは気のせいかな？」

麗「えと……気のせいじゃないです」

美「だが試験前のアレでは仕方ない。次意地でも合格するんだ！」

麗「は、はい！」

先輩方は、去って行った。

順「……何も起きなかったな」

瞬「ですね、てっきりキレるかと思ってたのに……」

麗「私も……あんな怖かったの久しぶりだ」

天「ま、何も無くてよかった」

岳「本当だよ……寿命縮まるかと思った」

ア「ほんと……」

岳「あんたは、寿命無いでしょ！」

ア「なっ機械にだって寿命くらい有るんだから！」

こうして一日は終わった。

だが…

美「そうだ、西条。今日から私の部屋にこい、毎晩勉強だ」

麗「イヤアアアア！！！！！！」

約一名事実上処刑宣告を下された。

久しぶりにシリアス…かな？

二月中盤

麗奈は、再び月光館学園にいた。

「一般入試 前期試験」

読者の皆さんこんにちは。

どうも麗奈です。

作者と同じ様な挨拶をしたところで、何故私が此処に居るのかと言うと…前回のセンター利用入試で二日間の付け焼け刃も空しく不合格になったから。

それもこれもすべてあの時…

「これより前期試験を開始する！」

…話しの途中で監督の先生が来たようですタイミング悪いなあ！

そんなこんなで試験ですが全くと言って良いほど解らない。あの鬼…もとい氷の女王は、私に何を教えて来たのでしょうか？全く持った謎だ。

さてさつき中断された話しの続きを…えっ試験中？まだ二分も経ってません。

それに解らない物をどうしろと？どうにもなりません。

て事で話しの続きを…

何故私がこんなに馬鹿になったと言うと昔に聞こえた声が原因ですね、昔と言っても二、三ヶ月前ですが…一回目は、真田さんと初めて会った夜ですね。あの時真田さんはカッコヨカッター…まだこの時は、記憶は健在でした問題は次ですね。

二回目は、最近の話しと言っても一ヶ月前ですけど。

その時は、乾と瞬と私のスリーマンセルで敵に立ち向かい二人がやられた時にリミッターが運良く外れた…外れてしまった時に出てきましたその時は何故か私とリンクしてましたが…その後記憶が消えさり今に至る。

リミッターの副作用かな？

で今願うのは、その声の主に責任取ってもらい私の変わりに

【責任とろうか？】

おっと幻聴が、こんな都合良くあの声が出る訳…

【実際僕が迷惑掛けたのは事実だしね】

(えと…それホント？)

【僕は嘘付かないよ】

(じゃあ、お願いします)

【えと…ペンは持ってたね。答え教えるから】

(…解りました)

10分後……

（終わったーさっきまで解らなかったのが嘘みたい）

【お役に立てて光栄です】

（そういえば、名前何て言うんです？）

【アレ？言ってなかったっけ…まあ良いや、僕は 有里 湊 君と
同じペルソナ使いだよ】

（ん？どっかで聞いた事有るような…）

【あんまり似たような名前いないと思うけどなー】

（何で私に声を？）

【んー…一番共鳴しやすかったから…かな？】

（それだけ？）

【後、話し相手が欲しかったんだ】

（話し相手？）

【そう、何度も何度も同じ事の繰り返しでノイローゼになりそうだ】

（ちなみに何を繰り返しているんです？）

【……時間】

（時間？）

【そう、僕は時の回廊に囚われてるんだ】

（時の…回廊？）

【そう、それに捕まるとその時間から抜け出せ無くなる。】

（そんな物が…）

【僕の場合高二で止まってるんだ。敵と戦い命を落とした…けど気が付くと最初に戻ってる…文字通り永遠の１７歳さ】

（そんなの…キツすぎる）

【…優しいんだね君は】

（そんなの聞いて普通でいられるほど心は強くないですから…）

【なら優しいついでに聞いて欲しい…】

（？）

麗奈の目の前に白い少年が現れる。

【本当なら、君にワイルドの力を渡せば良いんだけど】

【今の僕では、話しをするので精一杯のようだ…】

【次…いつ話せるか分からないから、今伝える…みんなにも…伝え

て欲しい】

（みんなって特別課外活動部の？）

少年は静かに頷く。

【近い将来…ニユクスが復活する】

（ニユクス？）

【そう…ニユクスだ…いや…ニユクスだけじゃ無い…】

【エレボス、クジラ、イザナミ、アメノサギリ…これまで退けて来た強敵が一斉に…】

（…強敵？）

【本来なら僕も共に戦うんだが…如何せん囚われの身だ…】

【スマナイ…君達を頼るしか無いんだ…】

少年の頬を、涙が伝う。

（……………）

【此処から先は、遺言と思ってくれて良い】

（！？）

【みんなに、頼りないリーダーでスマナイと…】

【そして…ゆかり…に…約束…れなく…て……ゴメン】

言葉が、途切れて行く。

「待つてー!!」

突然大声を出したために全員がこっちを見る。

「こらそこ！静かにしなさいー!!」

「す、すみません」

「えーこれで！今日の試験を終了する」

麗奈は、帰り支度をしながら思い出す。

（さっきの…伝えなきゃ駄目だよね）

女生徒1「麗奈〽帰ろう」

女生徒2「つか、さっきのどうした？」

麗奈「ゴメン二人共！私、用事有るから先行くね!!」

女生徒1「あっちょっと…麗奈〽!!」

（絶対に伝えなきゃ!）

彼女は止まらない…心の何処かでタイムリミットが徐々に迫って着

ている事を知っているから…

第二章 月光館学園編 Episode 3 麗奈「あー試験中に天の声が答え

ちなみに次回も多分シリアス気味

第二章 月光館学園編 Episode 4 伝えたい言葉（前書き）

車の擬音ってどんなんだろう？

第二章 月光館学園編 Episode 4 伝えたい言葉

日が沈み掛け一通りの少ない路地を一人の少女が走っている。

（早く…できるだけ早く！）

もう彼女の記憶からあの声の事は徐々に失われていた……

「絶対！…間に合わせるんだから！！」

彼女の原動力は何か？

話を聞く事しかできない罪悪感か？

あの少年に対する同情か？

本来ならばそのどちらかだろう、遺言を伝えてくれと言われて伝え
ないほど冷血な人間はあまりいない。

では何故彼女は、走っているか？

（プロポーズの返事とか重要過ぎる！）

2割の乙女心と8割の勘違いだ。

「伝えたい言葉」

「てゆうか、さっき聞いたばかりなのに何でもう良く分からないのよ!」

説明するのは簡単だ。

彼、有里 湊の思考が強すぎるのだ…

彼女、麗奈にとっては単なる少年としか思っていないだろうが、世界を救う力を持った少年だ。

そんな彼の思考だ。

彼女のような覚醒前のペルソナでは、一瞬で一般人へと成り下がる。

故に脳を護ろうと、本能が排除するのだ。

「ああもう、とりあえず走る!」

今の世の中で彼の思考を受け止められるものは、そうはいないだろう。しいて言えば…

同じワイルドの少年か…

あの青い部屋の住人達か…

これからワイルドに成る少年だけで有る。

「では、お疲れ様です！参事官殿！！」

『そんな堅苦しく無くていい、昔みたく先輩で良いぞ』

「いえ、公私混同する訳には…」

『…面倒な奴だ』

「絶対！間に合わせるんだから！！」

『…西条？あんなに走って何処に……』

真田は車に走り出した。

「あっちよつと先輩！」

『スマン！後任せて良いか！！』

「あっハイ！お任せください！」

車で走り出した。

「ハア ハア このままじゃ間に合わない」

「プアー」

『西条！乗れ！』

「真田さん！」

「ボタン」

『たく…あんなに走って何処行く気だ？』

「ゆ…ゆかりさん…何処に」

『岳羽？さあ、よくわからんがとりあえず帰るぞ』

「お願いします」

『…大分疲れてるな』

「……………」

『…寝たのか？』

（……………）

光が眩しい。

（…………ん）

いや、光だけじゃないその空間自体が輝いている。

（…ん？）

その中心にぼつんと少女が、座っている。

(…ここ何処？)

そこには、少女以外何もいない。

(何か前にもこんなことあったようななかったような…)

【…またあったね】

(…朝の少年？)

【僕何かの言葉を聞いてくれてありがとう…でももう良いんだ】

(良くない！)

【ビクッ！】

(何がもういいよ！未練タラタラのくせに強がってんじゃ無いわよ！！)

【君に何が分かる！】

(分からないわよ！それに分かりたくも無い！)

【もう僕のせいで誰かが犠牲になるのは嫌何だ！】

(犠牲に何か成らない！)

【もう成ってる】

（何処が！）

【今は記憶で済んでるが、これから何が起きるか分からない…】

（自惚れてんじゃ無いわよ！誰があんたのために体張るもんか！）

【じゃあ…】

（ゆかりさんのためよ。あんた10年近く待たされる彼女の気持ち考えたことあんの？）

【……………】

（一言でも良い、一瞬でも良い…あんたに会いたいし言葉が聞きたい…そう思うのが普通じゃ無いの）

【……………】

（分かったなら私に任せてのんびりしてなさい）

麗奈は光に溶けて行く。

【分かりたくも無い…か】

「ん…アレここ何処？」

『寮だ』

風「麗奈ちゃんずっと寝てたからね」

瞬「寝過ぎだっつの」

「ふぁあー…良く寝た」

順「おっやつと起きたか眠り姫」

瞬「…なんすかそれ」

風「そういえば、寝言でゆかりちゃんがどつとか言ってたけど何か用事？」

「そうだ、ゆかりさん何処に？」

順「コロマルの散歩に行ったぜって麗奈っち！」

麗奈はまた走り出す。

静まり返る暗闇の中を…

第二章 月光館学園編 Episode 4 伝えたい言葉（後書き）

これからマイペースで突き進みます。

「文才欲しいな」畜生！

第二章 月光館学園編 Episode 5 伝えなきゃならぬ思い

「もうゆかりさん何処行つたのよ…」

少女は、駆け抜ける暗闇の中を行く宛ても無く…

Personaf After Days

第二章 月光館学園編 Episode 5 伝えなきゃならぬ思い

（コロマルの散歩って事は、神社だよね）

麗奈は神社へと向かう。

～第一ステージ 長鳴神社～

どうやら敵はいないようだ。

ドウスル？

戦う

散策

逃げる

麗奈は御神籤を引いた…「凶」精神的に50のダメージをくらった。

「…何やってんだろ私」
麗奈は黄昏れた。

〈第二ステージ 巖戸台商店街〉

人の気配がしない…

ドウスル？

戦う

散策

逃げる

麗奈は逃げました。

〈第三ステージ 巖戸台文寮〉

「結局帰ってきちゃったし…何やってんだろ」

トボトボとした足取りで中に入る。

『帰ってきたか。どうだ？見付かったか？』

「いいえ…駄目でした」

『…そうか』

「だったらさー高い所から探せばいいんじゃない?」

「高い所?」

「そーそ、屋上とか」

「…来てみたけど」

「誰もいないよねーやつぱ」

そんな事を呟きながらドアを開けると…

「……………」

静けさを纏う虚無の中に女性が佇み空を眺めている。

「あれ…麗奈ちゃんどうし「居たー!!」「へっ?」

「探しましたよゆかりさん!」

「えとゴメン…で何で?」

「それは……………」

「?どうしたの」

「…何だっけ?」

「ガクッ」

思わずずっとける

「んーと…とりあえずどんな用だったの？」

「伝言頼まれて…けどそれ忘れちゃ意味無いでしょ私!!」

「ちょっと落ち着いて、ほら月でも見てさ」

「月？」

二人揃って空を見上げる。

「そーいえば何で此処に？」

「んー何だろ…月を見に？」

「月に思い出でも？」

「まあちよつとね」

「へー…恋人？」

「な…何言ってるの！私に恋人なんていないし」

「でも順平さん達…」

「だからいないっての…むしろ募集中」

「…アイギスさんが出会いは有るはずなのにおかしいって」

「アイギス」…」

「それに今の表情…誰か待ってるみたい」

「誰もそんな顔してな……いや、本当は待ってるのかも」

「……………」

「あの日…約束したのにな…」

「…約束…」

「そ、約束したの」

「約束…約束」

「……麗奈ちゃん？」

「そっか…約束」

「ねえ、大丈夫？」

「思い出した…」

「えっ？」

「思い出した！」

「えと…何を？」

「さっきの伝言の内容」

「伝言？…ああ最初に言ってた奴？」

「ゆかり…約束守れ無くてゴメン…って」

「…約束？誰かしたっけ？」

「あーよかつた〜これだけが心残りだった〜」

「ねえそれ誰に言われたの？」

「それが名前忘れちゃって…覚えて無いです」

「どうゆう人？」

「どうゆう？」

「えと特徴とか…服装とか」

「うーんと…制服？」

「制服？何処の？」

「月光館の男子の」

「…学生？髪型とかは？」

「何かキタローみたいでした」

「（月光館の制服でキタロー…）まさかね」

「あと首から音楽プレイヤー…」

「……………」

「ゆかりさん？」

「ああゴメン、分かった伝言ありがと。寒いし中戻ろ？」

麗奈を扉に向かわせ自分も歩き出す。

（まさか君なの？湊君…）

第二章 月光館学園編 Episode 6 突然の休暇

海：そこは、真夏の観光地で有り誰もが一度は行った事の有る場所である。

順「うおーやっと着いたぜ！やーくーしーまー！..」

『相変わらずうるさい奴だな』

岳「わー懐かしい...何年ぶりだろ」

風「前来た時は高校生だったもんね」

天「皆さんテンション高いですね」

凌「海〓水着！？」

瞬「此处にも一人居るけどな」

麗「あんた嬉しく無いの？」

瞬「いや、嬉しいけどさ...」

麗「けど？」

瞬「何でこの時期？」

「3週間前」

美「旅行？」

岳「ええ、三人の合格祝いもかねて」

順「ゆかりっちが言い出すって珍しいじゃん」

『基本お前のポジションだもんな』

順「そうそ、で何処行くん？」

岳「久々に屋久島行きたいなーと思って」

麗「屋久島！？行きたいです！」

瞬「お前まだ合格した訳じゃ…」

麗「良いの！それに桐条先輩だって、この点数なら合格確実だって」

美「確かにそうは言ったが万が一…」

順「行きましようよ先輩！」

麗「先輩！」

美「…水無月、天田」

瞬「俺は、反対っす」

天「僕も、それに今の季節に海はちょっと…」

美「凌辱、アイギス君達はどうか？」

凌「僕は行きたいよ」

ア「私は…止めといた方が良いと思う」

『俺もだ、たとえ合格確定でも落ちる可能性があるなら残った方が
良いだろ』

美「賛成4反対4か…山岸、君はどうか？」

風「えっ私？」

岳「行きたいよね風花！」

風「それは……」

順「ようしんじゃ決……」

瞬「一教師として止め無くて良いんすか？」

風「そうだけど……」

順「瞬！お前！！」

瞬「いや、遊びに行こうとする受験生を教師が止めなきゃ駄目でしょ」

「ワンワン」

順「コロマル？」

「ワンワン」

岳「…何て言ってるの？」

順「俺に聞くなよ…アイちゃん」

ア「……………」

岳「アイギス？」

ア「コロマルも行きたいってさ」

全員「！！！！」

順「ん？待てよ…てことは5対4！」

瞬「風花さん反対何だからデユースでしょ」

順「こうなりや桐条先輩にかかってんな…」

美「まあ待て今結果を調べている所だ」

麗「結果？」

美「ああ…そろそろ来る頃だが」

「Buuuuu、Buuuuu」

美「来たか、どうだ…そうかご苦労、下がって良いぞ」

岳「あの…何の結果」

美「おめでとう西条…合格だ」

麗「えっ…じゃあ屋久島!？」

順「これで心置きなく行けるぜ!」

『反論も無くなったしな。向こうで使う筋トレ器具を…』

瞬「今、筋トレって聞こえたような…空耳?」

順「いや、あの人は空耳じゃ済まないぞ」

く現在く

順「つか良くコロマル思い着いたよな」

瞬「まあ、プライベートジェットくらい持つてるでしょ」

「ワンワン」

ア「コロマルさんも感謝してるって」

瞬「ようし!んじゃコロマル、後で俺に付き合ってくれや」

「ウォン!!」

天「何すんの？」

瞬「別に？ただ犬と海って合うようになって話し、なあ？」

「ワン！」

天「何か怪しい」

こうして屋久島一日目が始まった。

第二章 月光館学園編 Episode 7 突然の休暇 ? (前書き)

自分の思い通りに進まない…何故だ？

第二章 月光館学園編 Episode 7 突然の休暇？

順「んじゃ荷物を置いた所で…早速ビーチに突撃！？」

岳「つてもう行くの？そんな早く準…あれ？前にもこんな事」

天「あつたんですか？」

風「前にも言つてたよね順平君」

岳「まんまあん時だし…デジャヴュかつての」

瞬「つか、今三月つすけど…海入って良いんすか？」

全員「……………」

真「死んだなあいつ」

天「えと…見に行った方が」

瞬「ああじゃあ、凍死してた時のために俺とコロマルで、あと真田さんいりゃ大丈夫っしょ」

天「何でコロマルも？」

瞬「順平さんだけなら俺一人で良いけど凌辱さんもいないからな」
辺りを見回すが凌辱の姿は無い。

岳「いつの間に…」

瞬「んじゃ、行きますか」

「ワン」

真「そうだな」

くビーチ（この辺適当）く

瞬達が砂浜に着くと、打ち上げられた魚のように波打際に倒れる帽子君とそれを突くマフラー（微妙に色落ちしてる）が目に入った。

瞬「あー…見事に打ち上げられたなこりゃ」

「フンフン」

コロマルはかき分けるを使った！だが何も分からなかった。

真「まるで、クジラの座礁だな」

凌「クジラのTheショウ!？」

瞬「おー良く知ってんな凌辱さん」

凌「どんなショウ?」

瞬「んー?そうだな…馬鹿でかいクジラが馬鹿でかい輪を潜るんだ

ジャンプして」

凌「ジャンプして!？」

瞬「そう、そして着水した瞬間大量の水が観客席にザバー!って」

順「そんなシヨウ有るか!」

瞬「あ、起きたんだ」

凌「おはよう順平。でさっきのシヨウの…」

瞬「残念ながら…日本じゃ見れないな」

凌「ええっ!見れないの!」

瞬「アメリカ…いやカナダ辺りなら」

凌「見れるの?」

瞬「…かもね」

順「…ガン無視?」

真「無視どころか、忘れられてるな」

順「ああ…そうっすかじゃあ俺帰り…」

凌「順平!!」

順「ぐうお!」

凌「アメリカに行こう!」

順「お前…腹に、で何でアメリカ?ここで良いだろ」

凌「此処じゃThe ショウが見れない」

真「ショウが何かは知らんが…確かに座礁なら見れるかも知れん」

順「座礁?」

凌「ほら順平!行くよ今すぐ」

順「おい、ちよっ…海パン引つ張んな。それに俺に金無いの知ってんだろ」

凌「ああ!そうだったね」

順「何かムカつくなおい」

瞬「真田さんならお金持ってますよね?公務員だし」

真「まあ男の一人暮らしだからな、無駄な金は使わん」

瞬「真田さんが、アメリカ連れてってくれる…」

凌「本当!?行きましょう!ショウのため」

真「シヨウ？何の出し物……」

真田は、黄色い悪魔に連れてかれた。

順「…何気ひどいなお前」

瞬「あれ？そうですか？」

順「……………」

瞬「まあまあ、助けてあげたんだから」

順「…元はお前が原因だろ」

瞬「そうとも言いますね」

順「……………」

瞬「とりあえず助けたんで、俺の頼み聞いてくれます？」

順「……頼み？」

第二章 月光館学園編 Episode 7 突然の休暇 ? (後書き)

さっさと入学させないと…話が進まん。

「合体奥義？」

驚いたような、でも楽しげな目で俺を見てきた。

「ええ」

「それってアレ？どつかの漫画みたいに“魂の共鳴”みたいな」

「漫画って…俺らも漫画みたいな物でしょ。でもそんな感じですね、合わせるのは魔力ですけど」

「でもさ、そういうの“共通点”とかいるんじゃないの？」

「ああ、有りますよ火炎系っていう」

「……えっそれだけ？」

「それだけって…俺、コロマル、順平さんで共通点なんてこれしか無いでしょ」

「いや、けどよ普通神話とかの繋がり…」

「火の神、地獄の番犬、あと何だっけ…三倍偉大なヘルメス？に繋がってるってこれっぽっちも無いですよ」

「おい、何だその三倍偉大なヘルメスって結局ヘルメスのままなの

俺？」

「さあ？Wikipediaで調べただけ何で良く分からないっす」

「Wikipedia…で何て書いてあったん？」

「えと、錬金術師ヘルメスとヘルメス神とトート神を合わせた物だっけ…」

「錬金術師と神様は分かるが……三番目関係ねえだろ！！」

「知らんっすよんな事…大方めんどくさくなってまとめたんじゃないんです？」

「それにトート神猿だぞ猿、猿なんかとまとめられたくねえ！」

「パロディ要素が…」

「笑いなんか要らん！」

「ハイハイ、そんな事より始めますよ特訓。ほらコロマル起きろ、寝るんじゃない」

「ウウ……」

「順平さん、いつまでも猿、猿言って無い」

「ハア……」

「特訓開始」

「で？どうやんの特訓」

「そりゃ、順平さんが言った漫画みたいに魔力を…」

水無月は力を振り絞っているが…何も起き無い。

「……駄目だなこれ」

「……駄目ですね」

「……………」

「こうなったら直接ペルソナ出してやるしか無いか…」

〈改善案〉

三角形に向かい合いペルソナの魔力を火炎として三角の中心に集める。

「…なあ瞬」

「…なんすか？」

「…これ危なくねーか？」

「危ないですよ」

「いや、危ないってあっさり言うな！」

「俺だつてやりたく無かったけどしょうが無いです」

「ちなみに…どんくらい危ない？」

「……ポ○モンの大爆発くらい（笑）」

「めちゃくちゃ危ねーじゃねーか!？」

「キャン!！」

「ちよつ…力が偏つ」

刹那、ビーチとその周辺に爆音が響き渡った。

「夜」

三人は別荘に向かって歩いていった

「ハアハア…何だあの威力。下手すりゃ死ぬぞ」

「火炎吸収が効かないとか…ガードキルも混ざってたのか」

「キューン…」

「でもよ、初めてにしちゃ中々じゃ」

「自爆で中々じゃ…完成度低くなりますよ」

「へッへッへッ…」

「どうした二人共えらく疲れてるけど」

「どうした？そいつはですね先輩…あんたが最後バランス崩して、俺らの方に爆発が来たんだー!!」

「ウワウ！」

「ちよつ、止めるコロマル…だつはー！ー!!」

三人が騒いでる夜の中、一匹の蝶がこの地に舞い降りた…

第二章 月光館学園編 Episode 9 青い蝶に誘われて…

蝶になった夢を私が見ていたのか 私になった夢を蝶が見ていたのか…

時の狭間、心の狭間で私は何を見るのか

… m e m e n t o m o r i

(……………)

俺は気が付くと良く分からない空間に居た

何も無い空間、その一言に尽きる

一寸先も闇に覆われたこの世界で、俺は何処へ向かうのか…

視界の先に見える淡い光を頼りに一歩、また一歩と歩いて行く…

俺の歩幅に合わせるようにゆらゆらとうごめくそれは生き物なのか…それ以外なのか…

そんな事を考える内に足が止まってしまった俺、ふと気が付くと右手には一匹の蝶

(…あの光の正体なのか?)

その思考を感じたのか飛び去る蝶。だがつかず離れず…俺の視界を優雅に舞う

青い蝶に誘われて…

俺は、何処へ行くのか…

第二章 月光館学園編 Episode 10 夢の迷宮（前書き）

これから5〜6話くらい使ってペルソナ3Mの夢時間やろうと思います。

俺は気が付くと見慣れない場所にいた…

何処かの広場のようだが、誰も見当たらない

「……………何処だ此処？」

周囲を見渡そうと立ち上がると両手に何かの感触があるのに気付く

「……………」

武器だ、これまでの戦闘でも愛用して来た双剣が両手に収まっている

「…何故に武器？おっと召喚器もか こんな持って来たっけ…」

いや、召喚器は持って来たなうん。

武器も持って来たんだな多分…うん、そういう事にしよ」

自己なりの納得をした所で改めて周囲を見回す。

足元にはマーブル状のタイルが敷き詰められており、所々樹の根が張り出ている。

そこそこ大きい広場なのだろう、奥の方は暗がりになっており木が自生してるためちよつとした森を感じさせる。

ふと上を見上げると天高く伸びた木々の枝葉が絡まり天井を覆っており淡い木漏れ日が優しく辺りを照らしていた。

目線を上から戻すと周囲には動いてない時計台や学校の備品が散らかっている。

そのガラクタや木々、床のタイルに木漏れ日が当たる度に反射し何処か幻想的な空間に感じられる。

「ここ何処だよ全く」

…木が生えてるって事は森が山ん中に入っちゃったのか？」

「それにしたらおかしいよな、森にタイル張ったって意味ないしな…」

それから二、三分考えるがある物が目に入った所で思考を止める。

……椅子だ

「うお、これ校長室にある高けえやつじゃん！とりあえず座るとしますか」

（10分後）

爆睡していた。

「えと…起きそつに無いんだけど」

「おい！ミズキ起きろ！」

「こうなったら定番の罰ゲームを」

『止めておけ』

「ああちよっ何でっすか真田さん」

『こいつの腕良くみる』

「腕？」

『何か掴んでる』

「多分…双剣だね」

『ああ、あのまま起こしてたら首が無くなってたな順平』

「…怖っ！！」

「じゃどうやって起こすんです？」

『…遠距離から攻撃』

「じゃ私が」

「まったまったアイギスそんなデカイ銃撃つたらさすがに死ぬから！」

「てことは…私！？」

『それしか無いな』

「岳羽頼めるか？」

「…はい。もうどうなっても知らないんだから！」

一本の矢が彼に向かって放たれた……

結論を言つと、矢は当たらなかった矢は…

だが矢を避けた事により椅子のバランスが崩れ…

「ぐうおー!!」

床に顔面を強打した。

「うわっ…痛そ」

『さて水無月が起きた所で、お前達に説明する』

「何をです？」

「此処が何処なのか」

「先輩達は、分かるんです？」

『ああ、一度来た事がある』

「へー…で何処です此処？」

「オネイロス…夢と時間の狭間だそうだ」

「何か…タルタロスみたいで嫌ですね」

『そうか天田は初めてか』

「…タルタルソース？」

「お前それ食い物。」

タルタロス、ギリシア神話に登場する神であり、かつ奈落そのもの…後生では地獄とされる生きた迷宮だよ」

「…詳しいじゃないか、だが我々の言うタルタロスは違う」

「違う？」

「シャドウと呼ばれる怪物が巣くう迷宮の塔…君の言う通り生きた迷宮だ」

第二章 月光館学園編 Episode 10 夢の迷宮（後書き）

…青い部屋でも書きますか。

「…なるほど、タルタロスが何か分かりましたで此処はどういう場所です？」

「確か…日常に捕われた物が迷い込む夢の迷宮」

「夢？…私達今寝てるんです？」

「ああ、今も寝てるんだが…私達が何かに捕われている限り目覚めないそうだ」

「それって…」

『植物人間の出来上がりだな』

「……………」

「ああ、そこまでは良い」

「…良いんすか？」

『良いんじゃ無いか？本人がああ言ってるんだ』

「……良いんだ」

「問題は…誰が捕われているか」

「誰って…俺ら全員じゃないんすか？」

『一度迷い込んだ奴が再び迷うとは考えにくい』

「ああ…そうなるのだ」

「俺達、か」

美鶴の言葉に肯定する。

「そうだ。ぐづぐづしては居られない行くぞ」

「あつ待ってください!」

風花が全員を引き止める。

『どうした?』

「いえ、その…さすがに一度に全員のサポートは無理です」

「そっか、いつも四人だっけ」

「さすがに仕方ないか…だとすると

リーダーがいるな…」

その一言で全員が目背ける…ただ一人を除いて

「ハイッハイハイ!!お…「明彦、やれるか?」ええー…」

『正直、やる気はしないが…順平に任せるよりマシか』

「…スルーされた上げなされた」

『よし、先行メンバーは俺、天田、水無月、西条だ』

「「はい!!」」

「うゝす」

『…行く「たびたびすみません!」何だ』

「気になった事が…」

「気になった事?」

「あの扉なんですけど」

風花の示す先に青く光る扉がある。

「あれ…あんな扉あつたっけ?」

「アレは…ベルベツトルム!？」

「知ってるのか!」

「ええ…それに、皆さんもご存知のはず」

『俺らもか?』

アイギスは静かに頷く

「皆さん、一度入ったんですから」

（…なあなあ）

（何よ？）

（俺ら入った事あったつけ？）

（…あ、有るんじゃない？）

「…エレボスの時か」

「ん？エレボス？」

『最後ん時だ』

「……最後？」

『もういい、問題は…』

美「誰が鍵を持ってるか」

ア「ですね」

「鍵？」

「ええ、あそこに入るには“契約者の鍵”がいるんですが…」

「アイちゃん持って無いわけ？」

「生憎、ワイルドの力と一緒に」

「そうか…」

「ならさ今、鍵を持つてる人がワイルド？」

『そうなるんじゃないか？』

沈黙

「ねえ、瞬」

「ん？」

「何かさ、タルタロスとか何かの鍵とか分からない事多くない？」

「まあな…ん？ポケット光ってつけど携帯か？」

「え？あっそうかも…あれ？なにこれ、鍵？」

全員「……………」

「アイちゃん…あれ？」

「多分…そうですね」

「じゃあ、これで開くのか…」

「へー…じゃ早速「ガタッ」」

『…どうした？』

「いや…鍵は開いたんですけど「ガタガタッ」」

「開かないのか…」

「ハイ…」

「ふっふっふ…ならオレツチが！！」「ガタッ」…」

順平は凹んだ。

『普通に考えてアイギスじゃないのか？』

「私ですか…」

「可能性はある。やってみてくれ」

「あまり期待しない方が…」「ガタッ」やっぱり」

「次は誰です？」

「そつだな…岳羽、山岸」

「私達だつてさ、行こ風花」
「あっうん」

「どう風花？開きそう？」

「うーん駄目みたい」

「じゃ私か…うっ予想以上に堅い」

「やはり駄目か…明彦はどうだ」

『駄目だ、ドアノブは動くが扉自体が動かん』

「私も駄目だったしな…」

「ふっ… やつと僕の出番が来「バチイ」…」

「弾かれた!!」

「……「バチイ」」

凌辱は順平の隣に座り凹んだ。

「犠牲者が二人に…」

『馬鹿が犠牲になったな』

「天田やってみ」

「えっ俺!？」

「大丈夫だって……多分」

「おい… 今、多分「言っで無いです」…「ガタ」」

「天田も駄目となると…」

『決まっ たな』

「まさかー! そんなどっかの主人公「ガチャ」じゃないんだから…」

周囲が光りに包まれる

気が付くと見知らぬ部屋に居る。

心地好いピアノ

所々青い布が掛かった複数の扉

全体的に青い装飾

そして…鼻の長い老人

『ようこそいらつしゃいました水無月 瞬様』

「ん…此処は何処だ？であんたは誰だ？」

『我が名はイゴール…そしてここはベルベツトルームでございます…ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所…ですが、ここでは夢と現実だけにしましょう』

「ん？なんでだ？」

『あなたが今いるここは夢、夢の中では精神や物質の概念はございませぬ…そしてここもまた夢の一部、今のベルベツトルームにはやはり精神や物質の概念は存在しておりませぬ』

「なるほど…」

『さて、先程拝見させていただいた所…あなたは、これまでの客人同様変わった定めをお持ちだ』

「…というと？」

『そうですな、強いて言うなれば…人になりそこねたピノッキオとでも言いましょうか』

「…………（自分の顔見て言ってるのか？）」

『ところで、ここにはもうひとり住人が居るのですが…あなたには“男の人”と“女の人”…どちらが見えますかな？』

「女の人です」

『…素早いすな』

「そうですか？」

『さて…ご挨拶させましょう』

鼻の長い老人手を指す先そこには

「マリアナでございます…以後お見知り置きを」

青いゴスロリが居た

「マリアナちゃんねよろしく」

「いえ、こちらこそ…ふつつか者ですが」

「えっ？」

「あつ…／／／」

『この娘はまだ半人前でしてな』

「そうですかー別に大丈夫ですよ」

「あ、ありがとうございます」

『さて…長い間お引き止めしてしまいましたな』

「いえ、楽しかったですから」

『では、再び会う時まで…』

周囲が再び光りに包まれる

第二章 月光館学園編 Episode 11 青い部屋の住人（後書き）

新キャラの容姿等のご想像にお任せします。

第二章 月光館学園編 Episode 12 怨嗟の庭カイーナ

光りが収まると先程まで居たマーブルタイトツに戻って来た。

『どうだったんだ？』

出て来てそうそう真田さんが声をかけて来る

「わりと普通でしたよ」

『そうか…ならそろそろ行くぞ』

「了解っす」

真田さんの問い掛けに答え。天田、麗奈と共に切株のような入口に歩いて行った。

Episode 12 怨嗟の庭カイーナ

切株を抜けると奇妙な光景に出会う。

コンクリート質の床と壁が廃墟を連想させる

適当に進みながら周囲を見渡し、口々に感想を漏らす。

「うーわ…予想外だね」

「…何か気味悪い」

「うーん、タルタロスよりもマシか…」

上から瞬、麗奈、乾である。

『三人共お喋りは良いが…そろそろ来るぞ』

真田の注意と共に周囲からグチャグチャ音が聞こえて来る。

前方からシャドウ反応。注意してください

「やつとお出ましか…」

「…ゴクリ」

「さつさと来いや」

敵、後三秒で接触します…3・2・1…敵、来ます！

風花さんのアナウンスの後に目に入っただのは、黒い固まりに青い仮面が付いた変な奴だった。

「えーと…なにこれ？」

「何ってシャドウだ」

「ああ…違う意味でショックだわ」

「まあマーヤだから」

「マーヤ？」

「あれだよあれ」

天田が指指しながら説明する。

「どんな奴なの？」

「シャドウの中で一番『マハラギオン』…弱い」

「あれ…消えちゃった。弱っ」

マーヤタイプは弱いですし…臆病のマーヤはその中で一番弱いですから

「…無駄に魔力使った」

「一桁階はザコだ一気に行くぞ」

「あいあい」

〈5F〉

敵、狂愛のクビト三体アルカナは恋愛です

「さっきから言ってるが…変な外見してんじゃねー！…！」

「弓か…撃たれる前に打つ！」

「先手必勝ですね」

「…私、出番無いや」

〈10F〉

敵、死甲蟲二体アルカナは皇帝です

「やつとまともなのが来たぜ」

「あんまり調子乗っていると「わーっ!」…大丈夫か?」

「…あまいぜ虫けら、その角貰ったー!!」

「G y a a a a」

〈15F〉

「ん?何だ…鳥?」

えーと…ブラックレイブンですね。アルカナは隠者

「鳥だな」

「真田さん…カタカナにしましょうよカラスって」

カラスに反応したのか攻撃して来た。

「クアアァー!!」

「うおっ！キレた！？」

魔力を感知…アギラオですね

「あら？…心なしか俺の方を見てるんですけど」

「ギャー！！」

「やっぱりかー！」

火の玉が飛ばされたが瞬に当たる前に消える

「悪いけど…火炎効かねえんだよ」

言葉の後に跳躍し、ブラックレイブンを真つ二つに叩き割る。

お疲れ様です。それと…5階上に強力な反応があるので注意してください

「強力な反応ね…さっさと倒して戻ろうぜ」

「…山岸。今5階上って言ったな」

はい、そうですけど…どうかしました？

「忘れたのか？確か20階には…」

最初の が居る」

第二章 月光館学園編 Episode 13 漆黒の女神（前書き）

ちよいと“影雪子”参照

〈怨嗟のカイーナ 19F〉

「…やっと付いたな」

「ええ…」

「途中、カブトムシやらカラスやら…はたまた幽霊みたいのに邪魔されたけど」

「あんなのは序章に過ぎん。本番はこれからだ…」

「気合い入れて行くぞ！」

「『おおー！！』」

リーダーの掛け声と共に、俺達は階段を駆け上がった。

〈20F〉

そこは今まで以上に静かで薄気味悪い。

この気味悪さの正体は何なのか分からぬまま廊下に酷似したフロアを進む。

先程のシャドウとは違う…もっとドロドロした、そう

まるで人間の畏怖のような…

E p i s o d e 1 3 漆黒の女神

少し進むと壁に突き当たり、そこに緑色のオブジェが建っている。

「真田さん、何すかそれ？」

「これか？唯一の移動手段だ」

オブジェの足元をいじりながら説明する。

「何処かにスイッチが有るはず何だが…

有里はこの辺をいじってたな」

「あの…真田さん？」

「まあ待て、今スイッチを…ん？思ったより上だな。これなら立た方が早　！？

装飾が邪魔して届かないだと…くっそれで足元からか」

「あの、真田さ」そつとしておこつ」「…うん」

（ 10 分後 ）

「……………やつと付いたな」

「めっちゃ時間食ってるじゃないすか」

「しょ…／＼しょうがないだろう！！いじるのは初めて何だ」

「」「……………」

「あつ　う、うんつ…それより気付いてるか？」

静かに肯定する俺達。今、皆の視線の先には連絡橋の先に有る扉と立ち塞がるように回転する一枚の

ペルソナカード

『あら！！誰かと思ったらあんたじゃない』

「イシユタル！？」

「何かヤバ気だな」

「僕らも行った方が…」

麗奈の元へ行くこうとする二人を真田が止める。

「真田さん！？」

「どう見てもヤバいぜあれは…」

「…二人共手を出すな」

「どうして…!あのままじゃ…」

「…何か有るんすか?」

「ああいうのは自分で乗り越えるしか無いんだ…自分で乗り越える
しかな…」

「真田さん……」

『うーんちょっと違うかなー私は（アルケー）イシユタル…もう
一人のあなたよ』

「…もう一人の、私?」

『そ、もう少し詳しく言うと…あなたの影よお姫様』

「…私の影?どういう事?」

『言ったでしょ影だって、欲望、願望、嫉妬、怨み…みーんな引き
受けるあなたの裏方。故になーんでも知ってる』

「…何が言いたいのか?」

『あなたはずっと待ってた…寂れた都市から私を連れ出してくれる
王子様を』

「!?!?.....何を言ってるの?」

『退屈な日々、変わらない日常、こんなつまらない毎日なんてもう嫌』

「...違う.....そんな事...」

『でもあの日は変わった...だって王子様が来てくれたから』

「...違う.....」

『でも、王子様は私を連れ出してくれただけ...また退屈な日々に戻っちゃう』

「私.....そんな事」

『それで私はまた期待するの今度は二人の王子様が私を連れ出してくれるのを』

「思ってない!!」

『自分に正直に成りなさい、いくら言葉で否定しようが心は否定出来ないわよ』

「...確かに心の何処かで期待してたのかもね。でも、今はそんな事」
召喚器に手をかけ一気に引き抜いた。

「思っちゃいない!!」『イシユタル』

「姫さん復活ってか？」

「無事乗り切ったみたいだな」

「早く行きましょう！さすがに一对一はきつい」

「ああ…そうだな！」

『私に逆らう気？良いわだったら…力付くで認めさせるまで！！』

イシュタルの咆哮と共に黒い球体が飛んで来る。

「（…できるだけ避けて、消費を抑えて攻撃する）イシュタルっ
メギドラ『ッ！』」

『くられ、「マハジオンガ」アアアア！！！』

広範囲に電撃を放ってくる

「（ギリギリまで引き付けて…避ける！！）お願い！『メギドラ』」

『ちょこまかと…目障り何だよおおおお』

黒い衝撃波が周囲に放たれるが…

実際、今の彼女にはこのくらいの攻撃を交わすのは十分余裕だろう…

「（大丈夫、さっきみたいに行けば…避けれる！）」

気が緩みさえしなければ…

「ドッ」

えっ？

「ぐっ……（右足引っ掛けた）」

『やっと捕まえた、お姫様…さあ、死になー!!』

動けない彼女に一本の雷が放たれる。

「……（駄目、この足じゃ避けれない）」

彼女が諦めかけた時…

「パアアア」

「俺を忘れてもらっちゃ困るな」

「その台詞良いつすね」

電撃が弾かれた。

「真田さん！、瞬！どうして…」

「俺らだけじゃないぜ」

「えっ？」

「『イノセントタック』」

『グアアアア！！』

「女の子を虐めるのは、良い趣味とは言えませんか…」

「乾！」

「出たな、エセ紳士」

「エセじゃ無いし、紳士でも無い」

「おおっ、こりゃ失敬」

「けど皆どうして…」

「なーに、人間誰しも心の中に影くらい有るさ…でも問題は影が有る事じゃなくて、影とどう向き合つかじゃねーのか？」

「瞬……」

「何だ今回は真面目だな」

「俺だつてたまにはカツコイイ事言いますよ」

「ふっ……さてメインディッシュが残ってるが？」

「…んで俺に言うんすか？そこのお姫様で良いでしょ」

「…それ恥ずかしいから止めて」

「で…食べる？食べない？どっちだ！」

「…私が元凶何だし責任とるね」

足を引きずりながらゆっくりと歩き　の前に立つ。

「…私の都合で作りに出たくせに、私の都合で消しちゃうなんて、自分でも理不尽だっと思ってる」

『なによ急に…』

「でも、これだけは言う…たとえ此処であなたが消えても私があなたを消させない」

『……………』

「私の中でずっと一緒になる…今度はもう拒絶したりしないから！

だから、今は…安らかに眠って」

『そう…期待してるわ…』

イシユタルは光りの粒子に成り西条　麗奈の体に戻った…

フロアに光りが差し込んで来る…

周囲が徐々に明るくなるにつれ彼女の顔も何処か明るく見えた……

第二章 月光館学園編 Episode 14 偽りの疑心（前書き）

何か駄文の雰囲気

昔誰かが話してた…

「……んっ…」

それは、誰だか知らないが…

(……此処は？)

誰しも一度は聞いた事が有るだろう…

(……えっ…)

目の前の光景に絶句する…

見慣れた建物は崩れ、所々赤い血の様な液体で汚れ、目の前には奇妙な建造物が建っている。

…〇〇の日には夢を見てはいけなくて、なぜならその時見るのは…

緑色の月明かりが辺りを照らす、ふと足元に何かが過ぎる…

「…えっ……そんな…」

そこに有るのは…

精気の無い腕と、見慣れた腕章…

血塗られた災厄の夢

「イヤアアアアア」

第二章 Episode 14 偽りの疑心

「…ちゃん……奈ちゃん」

誰かによつて掛けられる声に飛び起きる。

「ハア…ハア……風花さん？」

「大丈夫？ずつとうなされてたけど」

「ハア…えと、はい。おかげさまで」

麗奈は風花が持っていた水を飲み一息付いた。

「ならよかった…麗奈ちゃんすごいうなされてたから。

よければ、話し聞くよ?」

「…いえ、大丈夫です

(言える訳が無い…だって、

仲間が死ぬ夢なんて)

「そう…なら朝ご飯用意してあるそうだから行く」

「えと…あっはい」

麗奈はラウンジへ引つ張られて行った。

「おはようございます」

「おはようございま…何これ」

「知らん」

「うわっ!!…何だ瞬かゝびっくりさせないでよ」

「……お前が勝手にびっくりしたんじゃないか。人のせいにするな」

「いきなり声掛けるのが悪いんでしょ!!」

「ああ、わりい。……とりあえずお前、邪魔だぞ」

「えっ？」

頷きながら瞬の後ろを見ると何人かつつかえてた。

「じ…／＼／＼ごめんなさい！」

麗奈は逃げ出した…

「さて…全員揃ったか？」

「んー…順平と凌辱がいないな」

「あのバカ共…」

「水無月、伊織はどうした？」

「あゝ…えと、起こそうとしたら枕抱いて「チドリ〜ン」って幸せそうな顔で呟いてたんで置いて来ました」

「明彦、凌辱はどうした？」

「夜中にいきなり、岳羽達の名前を呟きながら出て行ったつきり帰って来なかった」

「「「「……………」」」」」

「ゆかりさん…仕留めたんすか？」

「えっ!! あー……いや?」

（（（仕留めたな）））

「なっ…何よその目線」

「いや、あの色欲魔人を倒すなんて…さすがゆかりさん」

「まあ…自業自得だな」

その時、扉の外から騒がしく例の二人が入って来た。

「急げ凌辱! 朝飯食いっぱぐれっぞ」

「待つてよ順平…朝食でそんな急がなくても」

「バカヤロー! 桐条財閥の朝食だぞ。前みたいに豪華に違いな…
よって食わなきゃそ「グシャッ」」

勢いよく飛び込んで来た順平の顔に真田の拳が減り込んだ。

「ん? あースマン」

「さ 真田さん……何故…裏拳」

順平は崩れ落ちた

「順平————!!」

「背中越しに寒気を感じたんでな、つい」

「反射的に裏拳放ってどうよ……」

ピクピクしながら床に伸びてる順平を見ながら瞬が呟いた時…

「お前はゴルゴか…!」

一人の勇者が居た

()(真田さんにツッコんだ!)()

「れ、麗奈ちゃん?今ツッコムのはちょっと…」
「えっ?」

「今のは駄目だろ」

「……………」

「ツッコミ入れるなら順平さんが崩れた時だろ」
「あっ…そっか」

「て、そっちかよ…!」

「あつ順平さん」

「遅いお目覚めですね」

「つか真田さんにツッコムなつてのを注意したんじゃないのかよ!」

「いや…だって」

そう呟き順平の後ろを指す。

「なあ明彦…ゴルゴとは何だ？」

「確か何かの漫画だったが…詳しくは知らん」

「…何でゴルゴ分かんねーんだー！ー！」

「ちょっと順平！落ち着きなさいよ」

「順平さんストップ！ー！」

「天田！一緒に抑えるぞ」

「わかった！」

…こうして騒がしく時間が過ぎて行った。

「つーか…俺、朝飯食ってねー！ー！」

第二章 月光館学園編 Episode 14 偽りの疑心（後書き）

つなぎの文章の良い書き方が分からん…

どうも水素です。

とりあえず久しぶりな更新のお詫びとこれからもちよいちよい遅れるよ…って言う報告、そして今日未明感想にて報告されたリヨウジのじの字が間違っている点について。

本来「凌時」

現在「凌辱」x

本来ならここで修正作業に入るのでしょうけども……

生憎と時間がなく。

この「凌辱」もリヨウジと読める事、それと都合良く「生き返らした」設定になっているため…

家の凌時君は凌辱君 のまま行く事にしました。（笑）

以上水素でした。

「そついや凌辱お前何で廊下で寝てたん？」

「んゝ…それなんだけどよく覚えて無いんだ」

「…よく覚えて無い？」

「うん昨日のテレビで、やってた寝起きドッキリ再現しようとして…」

「狩られた訳か…」

「…瞬君？言葉が間違つて無い？」

「あれ？そうですかね？」

「お前達、その辺にしろ…」
「コンコンツ」来たか

「お嬢様、朝食の準備が出来ましたのでお持ちしました…」

「分かった、入ってくれ」

古風な木製のドアを開け大小様々なトレイを持ったメイド達が入って来る

「失礼します…本日の朝食はポーチドサーモンとミントサラダをご用意しました。」

付け合わせはトースト、スコーンとカンパーニュが焼けておりますがどれになさいますか？」

「そうだな…スコーンを頼む」

「次にモーニングティーですがセイロンを、ティーセットはウェッ

ジウツドの蒼白でご用意致しました」

「…良い香りだ」

「では、ごゆっくりどうぞ…」

メイド達は下がって行った。

「……………」

「…どうした？食べないのか？」

「……えっ？」

「今の会話…何？」

「料理の説明が何かでしようか？」

「いや、そりゃ分かるよ天田」

「いやーそれにしても桐条先輩マジもんのお嬢様なのね…」

「桐条財閥の社長ですからね」

「前から思ってたけど…社員になると余計に思っちゃうんだよね」

「ちよっとゆかり!!」

「うわっちよっ……すいません!」

だが当の本人からのお咎めは無く、不思議に思ったゆかりが頭を上げると…

「あっこれ旨いっすね」

「こっちのもイケるぞ水無月」

料理をぱくつく馬鹿二人が居た。

「えっ…ええ」

「おお…この雰囲気ですぐに食べる奴が居たとは」

「あの二人には礼儀つて物が無いんでしょうか？」

「二人共少しは遠慮したら…」

「いや良い山岸」

「美鶴が言っただ良いだろ」

「それに食わなきゃシェフに無礼だ」

「あんたの方が無礼だー！！」

「…何で俺が怒られなきゃ」

「いや、此処まで来て駄々こねるの止めましょうや…」

床に正座させられている二名（馬鹿？&筋肉馬鹿）はさておき、テーブルでは談話が繰り広げられていた。

「あつこのスコーン美味しい」

「そーいや料理で思い出したけど…前って確か先輩の手作りあったすよね？」

「ええ！手作りー！！どれどれ！」

「済まないが凌辱今回は無いんだ」

「ええゝ…美鶴さんの手作り」

「ププツ…凌辱、お前凹みすぎ」

「フッフ何か凌辱君見てると学生の頃思い出すな…」

「あの時は楽しかったよねゝ…順平が騒いで、先輩達に怒られて」
「おいおい、俺だけかよ」

「ねえねえ順平」

「お？」

「前来た時は何してたのさ」

「そりゃあ…夏だったから海だろ」

「…ふんふん、なるほど」

「そんなん聞いてどうすんだよ？」

「いやせつかくだからさ、前と同じ事したらどうかな？」

「前と同じ？」

「そ、過去の思い出振り返りましょう！」
「あつそれ良いかも！」

「ええちよつ…ゆかりちゃん？」

「あれ？ゆかりっちがノリ気なの珍しいな…ってちよい待った！！」

「？ 何よ順平」

「お前ら今の時期分かってんのか？三月だぞ、三月！初日に俺が死
にかけたの忘れたのか？」

「大丈夫よそんなくらい…ねっアイギス？」
「うっうん…」

「どゆこと？」

「えと…さっきゆかりに言われてサーモグラフで外見てみたんだ。そしたら」

「何か怖いんだけど」

「海水温とその周辺の温度値が上昇してるの」

「…異常気象？」

「ちよつと違うかな？」

「またまたどゆこと？」

「砂浜に高エネルギー反応が有るの」

土下座組

「ビクッ！」

「？どうした水無月」

「いや、何でも無いっす」

反対側

「ピョ」

「？」

「どうしたの？」

「今、コロマルの耳が一瞬…」

談話組

「エネルギー？何でそんなもんが」

「多分、ここ何日かに誰かが海に向かってエネルギーを放ったとしたか…」

「そんな事…出来んの？」

「普通は無理だけど…」

「けど？」

「ペルソナ之力なら簡単に出来る」

「えっじゃあ…この中の誰かがペルソナを使っただって事ですか？何のために？」

「さあ、そこまでは分かって無いの」

「そのエネルギーのえと…種類とか調べれば誰のペルソナが分かるんじゃない…」

「うん、そう思って調べてみたんだ。そしたら…」

土下座組

（あれ…この空気まずくね？）

「？　どうした水無月？さっきから変だぞ？」
「いえ…いつまで土下座してれば良いんだろうと」
「ふむ、確かにな…」

談話組

「…それは？」

「火災、つまり火のペルソナね」

「火って事は…」

ほとんどの視線が一人に集まる

「……………」

「瞬君…」　「水無月…」

「さーて…散歩にでも行つか！」
「ワンッ！」

「L e t ' s g o …」　「待て！！」

誰かに後ろから羽交い締められる

「ここ数日何してたの？」

「あの…西条さん？その声怖いな…アハハ」
「私、何事も内緒にされるの嫌いな」

締め付けがきつくなる

「背中に何か当たるんですけど……」

「そんな事どうでもいいの」

「……………」

「……………」

「コロマル先に行け」

「ウオウ！」

コロマルは出口に向かって駆け出したが…

「はいコロちゃんこっちな」

「キューン」

ゆかりに抱えられ連れてかれた

「合体奥義？あんたらそんなんやってたの？」

「そんなん言うな！男のロマンだぞ！」

「ワンッワンッ」

「…俺はいつまでこのまま？」

「こうしないと逃げるでしょ？」

「まっさかーそんな事しませんぜ？」

「じゃあ何で体が前に動くのかな？」

「さあー？」

「あの二人、逃げるのを止めるって言うより…」

「後ろから麗奈ちゃんが抱き着いてジャレてるようにしか見えない」

「だが、重心の動き方とかは間違いなく逃走者と捕獲者のそれだ」

「へーそうなんですか…うう、全く分からない」

「でも何でそこまで？」

「まあ、おそらく…意地の張り合いだろうな」

説明組

「ワンツ、ワオン」

「なるほどあなたたち三人の魔力を…」

「で、どうよアイちゃん？成功率何%？」

「…約60%だね」

「えっ…何その微妙な数字」

「だがこれが成功すれば我々の火力不足を改善できるかも知れない…」

「あれ桐条先輩…あんま驚かないんすね」

「ん？ああ水無月から聞かされていたからな」

「なんだ、伝えてたんかあいつ…てつきり怒られるかと」

「…それはそうと実物を見ないと何とも言えないがな」

「えってことは…実演会？」

「どうだ水無月？」

「…俺的には反対ですね」

「ええゝ何でだよ」

「まず、成功率がそんなに高くない事、次にこの技を使うと温度が上昇する事」

「一つ目は分かるけど二つ目は何で？」

「俺らの技は属性が火炎のため必然的に周りの温度が上がる　そのため俺らも含み周りの者は水着になる必要がある」

「それが何？普通じゃ…まさかあんた初なの？珍し「くだらねえ事言ってんじゃねえよ…ならさっきの時に鼻血でも出して倒れてるわ」
なっ／／／あれは…「離さなかったのはそっちだろ…まあ俺的にラッキーだったけどねえ」」

「……／／」

赤い顔で睨みつけてくる麗奈

「…続けるぞゝ。で、そうなるのだ一名集中が途切れる人が出て来

る」

「……………」

「……………」

「順平さん……………」

全員（主に女性陣）の目が順平に突き刺さる。

「何その哀れみを含むような視線は…予想してました的な空気は…
…見んなよ、俺を見んなよ」

「……まあそれで失敗する確率が上がると。それでも良いならやりますけど」

「とりあえず一度見てみないか？」

「そうですね」

こうして一行は砂浜に向かった

水着に着替えて外に出るとそこには…

太陽の光を反射しキラキラと輝く砂浜。

透き通るほどの透明度を誇るエメラルドグリーンの海水。

そして…

今の時期を忘れるほどの気温。

此処に来た人々は決まってこう漏らす…

「…暑っ！！」

と……

瞬「おいおい…何だこの気温今三月だぞ」

天田「いくら屋久島でも…これは」

真田「異常だな」

「キューン…」

男性メンバーのほとんどが意気消沈している中…

順平「前のも良かったが…やはり成長期を過ぎた完成体が気になる」

凌辱「完成体！？」

約二名は元気だった。

天「何であんな元気なんでしょう…」

真「さあな」

瞬「ああー…海入りて……つか日陰から出れねえ」

「キューン」

「お待たせー…って暑っう何これ!？」

順「まず最初は西条選手!女子高生とは思えない素晴らしいボディです」

麗奈「…何あれ？」

瞬「さあ?熱にやられたんじゃないね？」

麗「ああ…なるほど」

「うつわほんと夏みたい…」

順「次は岳羽選手…やはり普段から絞っているのか?あのウェストは健在です!」

岳羽「此処のテント使って良いの？」

瞬(スゲー完全に無視った)

真「良いんじゃないか？」

「あれ?データよりも暑いんじゃないアイギス？」

「うーん…そうかも」

順「おおっと！次は山岸選手とアイギス選手両名の登場です。山岸選手はパソコンを持ったまま、アイギス選手はワンピースという少し変わった姿にそそられます」

風花「……えと」

アイギス「…無視よ」

岳「お疲れ」

瞬「海辺にパソコンって大丈夫ですか？」

風「ああそれなら…いろいろ改造してあるから大丈夫

（そのくらい当然でしょ？）」

瞬「…改造ですか

（あなたのは改造とは言えないでしょ…どうやりやそんなモンスターマシンが出来んだよ）」

風「そう。改造…瞬君もやってみる？やるなら教えるよ？

（あなたも同類でしょ？やり方くらい…）」

瞬「あー、じゃあ帰ったら是非

（一緒にしないでくださいよ。俺はあんたみたいな化け物じゃない）」

風「そう、なら帰ったらね。

（酷いわね人の事を化け物だなんて…まあ良いわ、気が向いたらまた話しましょ）」

天& a m p ;麗「……………」

順「そして、取りを勤めますのはやはりこの人！桐条先輩だ！！」

「ん？なんのことだ？」

岳「やっぱり先輩綺麗」

風「ほんと羨ましいな」

桐条「そっそうか？」

順「さて凌辱さん全員の入場が終わりましたがどなたが好みですか？」

凌「うーんそうだね…岳羽さんも良いけど美鶴さんもね」

順「なるほど…ようし！このままの空気で水浴びTime！」

瞬「止めなくて良いんすかあれ？」

真「ほっとくのが一番なんだが…」

天「あの…真面目に誰か止めた方が」

麗「じゃあ私が「チャキ」」

そう言い召喚器を構える麗奈

瞬「まてまてまて！！ここでメギドを撃つな！砂浜消し去るつもり
「ガルダイン！」か…」

海の方に目を向けると順平達だけ綺麗に倒れてる

岳「たくい加減にしろつての」

瞬「お疲れ様です！姐御！！」

岳「えっ？ちよっ…」

瞬「ほらっ天田！お前もだ」

天「ええ！？」

瞬「すいやせんね全く」「カチャ」とりあえず止めようか「…イ
エッサー」

桐「…そろそろ初めたいんだが、良いか？」

瞬「あつすいません」

砂浜の中央に二人と一匹を残しテントに非難した特別課外活動部

瞬「…さーて、いっちょやりますか」

一気に空気に殺気が混ざり独特な粘り気を生む

瞬「先に言っときますが…失敗は許されませんよ」

順「お…おう」

「……………」

コロマルは真つ直ぐな目で見詰めてくる

瞬「うっし…初めますかね」

コロマルを挟み込むように立つ順平と瞬そして同時に引き金を引く…撃鉄の小気味良い音が虚空に響き三体の虚像が浮かび上がる

それぞれが火球を繰り出しまるで重力場に引き寄せられるかのように集まっていく…

集まった炎は捻れ歪みそれ自体が生き物かのように周囲に暖かな光を撒き散らす。

それに見取れているのだろうか…不意に静まり返った砂浜に一筋の遠吠えが響く

刹那、一時の暖かさを忘れ凶器と化した熱線が空へと突き抜けた…

第二章 月光館学園編 Episode 15 過去と現在（後書き）

合体技のイメージは真・女神転生?の「マグマ・アクシズ」をでっかくした物だと思ってください。

第二章 月光館学園編 Episode 16 “彼” (前書き)

勉強の合間にちまちま書いた物を合成、投稿。

一通り確認しましたが漏れが有るかも知れません。

空に上がる閃光を見て私は何を思ってる？

皆一様に驚いてる

「これは…凄いな」

真田さんが代表した様に呟いたけど私には聞こえなかった。変わりに別の言葉が心に浮かぶの…

『…なんで』

その言葉が浮かぶことに一つの感情に押し潰されそうになる

『…なんで』

私は今どんな顔をしてるのかな？

悲しんでる？悔やんでる？

…こんな事思ってたてき、どうにもならない事ぐらい分かってる

でも思わずにはいられないの…

なんで君は彼を知らないの？

なんで君は彼と一緒にいなかったの？

なんで君は彼と…私と一緒に、戦ってくれなかったの？

『君があの時居てくれたなら…』

頭では分かっている…例えば君と一緒にでも には勝てない事ぐらい

例えば道のり（過程）を変えた所でゴール（結果）は変わらないって

だけど、私の気持ちは……変わったかも知れない！

もっと抗ってほしかった…

最後まで一緒に戦ってほしかった

もっと皆と一緒に生きたかった

君一人増えた所で何も変わらないかも知れない…けど…！もし変わったとしたら！

私は今、此処にはいなかったのに…

『……………』

知らず知らずの内に座り込んだ私、周りを見ても何も無い。そこかしこに闇が広がるだけ…………でも今の私にはちょうど良いかな 皆の顔なんて見れそうも無いし。それに、私の存在理由が解ったから…

「…………ちゃん」

唐突に音が響く。これは…………声？誰を呼んでるの？呼んだって無駄よ、此処には私しかないの。それに、私はこの声に答えられない。答えを知った今、私にはどうする事も出来ないから…

「…奈ちゃん」

私を呼ぶ声が大きくなる。誰？誰が私を呼ぶの？もう…止めて！呼ばないで！！私にはまだ…………

「麗奈ちゃん！」

「…風花…さん…………あれ？砂浜…」

気が付くと闇は消え、砂浜に戻っている。今のは何？幻覚？夢？…………きつとどれも違う、違うって言うるだってあれは…

「ちょっと大丈夫？顔色悪いよ」

「あつゆかりさん…………とりあえず大丈夫です」

「もう、急に顔色変わるから心配したんだから」

「あはは…すみません」

周りを見ると皆心配相に私を見てるのが分かる。

「少し休めば良くなりますから……」

「少して……無理しないでちゃんと休んだ方が良いでしょう。」

「山岸の言う通りだ……西条少し休め、それにこんな所じゃ十分休め無いだろう……よし客間を開ける様手配しよう」

「えっ……いい、良いですそんな」

「何、たいした手間じゃ無い。それに、人の好意には素直に甘えてほしい物だ」

「……はい」

美鶴さんに言いくるめられ、客間に向かうため立ち上がると視線を感じたの。反射的に振り向くと件の三人がいた

『今の……コロちゃんは有り得ないから順平さん？それとも、瞬？』

「……………」

「いつまで突っ立ってんのさ」

「天田……あいつ変じゃ無かったか？」

「あいつ？……麗奈のこと？そりゃ具合悪いんだから」

「いや、そーじゃ無いんだが……悪い、俺の勘違いみたいだ」

「そ？じゃ行こうよ、もう皆戻っちゃったよ」

「……ああ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8726l/>

Persona 3 F ~ After Days ~

2011年5月12日02時15分発行